
コードギアス 蒼の奇跡

con

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス 蒼の奇跡

【Nコード】

N5674U

【作者名】

con

【あらすじ】

皇暦2017年エリア11に二人の少年が戦いに身を置いてる中、新たに目覚める少年ライ 彼の目覚めがエリア11の運命の歯車が動き出した。

EP1 いつもの日常（前編）（前書き）

以前から感想の方にEP1の件が挙がっていたのでようやく出せるようになりました。

短編の方は削除しました。

後はほんの少しだけ以前より追加しました。

どうか、楽しんでください！！

EP1 いつもの日常（前編）

夢の断片1

「王！！北の蛮族どもが……」 誰だ？

「王！！こちらの損害状況は……」 王って誰が？

「王！！兵を集めて参りました！」 兵って何と戦うの？

「王！！……」 なんなんだ…この気

持は…そして嫌の予感がする…ダメだ！そっちはいつちやダメだ…それを言つてはダメだ！！

「皆の者、良く聞けここが正念場だ！ だから…、何を言つつもりだ！やめる！やめてくれ

我々はここを守るために北の蛮族どもを … やめ

てくれー！！

起き上った視界に映つたのは月明かりが照らされているクラブハウスの中にある自分の部屋だった。「……また、あの夢か ここ最近こんな夢ばかりだな…、僕は何者なんだ…本当にここに居て良いのかな？ 誰か助けてくれ…」 僕は首にかけている蒼く輝く丸い宝石が入った十字架を握りながら呟いた。

コードギアス 蒼の奇跡 EP1 いつもの

日常（前編）

僕の名前はライ・アスプルントでこのアッシュフォード学園で生活している。

僕がここに住み始めたの最近で…実は学園に来る前の名前以外全部覚えていなくて…つまり記憶喪失の状態でこの学園に迷い込んでそのまま倒れってしまったのがことの始まりだった。

そんな僕を見つけ、看病してもらい僕に居場所くれたのがこのアッシュフォード学園の生徒会の人達だ。正直、こんな記憶がない自分を看病するだけでなく学園に住まわせてもらうだけでなく学園生

活を送らしてもらえないなんて、本当にいくら感謝しても足りないくらい感謝している。だから、こんな僕にでも精一杯恩返ししようと励んでいる。顔を洗い制服に着替えて自分の部屋にでて一階にあるリビングルームに向かった。そこには、三人の話声が聞こえてきたので僕はいつものように挨拶をした。

「おはよう！」

「おはようございます！ ライさん！」

「おはようございます！ ライ様！」

「おはよう！ やつと起きたのかライ？ 相変わらず酷い寝ぐせだな」

ここに居るのは目が不自由で車いすで生活しているけど、誰よりも人のことを思う優しさもつ女の子ナナリーと最近リヴァルから聞いた重度のシスコン？で体力は女子にも負けるくらい情けなく、授業はよくサボル上に皮肉こめたしゃべり方する癖のある人物だけど、根はナナリーと同じように優しい人物のルルーシュとこの二人のお世話するメイドさん咲世子さんだ。僕がここに住むようになってから朝はこんな感じで始まる。

「そう言うルルーシュは髪は整ってるね〜学園生活もそのぐらい整ってくれば良いのに…」

「それとこれとは関係ないだろう！！」

「でも、ライさんの言うとおり、お兄さまのサボっている噂は私も良く聞きますわ」

「そうですね…こつもサボリ癖が治らないのでしたらルルーシュさま、これを機会に頭を丸めてお寺で修行に励んだ方がよろしいのでは？」

「ハハハ！ 咲世子さんそれは無理だよ〜 ルルーシュのサボリ癖を治すのは体育でスザクに勝つぐらい無茶だよ！」

「たしかにお兄さまが、運動面で勝つところは想像つきません」

「そうですね！ ルルーシュさまが体力面で勝つことは想像できませんね！」と僕とナナリーと咲世子さんは必死にこらえながらも笑

っていた。

「そこまで、笑うことはないだろう！ あんな体力バカと渡り合えるのはお前ぐらいだ！！」といったものように叫んで言った。そんな会話しながら咲世子さんが作ってくれた朝食を食べて彼女との待ち合わせ時間が近づいていた。

「あつ！カレンと待ち合わせしてんだ！ごめん、先に行くね！ それじゃ！行ってきます！！」と急いで玄関を出た僕を見送っていたルルーシュたちに手をふりながらカレンとの待ち合わせ場所に走って行った。

「フツ 学校でまた会うのにな あいかわらずだな」

「でも、ライさん、最初に来た時よりも明るくなりましたよ！」

「そうだな、最初は表情も行動も他人行儀の態度だったからな…それにナナリーだけでなくスザクも生徒会のメンバーも以前より明るくなった気がする」

「はい！ ライさんのおかげです！」 ナナリーは無邪気な笑顔で答えた。

「それじゃ、俺たちも学校に行くしたくでもするか」

「はい！お兄さま！！」 ルルーシュ達はクラブハウスの中に戻っていた。

一方待ち合わせの公園

僕はこの間ミレイさんから貰ったバイクに乗って待ち合わせ場所に着いた。

噴水近くにあるベンチに座っている紅い髪の彼女に声をかけた。

「ごめん！カレン遅れて！！」

「いいよ！私も今来たところだから、それにしてもそのバイクがっこいいね！ライに似合ってる。」

彼女の名前はカレン・シュタットフェルトで僕のお世話係として僕の記憶の手がかりを探すのを手伝ってもらっている。 最初はお

互いに余所余所しかつたが今では学校外でも親しくなるくらいだ。

「ありがとう！ それじゃ、このあたりをツーリングして学校に行こうか？」

「ええ！ 河川敷のあたりを通って行きましょう！ あそこなら学園の近いから」

「わかった、はい！ ヘルメットかぶってしっかき？ まってね！」

「ええ！ 安全運転でたのむわよ！」 僕が渡したヘルメットをかぶり僕の腰にしっかきつかまった。

「了解！ それじゃ行くよ！」 僕はヘルメットをかぶりエンジンを吹かして河川敷向けて走り出した。

「しかし、風が気持ちいいな、リヴァルがハマるのわかる気がするよ。」

「そうね、天気も良いし、朝はこのあたりは車も人通りも少ないから静かで良いわ」

「そうだね、…あのさカレンさえ良かったらまたこうやってドライブしない？」

「えっ！？ あの…それはデートの誘いってことで良いのかな？」

「ノノノノそうなるのかな… 自分から誘い出したのに改めて考えると何だか照れくさい思いたな… それに最近、生徒会や軍で忙しいから」

「軍…ねえ、ライ？ あなたも戦場に駆り出されているの？」

「いや、僕もスザクが所属しているのは技術部だから戦場に駆り出されていることはないけど、書類作成や政府の報告書の提出の往復やナイトメアの整備の手伝いで忙しくなってるのは本当だけど…」

もちろん嘘だ。僕とスザクは世界で二機しかない第七世代のKM F<ナイトメアフレーム>のテストパイロットのため戦場に駆り出されている、もちろんこのことを話さないのはみんなに心配かけたくないからだ。

「そう…なら良いんだけど、あんまり無茶しないでね！」

「そんなに無茶のことしたかな？」

「何言ってるの!? ルルーシユやスザクや私の分の生徒会の仕事をやりながら軍の仕事をやってる時点でも十分無茶よ!! それにゲッターに行つた時にテロの攻撃の騒ぎの時に無頼に乗り出すし、

この間なんて理科室が火事の際に火の中に飛び込んで私を抱きノノ抱きかかえて三階の窓から飛び込んで着地するわ!! そんな行動する人を無茶と言わないで、なんて言うのよ!」と溜息まじりに言つたカレンだつた。

「うーん、そう聞くと無茶してたのかな?」

「はあ、ライはもうちょっと自覚したほがいいわよ、このままだといつか体壊すわよ!」

「今度から気をつけるよ… あつ! 学園に到着!!」 僕は学園の正門前にバイクを近づけカレンを下してバイクを駐車場に置いてカレンと一緒に教室に向かつてゆつくりと校舎の中庭を歩いて行つた。

「よっ!! お二人さん仲が良いね」

「本当に仲が良いね私もいつかこんな風に登校したいなあ」

「みんな、おはよう! 相変わらず二人とも仲が良いね」つと後ろからリヴァルにシャーリ、そして僕と同じ軍に所属しているスザクがやって来た。

この三人はルルーシユとナナリーとカレンと同じくアッシュフォード学園の生徒会のメンバーで、リヴァルはお調子者の所はあるけど、友達思いでミレイさん一筋の良い奴だ! そしてシャーリはまっすぐで明るい元気な良い子だ! 最近ルルーシユと喧嘩して他人ごっこをしてあまり良くないが、依然ルルーシユのことをルルつと読んでいたんだけど、早く仲直りをして欲しいと思う。

そして、スザクは僕と同じ特派のKMFのパイロットだ。僕の記憶の手がかりにっつとスザクの進めで特派に訪れたのがこの始まりで、特派の上司のロイドさんに気に入られてそのままの流れで特派に入ってテストパイロットとして働きました。そんな訳か、カレンと同じで学校外で共にする友人の一人だ。スザク自身は真面目で優しいけど頑固で融通が利かない所もあるけど本当に良い奴だ。

「おはよう！とらえずからかうのやめてくれよ！みんながそんな調子じゃミレイさんがまた、とんでもない企画出してきそうだよ！」

「そうよー！！ この間なんて（ミレイ）アツシユフォード学園ベストカップルの写真を取ってきてください！！特に生徒会に所属しているライとカレンのラブラブな写真を撮ってくれた人は部費を10万あげます！それではレディー にゃー！！なんて企画のせいで私とライはさんざんだったわよ！！」

「……まああれはひどかったなあ……生徒会メンバー以外の全校生徒が一斉にライとカレンを追いかけてまわしてたもんなー」

「アハハ…… たしかにあれはパニツク映画もんだつたね……見てる私達も怖かったわ……」

「……そうだね、 僕もあんな怖いもの見たの初めてだよ……」

「うん……あの騒ぎで警察も来るぐらいだったし……さすがのミレイさんもあやまって来たし、しばらく僕とカレンの生徒会の仕事無かったし……お詫びについてあの時乗ったクラブハウスにあったバイク貰ったし良かったけど……本当に大変だった。」みんなあの時イベントを思い出し苦笑いだつた。

「何こんな所でだべってるんだ？ 早くしないと遅刻するぞ！」つとさらに後ろの方からルルーシユが来た。

「あつ、ルルーシユ！って本当だ！！みんな急ごう！！」僕はカレンの手を引きながら走つた。

「ノノノちよ！ライ待てよ！！」 「つてライ俺達も置いて行くな！！」 「ちよつと待ってよ！三人とも！」 「ルルーシユ！！ 急がないと！！」 「待って！ スザク！ おまえのスピードで袖に掴まれたらこる……！！」 僕達はスザクがルルーシユの制服の袖を掴んで一緒に走つて……いや、途中から何か引きずって走る音に変わり悟つた『……ルルーシユ安らかに眠ってくれ』 途中助けを求めめる声が聞こえた気がするが、……気のせいだろう、さて今日もこうして学園の朝を迎える

昼休み 庭園

「はい、今日もお弁当作って来たから!!」カレンは青いお弁当袋に入ったお弁当を僕に渡してくれた。

「ありがとうカレン! いつも悪いね」

「良いのよ、私自身が楽しんでやってることだから」

「ありがとう、今日は……から揚げと卵焼きにこの茶色のは何だ?」

「あ、これはきんぴらごぼうね!」

「へえ〜日本の料理って色んなのがあるだね〜それじゃ〜いただきます!」僕はきんぴらごぼうを箸をつけた。

「どう? 味付けダメだった?」

「おいしいよ! このきんぴらごぼう!! カレンは本当に上手だね!」

「えっ!! / / / / ありがとう! また作るね!」

「良いわね、これぞ! 高校生活の青春だわ!!」

「ミレイちゃん、せっかく二人きりなのに邪魔しては悪いよ!」

遠くからミレイさんにニーナが来た。この二人も生徒会メンバーでミレイさんがこの生徒会長を務めている。ミレイさんとはにかくパワフルでよく思いつきでイベントを立て、僕とルルーシュをよく悩ませた。だけど、みんなのことを気にかける優しさや気づかいができる人だ。僕自身もミレイさんがこのアツシユフオード学園理事長の孫娘のご厚意でこの学園に通えている。もう一人、ミレイさんの影に隠れているのがニーナだ。正直、人見知りな彼女が記憶喪失の僕を警戒して、あまり喋れなかったが、最近になって少しずつだけ喋ってくれるようになった。

「ミレイさん達もお昼ですか?」

「まさか、二人の様子が見えたからちょっとからかいに来たの」

「会長! いい加減にしてください! この間のイベントで懲りた

んじゃないんですか？」

「あらあらカレン良いの私にだけそう言って？」ミレイさんは庭園傍の柱に注目した。

（ちょ！ 押ないでよ！リヴァル！！）

（仕方ないだろ！ 前が見えないんだから！！）

（おい、俺は帰って良いか？）

（そうだよ、ライとカレンに悪いよ！）

「何が悪いんだ！ み・ん・な・！」僕は声の聞こえた人達の背後に回って笑顔で答えた。

『……………すみませんでした！

！！』リヴァル、シャーリ、ルルーシュ、スザクがすぐさまに土下座をした。

僕達はしばらくの間、いつものように他愛のない会話で楽しんでいた。この日を境に僕の日常が崩れ始めていた。

後半につづく

EP1 いつもの日常（前編）（後書き）

ようやく、EP1を連載の方に書いてよかったです。
こう言った形で助けてもらいえると助かります。
こう言ったご指摘をこれからもお願いします。

EP2 いつもの日常（後編）（前書き）

何とか1と違和感がないように作りました。
んでください。

それでは楽しんで読

…おそらく自分の記憶の夢だと思う」

「本当に！？　どんな感じだったの？」

「はつきりしたことはわからない…今、わかっているのは何かと戦っていた…そして、そのための力を欲していたぐらいかな…」正直自分の記憶がわかってきたつと言っより謎が深まるばかりだ。

「何だか随分物騒な夢ね…家族のこととかわからないの？」

「残念だけど、顔も名前も思い出せない…ただ」

「ただ？」

「ルルーシュやナナリーを見てどこか懐かしい感じがしたんだ…多分僕にも妹がいたんだと思う。」

「そうなんだ…ライがお兄さんなら優しいお兄さんよ！」

「そうかな？　良く分からないけど…カレン　今の話はみんなにはまだ話さないで欲しいんだ。」

「どうして？　ようやくライの記憶の手がかりを見つけたかも知れないのに」

「正直、今の段階で話しても混乱するだけだし、それに今、学園祭の取り組みで忙しいのに、このこと話したらみんな必死に僕の記憶の手がかりを探すと思う…僕のせいでみんなの足を引っ張るのは嫌だから…」

「そう、わかったみんなに話さないでおくね…でもライ！　もう少しみんなに頼っても良いと思う。」

「いや、でも」

「でもじゃない！　あなたはみんなから慕われてるのあなたが距離を取られると私達のこと頼りにされてないのになって思うし、何より、あなたがこの生活に不満があるじゃないかって…」

「そんなことはない！！　僕はみんながありがたのままで接してくれるから僕はここに入れるんだよ！　さっきの記憶ことは僕自身が怖いんだ…夢で見た記憶が本当の記憶だったら　僕は…僕は…」そこから先の言葉は口に出せなかった。　もし口に出したらすべてが壊れそうで…　そう考えると体が震えだした。

「大丈夫！ みんなあなたのことを拒絶なんてしなから、信じて！」
「カレンは震える僕を優しく抱きしめた。」
「ありがとう。カレン！ 少し落ち着いたよ。」
「こんなことで良いならいつでも良いわよ！」　　と優しく微笑む彼女の表情に僕の心の不安が少しずつ癒されてる気がする。そんな温かい空気に水を差す一本の電話が鳴り響いた。
「もしもし、セシルさんどうしたんですか？ えっまたですか？ はあ〜わかりました。スザクは…もう行ってますか…わかりました。政府の方は僕が行きます！」　　と携帯の通話ボタンを切り重い溜息を吐いた。
「軍の仕事？」
「うん…じゃあ〜先みんなに甘えることだけ…今日僕がやる分の生徒会の仕事を頼んでいいかな？」
「それは甘えとは違う気がするけど…わかったわ、生徒会の方は私から言っとくわ！」
「ありがとう！ それじゃカレンちょっと行って来る！」　　僕はそのまま廊下に出て急いで行った。
「いや〜熱いね！」
「！？ か 会長？ いつから居たの？」
「大丈夫！ みんなあなたのことを拒絶なんてしなから、信じて！　　」と言う甘酸っぱいことをしてるあたりかな〜」　　と会長はカレンのセリフを再現しながら語っていた。
「ノノノノみんなには言わないでください！」
「さすがに言わないわよ、せっかくあなたのことを信頼し始めてるライを裏切る形になちゃうからね〜」
「会長…ありがとうございます！」
「ハイハイ！ それじゃ、残りの仕事もがんばりますか！」
「はい！　　そう言えば会長はなんであんなところに居たんですか？」
「あ〜先、スザク君が軍から呼び出しがあつてなんだかね〜ものすごくあわてたから、ライ君も応答があるんじゃないかな〜っと思っ

て連絡と二人の様子が気になってたら案の定ことが起きてたわけよ」
「はあ、そうですか。そう言えばライの様子も変でしたね？」カレンは窓の遠くの景色を夕日の景色を見ながらライのことを考えていた。

一方政庁

ライはバイクで政庁に来てすぐにある部屋に向かった。

「スザク、早く戻ってきてくれよ。さすがにこれ以上はキツイ！失礼します！」僕はノックをして部屋に入った。

「ライ・アスプルント准尉！ただいま、参りました。」そう僕が今から行うのはエリア11の総督であるコーネリア皇女殿下の説得である。

「ほお、随分早く来たな。まあ、良いお前を呼び出したのは他でもない。またユフィがここから抜け出した。」言葉以上に何かドス黒いオーラがコーネリア総督から感じる。

「またですか？ いやさすがユーフエミア様ですね。この警備の中からどうやって抜け出しているんでしょうね。」

「御託は良い、私が言いたいのはお前と枢木がユフィを外に連れ出すの手伝ってるのではないか？と言っている！」

「なぜ私達がユーフエミア様を外を連れ出す手伝いをしてるって思ったのでしょうか？」

「それはな、ユフィの抜け出すパターンが毎回毎回変わっているからだ！」

「それだけで、私達を疑うのいくらなんでも酷くないでしょうか？それにユーフエミア様も皇女様ですから民の暮らしを見るべくここから抜け出すために日々観察しているのではないのでしょうか？」

「ほう、すると何か？ユフィは忍びで外に抜け出すためにこの政庁の警備を観察して外に抜け出してるって言うのか？」

「現実的に可能性を述べたまでです。」

「そうか、しかし、ここの警備はそう容易く抜けられないようになってはいるはず、とてもじゃないがユフイ一人で考えだけで抜け出せるものではないがな」

「ですが、脳のある鷹は爪を隠すって言葉があるじゃないですか、きつとユーフェミア様も陰で必死に努力しているんですよ、きつと、さすが副総督のことだけあってすごいですね」

「殿下！ユーフェミア様の件の方はこの件の後でよろしいのでは」
つとコーネリア総督の騎士のギルフォード卿が僕に助け舟を出してくれた。

「…そうだな、こつちの方が重要だ、お前に頼みたいのはユフイの騎士についてだ！」

「騎士ですか？ そう言えばユーフェミア様は専任騎士がいませんね、もしかしてユーフェミア様に騎士を持つように説得するのでしょうか？」

「呑見込みが早く助かる…そうだ！！ここの所エリア11でのテロ活動が活発かしている。しかも敵の数と規模を収まるどころか日に日に増している。そんな状況だ、ユフイにも騎士ぐらい付いとかなないと不安だからな。しかし、ユフイは先日まで学生だったせいかな副総督の自覚が足りない騎士でも持てば少しでも自分が置かれている状況が分かって大人しくなると思うが…」

「わかりました。私の方から話してみます。騎士候補の資料等はございますか？」

「ああ、こちらが資料だ、私とダールトンが調べた資料だから、わからない点があれば聞いてくれ！」

「ありがとうございます。ギルフォード卿！！それじゃ…」
つとコーネリア総督のデスク電話が鳴りだした。

「私だ！！ そうかユフイは無事に政庁に到着か、ご苦労だった、引き続きにユフイに部屋から出ぬように伝えてくれ、今からライ准尉が書類報告があるからと伝える！！ 以上だ！！」

と受話器を置いて一瞬、安堵の顔したがすぐにいつものキリっとし

た表情に戻る。

「そう言うことだ！おまえはそのままユフィの部屋に行き今のごとを説明しろ！」

「イエス・ユア・ハインス！」と僕は一礼して部屋を出つてユフィの元に向かった。

「それにしても、良かったのですか？」

「何がだギルフォード？」

「彼にユーフェミア様の専任騎士にすれば良かったのではと、私とダールトンは考えていましたが。」

「はあ、なぜ私がユフィの騎士にあいつを推薦をしなくてはならないのだ？」

「そうですか？ユーフェミア様と久しく、ナイトメアの実力もあり、戦術と政治の知識は豊富の上に人柄もそう悪い者だと思いませんか？」

「わかつている！ あいつが優れた軍人であることは私も認めている。だが私やお前達の推薦からだと周りの者が納得しないだろう。それにどうという訳か、あいつと枢木がユフィの近くにいと虫が好かんだ！」

「…そうですか それでは娘の近くにいたる男を好かない父親みたいです…」

「何か言つたか？ギルよ！！」

「いえ！何も！！ 二人とも…頑張ってくれ！！」ギルフォード卿は秘かに二人のことを応援しながらも、コーネリア総督にある一件の書類を報告していた。

ユーフェミア様の部屋

「…つとということなのでこちらの資料で候補の方を選んでください！」僕は先ほどコーネリア総督の伝令を伝えるのとギルフォード卿から貰った資料を先ほど脱走騒ぎの中心人物のユーフェミア副総督に渡した。

「はあ、やはり、選ばなくてはならないですね。」ユーフェミアはやはり、あまり快く思っていない様子だった。

「だけど、ユファイ！ 総督の心配はもつともだよ！」っと先ほどこのお姫様を無事発見したスザクは総督の考えを進めた。ちなみにユーフェミア様のご意向でプライベートの時にはユファイと読んで欲しいため、僕達としては中々なれない思いだった。

「まあ、こう言うことは焦って決めることじゃないので、ユファイが納得いくまでゆっくり考えたら良いと思う。」

「そうですね。しかし、騎士を選ぶ基準は何でしょうか？」

「うん、人によって基準は様々ですけど、僕の意見としてはユファイ自身が最も信用する人物が良いと思う！ スザクはどう思う？」

「僕もライと同じだ！ 騎士の基準と言われてもわからないけどお互いの信頼関係がないとダメなのは確かだと思うよ！」

「信頼関係ですか？ そうですね。この件はゆっくりと考えてみます。」

「それが良いと思う。それじゃ、僕たちはこれで失礼します。」僕とスザクは一礼して部屋に出て政府の正面玄関出ってバイクが置いてある駐輪所の方向にゆっくり歩きながらしゃべって行った。

「はあ、ところで今回はどこまで散策してたわけ？」

「いや、今日は公園の露店街に居たからすぐだったよ。」

「こう何度も抜け出すとは思わなかったよ。」

「えっ、ライ！ まさかユファイの手伝いしてたの！？」

「誤解を生む言い方はよせよ！！ いや、自分は姉上のようなことはできないから、せめてこのエリア1がどういう状況か自分の目で確かめたいって言ってたからちょっと知恵を授けたんだけど。まさか、あそこまで流用するよは迂闊だったよ。一応SPの人達にも対策案は出しているが元々の抜け癖せいなのかその才能が昇華させたい。」

「アハハ、そうだねユファイも一度言いだしたら聞かないからな。」

「お互い苦勞が絶えないな。まあ、先の騎士の件は僕としてはユフ

「イの騎士はスザクになつてもらいたいけど」

「そんなこと出来るわけないだろう？ 僕は名誉ブリタニア人なのに」

「あながち否定は出来ないよ。それを言うなら本来身元が分からない僕と日本人のスザクが世界で二機しかないナイトメアのパイロットになつてるんだから」

「確かにそうだけど…今回はかりはそうはいかないだろう…第一総督が納得されない」

「…今回に関しては総督の意見を優先じゃなくてユフィの意思を尊重なんだから… それにスザクが騎士になつたら少なくとも僕が政庁に行く仕事が減つて助かるんだけどな」

「ライ！ まさかそっちが本音じゃないのか？」

「アハハ！ バレた？ それもあるけどユフィ自身がなんとなくだけど…スザクに自分の専任騎士しようと考えてると思うのは本当だと思う」

「そうかな…騎士になるってことはユフィの警護だけでなく、全面的にバックアップするんだろう？ それだったら、ライの方が向いてるじゃないか？」

「それはないよ」

「えっ！？ 何でそうはつきりと…まさか、自分には実力が無いからとか言わないよね？」

「そうじゃない…そうだな…あえて言うなら戦術家の感かな？」

「プツ！ライ！何か会長みたいだよそれ…」と笑うつばにでも入ったのか必死にこらえながら笑うスザクに自然と僕もつられて笑っていた。

そんな僕たちの様子をユフィは部屋の窓から微笑みながら眺めていた。

「あれ？ 電話だ、もしもしルルーシュ？ どうしたの」

「ライか？ 軍の仕事の方は済んだか？」

「うん今終わつてスザクと一緒に帰る所だ！」

「そうか、実はまだ生徒会の仕事がまだ終わってなくてなあ… 今から学園の方にスザクと一緒に来てくれ！」と僕の返事を聞く前に電話の電源を切った。

「ルルーシュからかい？」

「うん！ 生徒会の仕事がまだ済んでないみたいだから僕とスザクに来てほしいみたい。」

「そうか、それじゃ僕達も行くか？」

「そうだね！ じゃあ！僕のバイクに乗りなよ！ その方が早いから！！」僕は近くにあった自分のバイクにキーを回してヘルメットをスザクに渡した。

「ライのバイクに乗るの始めてだな〜ライはもう運転慣れてるの？」

「うん… 会長の企画のおかげで…」 そう、僕がバイクを乗りこなせたのはあの企画で生徒会のメンバー以外の全校生徒から逃げている時にこのバイクを見つけて乗って逃げていくうちにバイクテクニクがついたのだった。

「ごめん、嫌なことを思い出させて…」

「そう思うなら学園に行ったら僕以上に頑張ってくれよ〜」

「ああ！わかった！！」スザクは受け取ったヘルメットをかぶり僕の後ろに乗った。

「それじゃ生徒会室まで行くよ！！」僕はアクセルを全開に政庁から出って生徒会が居る学園に向かった。

学園 生徒会室

「会長遅れてすみません… 何ですか… これは」僕とスザクが生徒会室を見て思ったのは昨日見た書類の量の何倍にも増えていて、みんなの目が疲れきっている状況だった。

「実はね、リヴアルの奴が企画の見積もりを間違えてね、よりによって各クラスの出し物予算に誤差が出つてもんだからクレームの書類が出つてその処理をしている片割れで場所取りのミスとか〜あ〜〜！！！！もう！！考えるだけで！！いやになる！！！！

「！！！！」 少々錯乱状態のミレイさんをみてリヴァルが申し訳なさそうにミレイさんに土下座をしていた。

「わかりました！ それでルルーシュ！僕達の役割は何かな？」

「そうだな、ライは俺と見積もりの再チェックと予算の誤差の修正の処理の手伝いだ！ スザクは俺とライが作った書類を会長の印を貰い次第に出し物のする店やクラスを渡して二ーナが作成した原稿文で説得してくれ！」

『了解！！』僕とスザクは返事次第すぐに動き出した。その後、みんなの協力で1時間ちよつとで作業が終わり始めた。

「これでラスト〜〜〜！」ミレイさんが勢いよくハンコ押しして作業終了の合図とともにナナリーと咲世子さんが夕食を持ってきてくれた。

「みなさんお疲れ様です！ 今日は咲世子さんのスペシャルメニューです！」

「うわ！？ もう8時半かよ！ そりゃ〜お腹すくわけだ〜」

「ちよつと！リヴァル！！ 誰のせいでこうなったと思ってるの？」

「そうよ！ リヴァルせいでこんなに遅くなったんじゃない！！」

「おかげでクタクタです……」リヴァルはミレイさん、シャーリ、二ーナにそれぞれに文句いわれ再び土下座をしていた。

「まあ、今回はお前せいだから仕方ないけどな。」

「それ…普段あまり手伝えない僕たちが言うセリフじゃないっと思っけど…」とルルーシュとスザクのいつもの他愛のない会話をみながら僕はみんなの様子を見ながら思っていた。

僕の過去はこんな風に笑いあっていたのかな…もしもつらいだけの過去だったら…もし…みんなに危害をくえる人物だったら……どうかこのまま思い出したくないな…

「はい！ ライ！！ お疲れ！！」カレンは生徒会の冷蔵庫からオレンジジュースをコップに入れて持って来てくれた。

「ありがとうカレン！ そして お疲れ！」貰ったジュースでカレンと乾杯して飲んだ。

「また、考え事？」

「ちよつとね…いつまでもワイワイ楽しんで暮らせたら良いのになあ…ってちよつと感傷的思ってたね…」

「どうして、そう思っただの？」

「いや、軍に働いてるさ、こつ僕達の居る環境はすごいバランスで保たれていて一歩でも傾けばすくにも戦場になる可能性があるからさ…だからなのかなあ…このみんなという時間を少しでも長くいたいって日に日に思うようになってたから」

「そうね…当たり前前のことは簡単に消える儂い時間なのは…なんとなくわかる」カレンは表情が悲しそうな表情で外に映る景色で遠くを見ていた。このときのカレンは遠くの誰のことを思っていたのだろうか？

僕がそう考えている間にカレンはこつちを見て何かを言おうとした瞬間にまた僕の携帯が鳴りだした。

「ごめん！カレン！！」僕は一旦生徒会室を出つて渡り廊下の方に逃げるように走っていた。

「……バカライ！！」と小さく呟いたカレンことは知らない。カレンが何を言おうとしたかは知らない…ただ…何故だろう…今、カレンが言おうとしたことに答える自身がなかった。とりあえず、このことを考えるのはやめて電話をかけてきた本人に折り返しかけなおした。

「もしもし、ユファイ…騎士の件で何か決まったの？」

「ライ！ 私は何も言ってますんよ？」

「大体のことは予想がつくよ！ それに騎士の件以外で用があるならスザクに話すと思うし、まあ…そのスザク件でしか僕には来ないけどね…」

「もう！ ライはいじわるです！！」

「ハハハ…すみません！！ ですが、スザクの寝顔を撮れやアーサと遊んでるスザクの写真を撮ってくれなんて言われているのですから、そう思われても仕方ないのではありませんか？」

「／＼／＼それは、あなたの仕事ぶりを確かめるためです！」

「よくそんな白々しい嘘が言えますね…まあ良いです。それで本題の騎士の件は方向性は決まりましたか？」

「そのことですが…ライ！ あなたは私が信じれる人に騎士を選ぶべきだと言いましたね」

「はい！ 騎士は使える人の剣であり盾となつて主人に仕える存在です。なので本来の騎士の基準はこのブリタリアと同じく強い存在でなりません。だけど、力がある無しより、僕は絶対的な信頼関係の方が大事だと思います。」

「なぜですか？」

「どれだけ力があるとしてもユファイがその人がユファイの望むことと違うことをする人に命令ができますか？またそんな人に命を預けますか？」

「それは…」

「そう言うことです。ユファイ自身が信用できると思わなければ主従関係は上手くいきません。」

「主従関係なんかで私は選びたくありません！！」

「結論出つてるじゃありませんか？ そうですよ、あなたが欲しいの主従関係としてでなくパートナーとしての騎士が欲しいのではありませんか？ だったらリストの中から探すのではなくて、ユファイがしたいようにすれば良いのです。」

「…なんだか、凄い話が出ましたが、そうですね私の専任騎士なので、私の好きな様に選んでよろしいんですよね？」

「はい、それがユファイが選んだ決断なら総督もスザクも僕も納得すると思います。」

「ありがとうございます！ 参考になりました。 それではお休みなさい！」

「お休みさい、ユファイ！」 携帯の電源を切り生徒会室に向かって歩き始めた。

僕は歩きながら生徒会室向かつてる時に廊下の窓の外の景色を

見ていた。

「今日は二日月か…そう言えば僕が専任騎士が決める話も…!?!」
その瞬間に頭の中から一気に夢で見たような情景が流れ出した。

「陛下…そろそろせんkkk…」 「陛下…騎士は私め…#」 「ふざけるな！ …貴様が陛下の騎士が務まるか…陛下！騎士の件は私が#%#%#」 \$ 「兄上はどうするつもりですか？騎士の！#%#%#%#」…頭が割れる！！何がどうなってる？ 僕は廊下の壁に体を預けていた時にカレンがこっちに駆け寄って来た。

「ライ！ あなたに言いたいことが…!? ライ！！ 大丈夫!? 顔色が悪いはよ！！待つて今スザクを呼んでくるわ」カレンはすぐさまに生徒会室に向かって走り出したのを見た時にカレンの後ろ姿が学生服でなく、ギルフォード卿のような姿で走ってるように見えた。

「何でカレンがああ格好で…」そのまま僕の意識は途切れて倒れてしまった。そして僕はあの夢の断片の世界に行くのであった。

FIN

EP2 いつもの日常（後編）（後書き）

はい！ ようやく次から本編の内容に入れます。 この「いつもの日常」ではライ自身はこつやつて毎日を過ごしてるのではないかとつとつと言う私のイメージで書いたためライを含め他のキャラクターの性格のなどが若干変わってるかもしれませんが。

ライに至っては過去の設定に私なりの追加要素で入れました。 この追加要素が今後の展開どう盛り込むか楽しみにしてください！！

EP3 目覚めの兆し（前書き）

今回、初めての戦闘シーンを書いてみました。
みなさんのように、上手くできたが分かりませんがよかったら感想
お願いします。

EP3 目覚めの兆し

夢の断片3

「陛下！！ そろそろ騎士をつける件はお考えになりましたか？」
あれ？これ…先聞いた声だ…って誰だこの人浅黒い白髪のご老人は…あれ？今までの夢より顔が分かる！って誰なんだこのおじいさんは…

「ガロン！！ だから陛下の騎士はこのジン様がやるって言うてるだ！ 陛下！ 陛下の騎士は私めが…」と言うところで横から思いつき頭を叩かれていた。

「ふざけるな！ 貴様が陛下の騎士が務まるか！！ 陛下！ 騎士の件はこの私レイが務めます！ なのでこの野蛮なジンを騎士にするのはおやめ下さい！！」

「言ってくれるね！ 私と…ええい！ 俺とライはガキの頃から親友なんだ！ こいつの右腕にふさわしいのこの俺だろうが！！」

「ほら、すぐにしゃべり方が悪くなる！！ それではライ陛下の足を引っ張るのは目に見えている！！」

「はっ！！ そんな細い腕でライを守るのか？ この女男！？」
「お二人とも陛下の前でぶれいすぞ！！」

『うるせえー！！ 今！ 立てこんでんだ！！ 後にしろクソ爺！！（うるさい！今は立てこんでるんです！後にしてください！ガロンさん！！）』

「なんて口の聞き方ですか！ 陛下両名を今すぐ退団させて下さい！！」っと先からこのガロンと言う浅黒の肌で白髪のロングのご老人と ジンと言う背丈が高い金髪の青年と僕と同じ歳ぐらいのレイと言うカレンと同じ赤い髪の少年が、どうやら僕の？ 騎士についての話らしいが…今までの夢でもそうだが僕は先から陛下って言われてる…前に血液検査で僕はブリタニア皇族って聞いたけど本当に

貴族なのか…と云うか…陛下つてことは僕はどこかで王様だったのか？ ダメだ！ ますますわからない！！

「兄上はどうするつもりですか？ 騎士の件！ このままだとうやむやになりますよ！！」 兄上？ えっ！

まさかこの子が僕の妹？ 髪色はルルーシュと同じ黒色だけど髪型はナナリーと同じで瞳の色は僕と同じ青色だ…そうか…僕の妹が居たんだ…あれ？ なんてだろう涙が出る！

「全く！ 王になられてもこう言っただ事なこと優柔不断ですね！

兄上は…だから…」 \$ # 言つて&\$ \$ 私達は兄上を ！！# \$ 「

夢の空間がかすみ始めた。

「待ってくれ！！ やつと会えたんだ！ 行かないでくれ！！」
「ただど景色は次第に白くなり始めていた。

「待って！ お願いだ！ 教えてくれ！ 僕は何者なんだ！！」

「おい！？ ライ大丈夫か？」 っと心配の表情でルルーシュが僕の顔を覗き込んでいた。

コードギアス 蒼の奇跡 E p 3 目覚めの兆し

ライの部屋

「ここは…あれ？ どうしてここに？」 僕はどうして自分の部屋にいるかわからなかった。

「はあ…そりゃそうだろ…おまえ！ 昨日、生徒会室の前の廊下で倒れたんだから！！ 全く…すぐにカレンがお前が倒れたことを教えてくれたのとスザクがすぐにお前の部屋に運んだから大事に至らなかつたものの良かったが倒れるくらいまで無理するな、みんなが心配するだろうが！」

「じゅめん…」

「全くだ！ …… あっ！ それと、会長とスザクからの伝言だ！」

「え！？ 何かな？」

「病気が治るまでゆっくり安静すること!!! だっそうだ まあゝ当然の結果だな…病人のお前がウロウロされたはナナリーにうつるからな…だからライ! 今日部屋で安静しろ!」

「わかったよ!今日は部屋で大人しく安静するよ!」

「ああ、そうしろ何か温かいものでも持つてくる」ルルーシュが部屋を出たのを確認して再び考えた。

「取りあえず、僕の見た夢が僕の記憶だったすると僕はどこかの国の主…多分の小さい国の王と仮定として生きていたのかな…そして僕には妹がいた。しかもルルーシュにもナナリーにも似ていた。

ひよつとしたらルルーシュとナナリーに懐かしさを感じたのは案外遠い親戚か何かかな? いや、それだったらルルーシュが真っ先に気づくはず、それにルルーシュは市民だ! 貴族じゃないし…ああゝ!!! わからないことが増える一方で全然前に進んでない!」「このままで大丈夫かな? いや、妹が分かっただけでも前進したのかな?…はあゝスザク達は何してるだろう?」

一方 特派のラボ

「ええゝゝゝ!!! ライ君、来ないの!!!」っとライが来ないのにいきなりご機嫌斜めなロイドさんがぶつぶつ何か言っていた。

「ロイドさん!!! 無理言わないの!!! この所、ライ君に無茶なシュミレーションをやらして良く言いますね!!!」

「ええゝ?何が無茶なの?」

「教えてさして上げましょうか?」

「いえ! 遠慮させてもらいます!」ロイドさんは部屋の端っこに行ってしまった。

「それで、スザク君、ライ君の具合はどうなの?」

「医者言うには過労と熱が重なってるけどこの二日ほど安静すればすぐに復帰出来るそうです!」

「そう! 良かったゝ大事にいたらなくて、それじゃ、何かライ

君のためにお見舞いの手料理でも持つて行こうかな？」

「せ…せ…セシルさん！ ライは疲れてるのでゆっくり寝させた方が良いと思います！！」 イケない！！ 今、セシルさんの手料理なんかライに食べさせたら間違いなくあの世行きになる！！

「そうだね…こんな機会じゃないと彼は休まないだろうし、ここはスザク君の意見に僕は…賛成だな！」 さすがのロイドさん僕の考えを分かってくれた。

『自分達もそう思います！！』 他の特派のスタッフもライのために必死に僕達に加勢してくれた。

「そうね、彼もこの機会に療養したら良いわね、じゃあライ君が復帰したら食べさせましょう！！」 今からライに何を食べさせようか考えてるセシルさんの様子に僕達は…ライが少しでも復帰が遅れることを心の底から祈っていた。

「あつ！ そうだスザク君！ 先ほどコーネリア総督から出頭命令が来たわ！」

「もしかして！ 黒の騎士団ですか！！」

「いえ…その実は…」

再びライの部屋

「う~~~~ん、 暇だな、 考えたらここに来て色々あったからな、急に何も出来ないのもこれはこれで辛いな…ルルーシュ達も学園の方だろうし…そう言えば咲世子さんはさっき買い物に行ってたな…熱も下がったし…ツーリングでもするか！」 僕はすぐに私服に着替えて机の上に ちょっと出かけます。すぐに戻ります！ 置手紙を書いて部屋を出た。

「さて、どこに行こうかな？ 租界あたりでブラブラでもしようかな？」 と思ってる矢先に正面玄関の前に特派のトレラーが通り過ぎて行った。

「あれは、特派の…黒の騎士団に動きでも…ってダメだな、このま

まトレラーの方に行ってもセシルさんが止めそうだし…下手したらスザク居そうだしな…！ まあ〜！偶然にも特派の様子を見に行ったら誰も居なくてスザク達がたまたま忘れ物をして、それを届に行くのはルール違反じゃないよな〜」僕は誰に対して言い訳を言ったかわからないけど…その足取りで特派に向かった。

東京租界のとある高架下

「本当にこの服着ないとダメなのかな〜…まさかこんな時に作戦があるなんて…ライは大丈夫かな？」

私は今、キョウトから紹介で来た四聖剣の依頼で藤堂中佐の救出のために今高架下で出撃準備をしているところなんだけど…結局また言えなかった…私はライに技術部とは言えブリタニア軍の仕事を辞めて普通の学生生活を送って欲しいって言っつもりだった。理由は2つあった、1つは昨日のライが倒れたこと含めライの体が心配なのもある…もう1つが、そう…ライと直接戦ってるわけじゃないのにあなたがブリタニア軍に所属してるって聞いてからあなたが私達の目の前の敵としているんじゃないかって不安で仕方がないの…

…よし！早く作戦終わらせてお見舞いに行く時にでも話そう。
「ちよつとカレン、まだなの？」遠くから井上さんの声が聞こえた。

「ハイ！ すぐに行く！」私は新しく渡されたパイロットスーツを着てトレラーの外に出ようとした。
…本当にこんな服で紅蓮の操縦の連動性が上がるのかな？

再び特派のラボ

「…セシルさん？ これは何ですか？」僕は目の前には色とりどりに輝く拷問食が置いてあった。

「ああ〜これはね…新作の新しいオスシなの、日本のオスシはね、

二ギリと言う形以外にも様々な種類があつてね今日はチラシズシつてのに挑戦してみたの食べてくれるかな？」天真爛漫の笑顔で言うセシルさんには悪いけどチラシつて…あの…あれですか、命を散らすことを指してるのかな…もちろん！そんなわけではないと思うけど、僕が知る限りスシには魚を乗せるつと本に書いてあつたはず…生クリームや色とりどりのジャムやそして何だろこの甘つたるい匂いは明らかにこのご飯にも何らかの細工がほどかされてる。

…うつ！？ 気持ち悪い…えっこれは食べないとダメかな？ 病み上がりの人間が…いやそもそもこれは人が食べれるのかな？ どうしよう…出来ることなら今すぐ帰って自分でお粥を作つて食べて寝たい…！

「やっぱり、ライ君まだ体調が良くないみたいね…そうだ！ このオスシをお鍋に入れてお湯をいれてお粥風にすれば…あれ！ライ君、もう食べたの？」

先ほどテーブルにあつたオスシは僕が決しの思いで食べた。正直、このオスシにお粥風に変えられたらもうモザイクの代物ができるのは必至だ…そう思い、まだ固形物であるこのオスシならっと思いで完食した。

「えええ！ 昨日晩からあまり食べて無かつたので…つい我慢が来ずに食べてしまいました！」 平然にしているつもりだけど…もう胃の中が激戦区の様な酷い荒れ模様だつたけど…

「ところで、スザクとロイドさんは？ やっぱり先のトレラーに乗つてたのかな？」

「ええ！ コーネリア総督から出頭命令があつたから…本当は私も同伴予定だつたけど…スザク君が万が一にライ君がここに来るかもしれないから…その時のために足どめにと言うことで私はここで待機してたと言つただけど…」

「なるほど、スザクの読み通りに僕はここに来てセシルさんに足どめされてる訳か…」理由はなんとなくわかるけど…だからつてセシルさんの手料理で足止めしなくても…スザクめ…今度コーネリア総

督にユフィとスザクがキスしてましたって嘘でも言うか…いや後が怖すぎるからやめよう…

「それにしても何の命令だったのですか？」

「実は日本解放戦線の藤堂中佐の処刑執行人に任命されたの…」セシルさんが複雑そうな表情だった。理由はわかる…たしか藤堂中佐つと言えば《巖島の奇跡》で名で有名だ。それとスザクの武術の師匠だと聞いたが…コーネリア総督もやってくれるよ…まるでスザクが裏切り者かどうか試してるやり方をするなんて…軍としては当然の処置だが、ここまでする必要はないだろう…

「ちよつと、政庁に行つてきます…！」

「ダメよ…！ ライ君…！ 総督はイシカワの方向つてて政庁の方にはいません！」僕はその言葉を聞いた瞬間に東京租界の近辺のハイウェイの監視カメラの映像にアクセスしてスザク達の現在位置を探していた。

「無理よ！ ライ君！ 場所はチヨウフで…もう出つてから結構経つてるから恐らく現場に着いてると思うし！ それに、総督の命令なのですからあなたがどうにかなる内容じゃありません」セシルさんは僕の肩に手を置いてなだめとしているが僕は手を止めなかった。

「ライ君…！ いい加減にしなさい…！」

「違つんです！ 確かにスザクの心配もありますけど…：…：…：やっぱり！」僕はスザク達を探している傍らでチヨウフの方向に向かつてる車を調べていた。

「セシルさん！ 今すぐにチヨウフ基地に連絡お願いします…！」

「どうしたの？ ライ君！ 何が分かったの？」

「チヨウフ方面に向かつてる車を一通り探していたら多いんですよ…トレラーの数が…」

「それでチヨウフ基地と何の関係が…まさか！ 黒の騎士団…！」

「恐らく！ その可能性が高いです！ 先日片瀬少将の件でもそうですか…黒の騎士団の情報網は僕達の作戦情報を独自のルートで手に入れてるつと考えると…」

「目的はまさか藤堂中佐の救出!？」

「多分! 日本解放戦線の仲間が黒の騎士団の力を借りて救出を議論する可能性が高い! そう考えると戦力も相当の数で投入するはずです。それに引き換えこちらは通常警備の状態だ! スザクがピンチだ!！」

「でも! 今からチヨウフ基地に連絡しても話も聞く耳を持ってくれないと思う! ロイドさんに話しても私達の立場じゃ、聞いてもらえないし!！」

「: 時間がない! ! セシルさんクラブの発進準備は行けますか! !」

「ちよつとライ君! 本気なの! 無茶よチヨウフ基地はここから一時間も掛かるのよ! !」

「クラブをハイウェイで全速力で走れば10分ちよつとで着きます! !」

「そんなことをしたら向こうについた瞬間にエナジー切れになるわ! !」

「予備のエナジーを持てば問題ありません! それに早く行かないと! !」 チヨウフ基地の映像が急に消えた! ! まずい! 黒の騎士団が攻めてきたんだ! !

「セシルさん、お願いします! 責任は僕自身で取ります! だから、行かせてください! !」僕は必死の思いでセシルさんに訴えた。

「気持はわかるけど! !ライ君は昨日倒れたばかりなのよ! そんな体戦わせるわけにはいきません! !」セシルさんは頑として僕を行かせまいと退かなかった。

正直、もうあまり時間はない! 周りは僕とセシルさんだけなら! !僕は意を決して力を使うことにした。そう、《絶対遵守の力》の能力があるギアスの力で! !

「ライが命じる! クラブの発進準備に協力しろ! !」僕の右目が赤く光りだした。

「わかったわ。クラブに乗って」セシルさんはすぐにクラブの発

進準備に取り掛かっていた。ごめんなさい！セシルさん：僕は友達
達のピンチをほっとく分けにはいけないんだ！！

数分後

「嚮導兵器Z-01b ランスロット・クラブ、発進準備完了」

「ランスロット・クラブ：MEブースト」

「ランスロット・クラブ、発進！」僕はすぐにハイウェイに行き、
全速力でチヨウフで駆けだした。

チヨウフ基地

「もう…始まつてる…早くスザクに合流しなと」僕は予備に持つ
てきたエナジーファイラーに新しく変えてチヨウフ基地に乗りこんだ。
状況は予想どおりこちらはランスロットに一機に対して黒の騎士
団は複数のKMFだ！しかもそのうちの5機は新型だった。

「スザク無事か？」僕はスザクに内線で連絡した。

「ライ！？どうしてここに？ 体は大丈夫？」

「誰かさんのおかげで悪化してそうだよ！ それより今はこの状況
を打開する方が先だ！」

「わかった！でも新型の機体の方は気をつけて！ 今までの敵とは
違う！」

「…みたいだね、二手に分かれて敵の力分散させる！ 分けた敵を
各々で殲滅次第に援護に回る…それまでは分散されることをしても
援護なんてしないように…」

一機の無頼が勢い良くこちらに向かってきた。

「お前達の相手はこの俺様だあゝ！！」 装備しているスタン
トンファで攻撃を仕掛けてきたが：隙が大きかったから軽く交わし
て無頼のボディにライフルの弾を当てた。無頼がパージしてコッ
クピッドが無事脱出したのを確認して僕たちは散会した。

「それじゃ、散会！！」僕はすぐにライフルを構え敵を分散させる
ように足元狙って発砲した。こちらに来たのは新型の機体2機にそ
してナリタ連山から出てきたあの紅い機体だ。

「…よりに寄って回避能力が高い機体が出つて来たな…あの紅いのは取りあえず距離を取らないと…まずはあの新型の機体の方を片付けるか…」　まずは3機をさらに分裂させ一機ずつ殲滅しようと考えたが敵の動きが想像以上に早い上に、熱が再び振り返り返したのか頭が若干ククラクラして狙いが定まりにくい状況だ。　長期戦持ち込みは確実にやられる！　こうなれば接近して近距離で仕留めるしかない
「いくぞー！」　僕は敵の懐に入り込むように接近した。　そんな時に目の前の景色が一瞬、戦火が激しい草原風景を駆け抜ける風景と重なった。

「くそ！頭が…こんな時に」　視界がぼやけがした上に頭痛がしだした。　そんな状態の時に紅い機体が接近してきたので、後方にジャンプして距離をとったが着地のタイミングがずれてすこしよろめいた。

「ライー！　やっぱり、熱が下がってないんだ！　早くしないと！」　だがスザクも　新型3機の相手で苦戦している。　しかもそのうち1機の黒い機体の動きがほかの2機よりずば抜けた動きをしていた。

黒の騎士団サイド

「あの青兜の動きが悪いな…整備不慮か、これはまたしてもないチャンスだ！」

「カレン、チャンスだ！！　今の青兜の動きが悪い！　月下2機で動きかく乱させて、隙が出来次第に紅蓮でとどめをさせ！！」

「ハイ！　分かりました。」　すぐさまに紅蓮が近付いたのを後方に交わしたが着地の時によるめきを見て核心した。

「青兜の方はカレン達に任せれば問題ない！　後は白兜のみ！！

藤堂！悪いがその白兜は私の指示で動いてもらう！」

「何か策があるのか！」

「フツ　愚問だな！」

「良からう！指示を受けよう！」

「よし！各自距離を取れ！ 奴の動きにはパターンがある！ 最初のアタックは正面から、フェイントをかけることは絶対はない！」

白兜はMVSで千葉に切りかかったが、上手くかわした。

「交わされた場合！ 次の攻撃に備えて距離を取る！ 移動データを読み込め！！…座標はX-57」 距離をとったランスロットの移動先に朝比奈が回り込んでいた。

「へへ、本当に来たよ。」朝比奈はランスロットのヴァリスを払いハンドガンを構えた。

「そうだ！ その場合、次のアクションは後方へとバックする距離をつくる！ 座標はX-23！ これで、チェックだ！！」

藤堂の月下が3段突きで攻めたが2つの突きを交わしたが最後の突きでコックピットの屋根部分を刺して切りはがした。

「…スザク！」 ルルーシュは目の前の現実に呆然とするしかなかった。

特派サイド（ライ）

「スザク！！」 まずい！ いくらなんでもコックピッド丸出しの状態じゃいくらスザクでも… スナイパーライフルモードで一旦かく乱させるか…

ライ様…戦いの場において…… 再び頭痛がした。

「クソ！ 頭が…しまった！」目の前の新型機が可変ライフルをハンドガンではじいて近付いてきた。 1機目の接近の攻撃を何とか交わしたが…

「ライ！！ 後ろにもう1機いる！！」 スザクの言葉のおかげで胴体への直接攻撃は交わすことができたが、僕の反応が少し遅かったので敵の剣ではクラブの左腕を突いてパージさせられ、さらにスラッシュハーケンの攻撃を仕掛けたが何とか交わした。

「チッ！ 一旦距離を…！！？ しまった！！いつの間に壁際近くま

で！！」 僕はいつの間にか壁際近くまで追い込まれていた。そして、敵のスラッシュハーケンの飛ばした意味を理解をした。

「そうか！ 僕を仕留めるためじゃなくて…壁に打ち込んで一気に距離を詰めるために…」 スラッシュハーケンで距離を詰めてきた敵は先と同じように突きできたがこつちもMBSで剣を払ったが詰めた距離で直接体当たりで攻められ交わすことが出来ず壁側まで飛ばされた。

「ライ！ ライ！！」 スザクの声が聞こえる…

「…後ろは壁、前は敵で自分の体調は最悪だし…絶体絶命のピンチだな…視界もぼやける…もうダメか。」 ふつと首飾りの十字架を眺めた。

「結局これは誰からの贈り物かわからないままか…」 そう思った瞬間に1つの情景が現れた。

夢の断片4

「兄上！ これを兄上に！」 十字架の首飾りを渡された。

「これは、私と兄上の約束を守るための十字架です！ ですから兄上！！この十字架と私に誓って下さい！どんな絶望的な戦場でも生きて…生きて帰ってきてください！！」 目の前の少女は涙を堪えながら必死に笑顔を作った。

「そうか、これは君がくれたのか…そうだ、まだ君の名前も知らない！ それに今の僕には…」 カレン、スザク、ルルーシュ、生徒会のみんながいるアッシュフォード学園が帰る場所だ！

「だから！、 こんな所で死ねない！！」 気だるかった体が軽くなり、頭痛が痛めた頭も霧が晴れる感じにさえてきた。

黒の騎士団サイド

「おいおい！、 まだやる気かよ…」 ト部は目の青兜が再び戦闘態勢に構えたの見て少し驚いている。

「ほお、最後まで戦う姿勢つと見た！ ト部や、相手は最後まで戦うつもりだ。お主が止めをさしてやれ！！」

「そうだな…久しぶりに骨のある奴と戦えたんだ！ 最後まで戦わないと失礼だよな！」 ト部は廻転刃刀で青兜を切りつけた。

「消えた！？」

「ト部！上だ！！」 頭上を見上げてみれば、青兜はスラッシュハーケンで壁になっていた建物の屋根部分に打ちづけて…上まで上がっていた。

「おいおい！…おもしろい！ この戦い！俺が買った！ 仙波さん手を出さないで下さいよ！」 月下の飛燕爪牙で青兜の所まで飛んで行った。青兜は屋根に取り付けたスラッシュハーケンを手繰り寄せて屋根部分を壁蹴りの容量で飛び月下に接近した。

「相撃ち狙いか！？ 悪いがブリタニアに負けるつもりはねえー！」 廻転刃刀を突き構えで迎え撃とうとした。だが、青兜は腰部と右腕のスラッシュハーケンで両肩、右足を破壊して月下に馬乗り状態で落下して行った。

「まさか！ あやつが上に移動したのはト部の動きを封じるためか！…（だが何だ？ あの動き先までは無かった…）」 そう考えてる間に青兜はト部の月下を仙波の元に蹴り飛ばして右腕のスラッシュハーケンで床に打ちつけて一気に加速して降りて、ランドスピナーを全開で加速して、青兜は居合い切りで仙波の月下の足を切り崩した。

「早い！？」 ト部の月下が仙波の月下にぶつかって二機とも床に倒れた。

青兜はゆっくりと紅蓮の方に向いた。

「…何が起きたの？…それより、今…あの青兜にライが… 嘘…嘘… でしょう…どうしたら良いの！？」

「各員撤退だ！」 ゼロの命令が通信が聞こえ私はチャフスモーク出して戦場から離脱した。

特派サイド（スザク）

「良かった！ 味方の援軍だ！…… そうだ！ ライは？」 僕はライの方に視線の方を向けた。クラブは依然と棒立ちの状態だった。「まさか！ ライ！ ライ！！」僕はクラブの元まで駆け寄ってたが依然にライの反応がない。

「ライ！ 大丈夫か？」僕はクラブのコックピッド付近まで近付いて外から開く緊急レバーを作動させてコックピッドのシートを出した。

「ライ！ しかつり！！」僕は意識朦朧詩ているライの肩を揺らしながら必死に呼びかけた。

「……あれ？、僕はいつたい……そうだ！黒の騎士団は？」

「何……言ってるんだライ？ さっき撤退して行ったじゃないか……もしかして覚えて無いのか？」

「ああ……もうダメだと思つた瞬間に頭が真っ白になって……」ライは呆然の表情だった。

「そうなんだ……（それにしても先の動きは凄かった……）じゃなくて！ 何で熱も完治してない状況で来たんだ！！ 下手をしたら君は死んでたかもしれないんだぞ！！」僕は今になってライの無茶な行動をしたことに腹を立ててしまった。理由はなんとなくわかる……僕が反対の立場ならきつと同じことしただらうから。

「いや……その、熱が下がったから大丈夫かな」と思つて特派に顔を出したら……「ライが急に黙りだした。しかも表情が青ざめていた。」

「ライ？ どうしたんだ……ちょっと待つて……今、特派に顔を出したって……」僕はロイドさんと一緒に出頭する前にあの拷問食を楽しく作つてる後ろ姿を思い出した……まさか！ライ

「スザク……い……胃薬を……」そう言つて意識を失つたライを急いでランスロットを運んだトレーラの方におぶつて走つた。

そのころトウキョウでは大変な発表があつたことはこの時の僕たちは知る由もなかった。

次回につづく

EP3 目覚めの兆し（後書き）

今回ようやく本編の物語に入れました。いざ書いてみると想像以上に難しかったです。何とか続きが書けるよう頑張りたいです。

EP4 二人の騎士(前書き)

今回からはなるべくスピーディにやれるように頑張りました。
作者が楽しんでやっているので皆様にも楽しめる内容になったこと
であること祈ります。 それではどうぞー!!

EP 4 二人の騎士

ライ達がチヨウフ基地の戦っている時にトウキョウではある発表されていた。…

トウキョウ美術館

「スザク！ ライ！」 私は美術館のモニターでチヨウフ基地で藤堂中佐を奪還するべく現れた黒の騎士団と戦っている二人の映像に驚いていた。

「（二人はいつもああやって戦ってるのね……）！？ スザク！！」
ランスロットのコックピッドが破損してスザクの姿が現る形になった瞬間に周りの記者達が…

（おい、あれ、クロヴィス殿下下の殺害容疑で掛かった枢木スザクじゃないか……）（何で、名誉ブリタニア人がナイトメアに？）
（イレブンの分際で…）

「…そんな！ ライ!?」 今度はライのクラブが壁に吹き飛ばされ、クラブの姿勢が壁にもたれ掛る様に崩れている（おい、それじゃあの青い奴もイレブンじゃないか？）（っというか？ あの青い動きが悪いなもしかしてイレブンだから手を抜いてるんじゃないか？）

酷い……彼らがいったい何をしたって言うのですか……私には彼らに対する非難すら守ることもできないのですか…

「いますぐ！映像を消せ!!」ダールトン將軍の一言に私は思わず「待って下さい！ 彼らの戦いを見届けたいのです!!」 私だけでも彼らの勝利を信じて!!

「ユーフェミア様！ 映像を…」ダールトン將軍も思わず啞然とする快進撃だった…… 恐らく攻撃をちゃんと見れたのはこの場に居るのはダールトン將軍だけで、私達は一瞬できごとで理解するのに

時間がかかった。

（おい！なんだよ…今の動き…見れたか？） （黒の騎士団を撃退したのか？）

「スザク、ライ…見事でした！！」私は二人の勝利に思わず感涙しそうでした。

（裏切り者が！！） （何で、追わないんだ？） （バカ！ イレブンだからに決まってるじゃないか？）

「（ど素人が…逃げていく敵を必要以上に追うことがどれほど危険かわからないのか？） ユーフェミア様？」

「…（スザク・ライ…私、決めました！） みなさん！！ ……先ほどのご質問ですが、私が騎士になる方を決めただかどうかでしたよね？ 私が騎士とするのは あそこに居られるお方… 枢木スザク准尉と…ライ・アスプルンド准尉です！」

コードギアス 蒼の奇跡 EP4 二人の騎士

「はあ〜…何でこうなったのかな…こうなるならもっと言うとかべきだったかな〜スザクに全部任せるべきだったかな？ どう思う？ ルルーシュ…」

「知らん！！ お前も昨日の騎士就任式から帰ってからずっとそうだぞ！ いい加減状況を受け入れるよ…まったく、そんなに嫌だったたら断ればよかっただろう！」僕とルルーシュは朝早くに生徒会室で仕事をしていた。

「それが出来るなら苦労しないよ…それに、昨日の現状見たらなおさら引けないよ…」

そう、僕とスザクはチヨウフで戦ってる時にユフィに騎士に任命されたのだった。僕達を知ったのはあの戦いの次の日の朝一番のニュースで気づいた。正直、あの後は大変だった…何せコーネリア総督の怒りが酷く、ノネットさんやギルフォード卿やダールトン將軍の説得が無かったら今頃…どうなっていたかな……だけど一番

気にかかったのは昨日の騎士就任式だった。僕達の評価は酷かった…スザクは名誉ブリタニア人の上にクロヴィス殿下の暗殺の容疑者疑いの過去に、僕にいったては記憶喪失の上に伯爵家の養子なのだから…まあ、怪しい人物だな。当然ながら周りの目は冷たかった…ロイドさん、ノネットさん、ダールトン将軍が拍手をしなかつたら最悪の会場だったろう。

「スザクの状況を変えろとしたら、ブリタニアの歴史を変えることでもしないとダメかな…」

「おいおい、皇女殿下の騎士様のお言葉とは思えないな。」

「僕はユーフェミア様には忠誠はしたが、ブリタニアそのものに忠誠した覚えはないよ（恐らく…過去も）」

「気持は分かるが…気をつけるよ、スザクもそうだが、今回の件でライ自身にも危険があるかも知れないんだ！」

「……そうだな、気をつけるよ、ありがとう、ルルーシュ！ 愚痴を聞いてもらって」

「お前には仕事を代わりにやってもらってるからな…ところで、カレンには話したのか？」

「……まだ」

「なるほど、それで、一人で会うにしても心の準備がまだ、だからそれまで誰かに居て欲しくて俺を呼んだ訳か…」

「その通りです。」

「別に悪気があつて隠したわけじゃないんだろ？ なら堂々としていれば良いんじゃないか？」

「理屈じゃ、分かってるけど、いざ行動しようつと考えると動けなくて…ごめん、情けなくて…」

「まあ、頑張れ、…本人もうすぐそこまで来ている。」ルルーシュは窓からカレンの姿を確認して席を立った。

「それじゃ、席を外すからお茶はそこに置いとく、じゃあ、幸運を！」ルルーシュはそのまま生徒会室を出った。

「ええ！ ルルーシュ！！ …行ってしまった…ここまで来たら腹

を括るか。」しばらくしてノックが聞こえた。

「ライ！ いる？ 入って良いかしら？」

「うん、大丈夫、今誰もいないから！！」 言った同時にカレンは生徒会室に入って来た。

「紅茶飲む？」

「ええ……」 カレンは僕の目の前の席に座り僕は先ルルーシュが用意した紅茶をカップに注ぎカレンの所に置いた。

「熱いから気をつけて」

「ありがとう……」 しばらくの間こう言った簡潔な会話が続いたが僕はその空気に耐えれなくて行動に移した。

「ごめん！カレン！！ ブリタニア軍のKMFのパイロットをしていたことを黙ってて！！」僕は深くお辞儀をしながらカレンに謝罪していた。

「……何でライが謝る必要があるの？」

「確かに悪気があって嘘じゃない……けどカレンに嘘をついたことは心が苦しかった……あれだけ僕の記憶の手がかりを探す手伝ってくれたし、記憶が断片的によみがえったことで不安の時も優しくしてくれたから……違う、僕はカレンのことが……」 今、言わないと……
「私のことが……」

「カレンのことが……す……」 《みんな入口の前で何してるの？》
スザクの声が聞こえた瞬間に生徒会室のドアが開いて倒れこむようにみんなが出てきた。

『……………あの、何時からいましたか？』 僕とカレンは同時に効きだした。

『いや、そのすみませんでした！！』 スザク以外のメンバーが行き勢いよく逃げて行った。

「……何か、タイミング悪かったかな？ あっ！みんなを探してくるね！！」さすがのスザクもこの気まずさにみんなを追いかけた。

『プツ 八八八八八』僕とカレンは同時に笑いだした。 カレンとこうして笑ったの何時ぶりだろ……

「良かった笑ってくれて！ やぱりカレンは笑顔が良いよ！！」
「ありがとう……ところで先の……ううん、何でもない！ ねえ！
騎士になつた感想は？」

「うわゝ まさかの質問？」

「だって嘘をついて悪いと思うなら私の質問に答えてよ」

「わかったよ。 そうだなゝ正直、実感がない……かな？」

「そうなの？ あの映像を見る限り凄かったわよ！」

「実力のことじゃないよ……僕は元々は記憶の手がかりと働き口を探すために入った人間がいつの間にか騎士になつてたからねゝ何かおかしくてね。」

「ライ……」

「でも、おかげで目標ができた！」

「目標？」

「うん！ 僕はスザクや他の日本人が今のような差別で見られない様にこのエリア11を変えたい！！」

「……」

「もちろん、理想論なのは分かってる……でも、お互いに理解が出来る中立な場所があればそこから信頼関係が築くことが出来ると思う……」

「中立の場？」

「うん、政治的にブリタニアの支配じゃなく、お互いが同じ立場で話し合える場所かな……言つて無茶苦茶だけどみんなと出会えた場所だからずっと笑つていられる場所でありたいんだ。」

「叶うと良いね……そう言えば今日はナナリーが立案のスザク・ライの騎士就任祝いのパーティーね！おめでとー！ライ！！」

「ありがとう、カレン」 僕たちはしばらく他愛ない話をしていた。

数時間後 クラブハウス 大ホール

「それでは、我が生徒会所属の枢木スザクとライ・アスプルンドに

騎士就任に乾杯!!」

『乾杯!!』 リヴァルの合図でパーティが始まった。そこにはみんながスザクや僕に騎士の就任に心から祝ってくれていた。

『ナナリーありがとう! パーティの企画してくれて!』 僕とスザクはナナリーにお礼言っただけだった。

「ハイ! そう言っただけだと嬉しいです。昨日から連続ですが私達のパーティも楽しんでください!!」

「うん、ありがとう」 僕はそう言っただけのテーブルを食べていた。するとロイドさんが出してきた。

「残念でした、二人ともまた仕事だよ!」

「誰だ、あれ?」 ルルーシュがスザクに聞きだした。

「僕達の上司でライの養父!」 スザクが気まずそうに言った。

『ええ!! ライの養父!!』

「ちよつと、ライ! どうして今まで言わなかったのかな!」 ミレイさんは僕の制服で首を締めあげた。

「ミレイさん……く……苦しい……言わなかったのはあくまで書類上のことだし、名前を思い出したらそっちに変えるつもりだったので……」

ミレイさん、本当にギブです!」 嘆息まじりなミレイさんに開放された。

「何で、そんなに落ち込むことがあるんですか?」

「スザク君……ひよつとして話して無かったの?」

「はい、さすがに言いださせなくて!」

「そんなに言いだせないことかな? 僕の婚約者って?」

『えええ……!!!!』 さすがの僕も驚いた。

「知ってたみたいだな……何でライは知らないんだ?」 ルルーシュは僕が驚いてる様子に疑問を感じた。

「ライはその時、コーネリア総督とカガワで日本解放戦線と戦いに……行ってたから……さすがに内容が内容だったし、記憶が戻ったら本名を名乗るって言っただけだから……ごめん言いだせなくて」

スザクは申し訳ないと謝った。

「いや、驚いてるけど…僕が記憶が戻らなかつたら…ミレイさんは僕の養母になるの？」僕は疑問に思ったことをそのまま言ってしまった。

『!?!?……』しばらくの間、沈黙が走った。

「いやいや！あなたは……会長！名前は？」リヴァルはロイドさんの関係が気になり質問してきた。 勇気あるなリヴァル

「ロイド伯爵！」

「伯爵！！ いや、伯爵！？ あの二人はどういうお関係で……」

「？ だから、婚約者！」

「ノオオオオオ！！」リヴァルは悶絶しながら喚いていた。

「本気だったんだ？」ニーナは追い打ちをかけるように言った。

「あのくもしかして軍務ですか？」スザクがリヴァルの様子を気にせずに淡々とロイドさん聞いてきた。

「そう！ 大事なお客様が船でいらっしやるから…お出迎え……もちろん、ライ君もランスロットとユーフェミア皇女殿下も一緒にあつさり任務内容を話したロイドさん。」

「あのく僕は謹慎中ですけど……」 そう、僕は許可なくクラブを発売させたうえにハイウェイを通つたので二週間の謹慎の伝令が出つてたはず

「まあ今回はお出迎えだからね、ランスロットを一応警備も兼ねてね、さすがに騎士の一人が謹慎中なので行きませんっとはいかないからね」

「そうですねか…（何か、嬉しそうだな…何か企んでそうだな…）」
そうこの後の出来事は僕にとって大きな出来事であるとはこの時の僕は考えていなかった。

式根島付近の沖

「どうして式根島何ですか？ トウキヨウ租界の方が安全なのに…」

「私も教えてほしいですけど…！」

「ええ！？ セシルさんも知らないんですか？」

「僕も！」

「はあく？」 僕は久々に三人のやり取りを見ていた。

「だったら、どうして学園で任務内容話したんですか？」…あんな話したらニーナみたいな人がネット喋ったりするじゃないのかな？

「…なるほどね、ロイドさん迂闊しすぎじゃありません？今日の行動予定、ネットに上がってるみたいですよ！」…どうやら中した。こんなことしたら黒の騎士団が来るんじゃないか…

「面白い子いてね…ついサービスしちゃってね…」…おいおい…大丈夫かな？

「そう言えば、熱の方は大丈夫なのか？」スザクが当然聞きだした。「ええ…ああ熱の方は心配ないよ、あの基地の騒動で汗を沢山かいたのか、寝てたら治ってたよ（まあ…胃の方はしばらく続いたけど）」

「そうか、よかったよ…あんな無茶なことをしないでくれよ」

「本当よ！ライ君、あなたが急に居なくなっただと思えばチョウフに居るって聞いて心配したんですからね！」

「すみません！」本当に心配かけたな…特にセシルさんにはギアスを使ってしまった。出来ることならこれ以上知り合いには使いたくない力だな…

「そう言えばライ君の首飾り、ずっと肌身離さずだったわよね…そのことの記憶は何か思い出せたの？」

「ああ…そう言えばまだ言ってますませんでしたね…名前はまだ思い出せてないんですが、妹がくれたものみたいです。」

「ライ！ 妹がいたんだ…どんな子だったの？」

「そうだな…黒い髪でウェーブのあるロングヘアだったかな…歳は多分、ナナリーと同じくらいかな？」

「そうなの？ その子を手がかりに何かわかったことはないの？」

「思い出した後、色々探してみたのですがなくて…」

「そっか、でも家族のことを思い出せてよかったじゃないか！ この調子なら記憶もすぐに戻るよ。」

「そうだと良いな…(どうしてだろう…思い出して嬉しいことがあるのにこれ以上思い出すのに躊躇う気持ちがあるのは…)」
「あゝ、そろそろ上陸みたいだね」 僕たちは上陸準備に取りかかった。

黒の騎士団の潜水艦 紅蓮のコックピッド

「…いよいよか、(スザクの捕獲…ライは謹慎中って言うてたから恐らくクラブでの出撃はないはず…この作戦だけは何が何でも成功させたい…) 二人とは出来ることなら戦いたくない…特にライとは(あの時のライは何て言うつもりだったのかな…ダメだね…私はライ以上に嘘をついてる女なんだからその言葉を貰う資格はないのに…)ダメよ私! 今は目の前の任務に集中よ」私はもう一度マニュアルを確認作業を行った。

式根島沿岸付近

「…本日の到着時刻は予定通りです。司令部の方に控えの間がございませぬ。いかがなさいませぬか?」

式根島の軍人がユフィに確認のやり取りをしていた。僕はそんなやり取りをよそに空を眺めていた。

「退屈でしたか?」ユフィが目の前に出てきたのでビックリした。

「ええ! あつゝすみませぬ…良い天気だな…っと思つて、すみませぬ!職務中に」

「いえ、まだ職務中じゃございませぬし、何より空を眺めてるライは良い顔でしたよ。」ユフィの言葉にスザクやセシルさんも笑っていた。

「そう言えばまえに言われたな…(僕もいつの間にか笑うようになってたんだな…みんなのおかげだな…そうだな…騎士の初任給でたらみんなと何かのパーティーでもするか…)」何て考えていたら司令部の方から爆撃の音が響いた。

「何事だ! 何、敵襲だと!? バカな! どうやってここに」式

根島の軍人があわてた様子だった。

「司令部が何者かから攻撃を受けてるそうです！」他の軍人が報告してきた。恐らく黒の騎士団が攻めてきたんだろう？

「租界に引き返しましょう！護衛部隊の手配は出来ますか？」そうだ、セシルさんの言うとおりここはユフィの身の安全が先決だ。

「帰って危険かと思われます…広範囲に浅くジャミングがかけられています。」なるほど、下手に逃げれない状況か…

「御安心ください！ユーフェミア皇女殿下の身は私とライが必ずお守りします！」

「いえ、あなたは司令部の救援に向かつて下さい！」

「しかし、副総督彼は名誉ブリタニア人ですぞ！」この野郎…こんな時によく言えたな…

「ロイドさん、これって皇女殿下の侮辱罪に問われるじゃないんですか？」

「…そうだね、そこところは御理解しているのかな？」僕とロイドさんは追い打ちをかけるようにその軍人に言った。

「枢木スザク、ここであなたの力を示せばいずれ周りからの雑音は消えるでしょう」

「スザク、行って来いよ！僕達がいるから心配いらな…それでも心配なら敵を追い払って早く戻って来いよ！」

「…ライ わかりました。司令部の敵を追い払い次第すぐに戻ります！」

「お願いします！」

「イエス・ユア・ハインス！」スザクはすぐに船に戻りランスロツトのトレーラの方に走った。

「それでは、こちらは大人しく待ちますか？」

「はい、そうですね」僕とユフィはロイドさん達と一緒に臨時指令室に入った。

…数分後

ランスロットが発進してしばらくして敵KMFを殲滅し始めた。

「…わからないな…」

「どうしたのライ君？」

「黒の騎士団の動きがおかしい…これじゃまるでランスロットが出てくるの待ってたみたいだ。」

「どうやらその可能性が高いね」　ロイドさんは画面に映るレーダの様子を見て僕と同じように言っていた。

「だとしたら、これは罠です！　いますぐスザクに帰還命令を！！」

「わかったわ！　…スザク君、今すぐ撤退して黒の騎士団の狙いはあなたなの」

「しかし、ゼロが目の前に居るのに見す見す見逃せません！！」

ダメだ、ゼロになると冷静な判断能力がなくなってる。このままだつと…

「！？　ランスロットが動かなくなった！」　スザクの声で再び画面を見た。

「何でランスロットが動かないんだ？　エナジーは十分残ってたはず…」

「KMFの駆動系に使われているサクラライトが何らかの干渉が…」

「【ゲフィオンディスターバ】」

「まさか！？」

「でも部分的にジャミングも働いてるし（理論だけだと思っていたけど、迂闊だった…やはり君なのかラクシャータ！）」　「まずい、いったいどうすれば」

「枢木少佐、こちら式根島基地司令、パネル中佐だ！　これからテロリストに対して迎撃ミサイルを撃つ！　枢木少佐はその場でゼロの足どめをせよ！！」　クソ！！　最悪の事態だ！　誰だこんな命令をした奴は…今の中佐じゃない…そんなことをすれば、ユフィが命令の撤回する…誰だ…いや、今はスザクを助けなくちゃ…

僕はユフィたちが式根島の軍人と口論の所に割って入った。

「ユーフェミア様、私に枢木少佐の救出に向かわして下さい！！」

「ちょっと！ライ君！あなたは謹慎中よ！！そんなことしたら今度こそ軍法会議ものよ！」

「覚悟の上です！！！」

「わかりました！　ただし私も同伴が条件です！　良いですかこれは命令です！！！」

「……（無茶苦茶だな……でも、それがユフィか……だから忠誠を誓う価値がある！！）　イエス・ユア・ハインス！！！」

「ちょっと、ユーフェミア様まで……」

「ライ君行くならポートマンじゃなくて、船に積んであるクラブで行った方が早いよ！」

「ロイドさん！？　いつのまに積んでいたんですか？」

「念のためにね〜」

「念のためって……はあ〜、どうして私の周りには……こう自分勝手なんですか？……わかりました。　こちらもサポートします！」

「ありがとうございます！ロイドさん、セシルさん」

僕は船はクラブの元に駆け寄った。

〜数分後

「……ロイドさん何でこんなにクラブの装備が多いのですか？」そう僕のクラブは通常装備の上に両肩にミサイルポッドが装備され右腕には恐らく3発は入っているバズーカが持たされている。

さらに左腰部には予備のエネルギーファイバー1つとライフルの先端に付けるミサイルが二個が入った収納ポケットに入っていた。

「あの……ロイドさんこの装備で何を……まあ〜良いです時間がありません！！　セシルさんお願いします！！！」

「嚮導兵器Z-01b　ランスロット・クラブ・重火器装備、発進準備完了」

「ランスロット・クラブ……MEブースト」

「ランスロット・クラブ、発進！」

「イエス・マイ・ロード！」クラブを発進させた。

「あつ、そうそう！ライ君言うの忘れてたけど、そのバスーカにはケイオス爆雷をモチーフにした弾だからくれぐれも皇女殿下に当たらない様にね」

「ロイドさん！何でそんな弾を持って来たんですか？」

「何でも言うことは私に一言もないのですか？」

「何で報告しないとダメなの？」 プチ

「あれ？通信が切れた……まさかね……取りあえず今は」僕はオープンチャンネルでユフィに話しかけた。

「ユフィ！あんまり時間がないからちょっとスピード上げるからしつかりつかまってくれ！！」

「わたしのことはかまわずフルスピードで行ってください！」必死にクラブの左手をしがみ付いてた。

「イエス・ユア・ハインス！」僕は全力でスザクの元に駆けて行った。

次回に続く

EP 4 二人の騎士（後書き）

はい、次からはあのゲームでのライの活躍を上手く書けるか…ライの記憶に出ってくる人物は何者なのか良い具合にだせたら理想です。これからも若輩ものですかよろしく願います。

EP5 真実の門（前編）（前書き）

今回はいよいよ！ 神根島イベントです！ 私なりにライがあこの島にいたらと言つ設定で書いてみました。 それではどうぞ！！

EP5 真実の門（前編）

黒の騎士団サイド

「基地からミサイルの発射を確認、藤堂さん！どうします！！」

「射程に入ったら弾幕をはれ！！ 全弾打ち尽くしても構わん！」

私は前方の上空からミサイルが来ていること焦り、思わず砂の穴の中心にいるゼロとスザクの元に駆け寄った。

「しまった！」私の紅蓮も【ゲフィオンディスターバ】の干渉で動けなくなった。

「まずいです藤堂さん！数が多すぎます！！」

「中佐！ チョウフに居た、青兜が現れました！」青兜は先ほど紅蓮がいた位置に到着した。

「ええい！ こんな時に！」 私はその通信を聞いたのと同時に青兜の方……ライの方を見ていた。

「どうして、ライ……こんな時に」すると、ライの方からオープンチャンネルでしゃべりだした。

「こちら、ユーフェミア副総督の騎士！ ライ・アスプルンド少佐！ 私はあなた達と交戦の意志はない！ミサイルの迎撃に協力に来た！」

「…承知した。そちらが手を出さない限り、貴公の行動に干渉しない」

「ありがとうございます！」

「（命令ではなく戦友を選んで来るとは…スザク君、いい戦友に巡り合えたな…）私は藤堂だ！ 見たところ、そちらにはこちらより遠距離の火器が多い、そちらが遠距離でミサイルの数を減らし残りはいくつで引き受ける！それで良いか！」

「了解しました。」私は藤堂さんとライのやり取りにとりあえず一安心した…私は…私にできること…

ライサイド

「ユファイ！ 取り合えず、クラブから降りて安全な所でミサイルの方は僕たちの方で食い止めます！！」

「わかりました。 たのみます！」 ユファイはクラブの手から降りてクラブの後ろの木に隠れた。

「さて… さっそく使いますか… この新兵器で」僕はすぐにバズーカを構えて、もつともケイオス爆雷を生かせるポイントを狙って撃つた。 弾はミサイルの上空あたりでケイオス爆雷が作動して一気にミサイルの数を減らした。

「よし！ この調子ならイケる！！」僕は次々にバズーカ、ミサイルを弾切れになるまで撃ちつくしっていたがミサイルの雨は一向にやまない

「残りはライフル射撃のみ… スナイパーライフルモードで数を減らすしかない… 後は黒の騎士団信じて… やるしかない！！」僕は可変ライフルをスナイパーモードに変えエナジー切れを気にせず撃ちつづけた。 そして予備のエナジーが尽きかけてライフルが撃てない状態になった。

「すみません、私の方はこれで限界です。 後はお願いします！」僕はオープンチャンネルで先ほどの藤堂に話しかけた。 返事はなかったがKMFの腕を挙げた、恐らく承知の合図だろ… そんな時にミサイルのさらに上に大きな空飛ぶ船が見えてきた。

「（何だあれは！ 少なくとも救助の船じゃない… まずい早く、ここから離れなきゃ！！） スザク！ 早く逃げろ！！」

「ライこそ、早くユーフェミア様をつれてここから離れろ！！」スザクは拘束したゼロをランスロットのコックピッドに無理やり入れた。

「そう思うなら戻れ！ こんなことで命を捨てるな！！」

「軍人は命令に従わなくてはいけない！！」 こんな時に、まだ言うか！？

「スザク！ 早くお逃げになって！ 私が許しますから！！」 ユファイ

はスザクの元に砂の落とし穴の中に向って行った。

すぐにユフィを止めようとクラブの手で制止しようと動かそうと考えた矢先に僕の思考が止まった。

「スザク！ ゼロを離せ！ 私は生徒会役員のカレン・シユタットフェルトだ！ こつちを見る！！」

嘘だろカレン…何で君が黒の騎士団に…どうして…！？

「まずい！先の船がもう頭上に…！！ 何だハッチが開いた!？」

頭上にある船はゆっくりとハッチを開き始めその中から不気味な光が光り始めた。

その光を見つた瞬間に直感で危ないと判断した突端体が勝手に動き出した。

僕はクラブのスラッシュハーケンを砂の穴周りに囲っている円盤物を破壊して穴の中心に飛び降りた。

「カレン！ ユフィ！ スザク！ 後ろに下がれ！！」僕は残りのエナジーをシールドのエネルギーに注いだ。そして、頭上から赤黒い豪雨のような攻撃が降り注ぎ来た直後…僕達の視界がすべて消えた

コードギアス 蒼の奇跡 EP5 真実の門（前編）

夢の断片5

「なあなあ、ライ！ 俺達で自警団作らないか？」 あれ、これはこの間、夢に出てきたジンか…前見たより幼いな…ってことは本当に子供の頃からの付き合いなんだな…

「だってよ！ ライの所のとうちちゃんの所のさ、警備隊さあ…偉そうの割には俺達の下町の困った時に全然来ないじゃね〜か！」 今までの記憶を辿ると僕の家は生まれ故郷では地位のある家の子だとわかったが、それが何で下町にいるんだ？

「もちろんさあ〜 ライが悪いんじゃないのはわかってる！ ライ

の立場じゃ、父ちゃんと話し合うのは厳しいのは知ってる！けど、下町のみんが困ってる時に手助けできないのが……悔しくてよ……」

僕はこの時の思いとかわからないけど……

「ライが来てから俺達のグループもただの子供の集まりじゃない！ライは俺達にはない知識もあるし、腕も下町じゃ負けなしの俺と渡り合えるんだ！何よりライとはウマが合うんだよ」「このジンの笑顔何だが……心地いいな……恐らくこの時の僕の回答は……」

「だからさあ……えっ！、もう一度言ってくれ！本当かライ！さすが俺のライバルにして親友だぜ！！」「ジンは僕の肩を掴んで体を引き寄せて僕の頭をワシヤワシヤと掻きだした。

こんな思い出があるのに……どうして……未だに思いだすのに抵抗があるんだろう……」

ライ！ ライ！ しっかりして下さい！！ あれ、この声は

神根島 砂浜

「あれ？ ここは……どこだ？」僕は目の前に映っているのはカモメが鳴いている青空だ……先までクラブの中に居たはず……いつの間に降りたんだ？

「ライ！ 大丈夫ですか？」目の前にユフィが心配の表情でこちらを覗き込んでいた。

「ユフィ……無事だったのか？ 良かった……スザクは？」

「わかりません！ 私も先ほど目が覚めた所で……このあたりを散策していたらライがこちらで倒れていたので駆け寄ったのです。」

「そう……なのか（ユフィが居るということは、この島にスザクやカレン……そしてゼロが居る可能性があるってことか……）取りあえず……あそこにある岩場を目印にこのあたりを搜索しよう！」

「ええ、そうですね……私達が今、式根島の何処に居るのを見当もついでませんか……」

「いや、ここは式根島じゃないよ……もしそうなら、ユフィが居な

くなつた騒動で救助隊が出つてゐるはずだから……こんな静かなはずがない……」

「そう、……ですね」

「でも、気候とか太陽の位置とか考えると式根島の近くの島なのは確かだよ……とにかく、歩いて探さないことには始まらない……ユフィはあそこの岩場の近くで待つててくれるかな？ 僕は後ろにある森で食糧や水の確保でもしてくるよ。」

「待つて下さい！ 私も行きます！」

「ドレスでこの獣道の森に行くのは危ない！ それに目印に誰か居ないと僕がどの岩場に行けば良いかわからなくなるし……ひよつとしたら、ここでおとなしく待てば、スザクと合流が出来るかも知れない……とにかく……！」 僕は近くの流木を真つ直ぐに砂浜の上にしつかり立てて影の位置と僕の腕時計の時間と確認した。

「ライ？ 何を見てるのですか？」

「この流木と時計の時間があつてゐるか確認してゐるんだ……これなら大丈夫だ！ ユフィ！ この流木の影がこの位置までには戻らからそれまでここに居て欲しい！」

「これは、ひよつとして日時計ですか？」

「ああ、とにかくこれで時計がわりにはなる……（後は食糧と水の確保だな……後はこの島の調査だな……） じゃあ、行つてくる！」

……一応木陰にも休むようにな！」 僕はそうユフィに言い聞かせ森に入つて行つた。

「ライ！ 気をつけて下さい！！ さて、時間まで……あれは……」

神根島 森

「これは、水分がよく含んでる果物だな……とりあえずこれで一度戻つたほうが良いな……それにしてもこの島は式根島のからどのくらいの距離なんだ？ いや、今はスザクに合流してユフィの安全確保が大事か……？ 向こうで声が聞こえる……！ もしかしてスザクか？」 僕は音を殺しながら声のする方に近づいた。

「やっぱり、ユファイか……相手はスザクじゃない……いったい誰だ？」僕はユファイ達がいる後ろの方向の木の陰から二人の様子を見ていた……あの黒い衣装……ゼロか？

「ここからじゃ、話の内容がわからないな……もう少し近づいて……！」僕は二人の話を聞こうと近づこうとした矢先にゼロの素顔が見えた……ずる賢く、偉そうな振る舞いにしては体力面では全然ダメだけど、本当は友達思いで優しい奴で少々シスコン気味なのがたまに傷だけど……僕の友達の一人の姿がそこにいた。

「そんな……何でゼロがルルーシュなんだ？ 嘘だろ……どうして……どうしてルルーシュが……何で市民のはずのルルーシュが皇族のユファイと友人関係の様にしゃべっているんだ？ 君とは接点がないはずなのに……」僕はしばらく呆然と立ち尽くすしかなかった。しばらくして、ユファイがルルーシュの元から離れたのでとりあえずユファイの方に近づいた。

「ユファイ……ユファイ！」僕はルルーシュに気づかれないように小声でユファイを呼んだ。

「ライ！？、いつの間にここに？」ユファイは僕がここに居ることに驚いていた。

「食糧を探していたら声が聞こえてね、近づこうにもゼロが近くにいたから……万が一にユファイが人質に取られる可能性があると思っ

て一人になるまでこの近くに隠れていたんだ。」

「そうなのですか……あの、ゼロの素顔を見ましたか？」

「それは……」

「あの、この件は私とライだけの秘密にしてくださいませんか？」

「どうして？ゼロとはどういった関係で……」

「詳しくは話せませんが私の大切な方なんです！」

「それは、コーネリア総督やスザクにもなのか？」

「ハイ、……時期を見て私から話はします。」

「……わかった。この件は秘密にしとくよ。」

「ありがとうライ！ あのお願いついでなのですか……」

「わかった、僕はそのままスザクを搜索して見つけ次第、今日一日足どめして欲しいのか？」

「あつ、ハイ！ ダメでしょうか？」

「納得は出来ないところはあるけど、今、状況としたらこれがベストだからやりますよ……ただ、危なくなったら思いっきり大声で叫んでくれ、 そうしたら、僕かスザクがすぐ駆けつけるから！」

「お手数お掛けします！」 ユフィは軽く会釈をした。僕は手に入れた果物をユフィを渡して森の奥に進んだ。

僕はそのまま奥に進んで行った。正直ユフィの案がなかったら危なかった……それに、もしユフィをつれて二人でスザクを探すにしてもあの気まずい空気に耐えられないかっただろう。

「あの感じだと、僕とスザクが学校でルルーシュの友人関係のことは知られていない……それにユフィはこのエリア11で友人関係なんて政庁で会う僕らと皇族関係しか……皇族、まさかルルーシュが皇族？ バカな、もしブリタニアの皇族が学校に通っていたら大騒ぎになってるはず……そう言えばルルーシュ達は僕と同じクラブハウスで生活している。……もしかして名前も偽名か……待て待て、偽名する理由がわからない、まるで誰かにばれては不味いのか？……まさか皇帝、そうか……それで、ゼロと言う仮面をかぶって戦っていたのか？」 何だかとてもない真実を知ってしまったな……どうしたら良いんだ……ルルーシュやカレンとも戦いたくない……どうすれば……そう考えこんでる間に随分奥まで歩いてることに気付いた。そして、近くで水の流れる音が聞こえてきた。

「川が近いのか……そうだな、今はこの島を脱出することが最優先だ！ そのためには水場を確保しないと！！」僕はさっきまで煮詰まっていたこと思い出さないうちに駆け足で走っていた。

そう言えば前にもこうやって森を走って行ったな……！！！！

「クソ！ こんな時に！！」僕は頭痛が始まりだした状態でも川の水が流れる音の方にと走っていたが記憶の情景が僕の視界を支配し始めた。

EP5 真実の門（前編）（後書き）

どうも、あいかわらず、戦闘シーンが極端に短いです。何とか臨場感が出るように頑張りたいです！！

EP6 真実の門（中編）（前書き）

試験とうで長い間書けませんでした。出来る限り早く続きが書けるように頑張りたいです。

EP6 真実の門（中編）

夢の断片7

何だ……体が重い……何でこうなったんだっけ？……川の流れる音……
……そうだ！、僕は妹の の帽子を取るために川に飛びこんたんだ！！

「おい、おい、大丈夫か？」目の前に金髪の少年が声をかけてくれた。

「君は誰？ ここはどこ？」僕はありのままにしゃべっていた。

「俺はジンだ！ お前はこの川から流れてきたんだ！ いや、本当にビックリだぜ！まさか川から人が流れて来たからさー お前の名前は？」

「僕はライだ！ 助けてくれてありがとう！！」

「良いつてことよ！ 困った時はお互い様だ！！ ところでライは何で川から流れてたんだ？」僕は川に流れた経緯をジンに話した。

「何だよ、そいつら、そんな小さな女の子帽子を取って川に投げ捨てるなんてよゝひでえゝ奴らだ！

でも、ライは根性あるな！ へへへ気にいった！！ なあゝライ俺達の所に来いよ！！ ライなら大歓迎だ！！」 ジンは僕を手を引きながら森の方に走って行った。

……そうだ！ これが僕とジンの始めて会った時の記憶だ……そして……！？ クツ！ 腹が痛い……意識が遠くなる……

コードギアス 蒼の奇跡 EP6 真実の門（中編）

神根島 川辺

「それにしても、ここは、どこよー？ 先まで私達が居たところと違う場所にいるし……ゼロもみんなも居ないし……いったいどうな

つてるのよ!!」私はさつきから、こんなことを口にしながらあたりをウロウロしていた。

「? 川の音が変わってる……ひよとして滝でもあるのかな?」

私は激しく水の音がする方に駆け足で向かった。

「本当に滝があった……ちよつと汗もかいたし、この滝もシャワーがわりにはちよつと良いし……誰もいなさそうだし……水浴びでもして気分をかえよう!」私は滝の近くの岩場まで近付いて服を脱ごうとした時岩場の足元に何か浮いていた?

「何かしら? まさかゼロ!?……ライ!? 大丈夫なの?」引き上げたのはゼロではなくライだった。

「ライ!しつかり!! 息してない!!」私はライに心臓マツサジーしていたがしばらく反応がなかった……

「えつと、こんな時は……人工呼吸ノノノノノ、何を考えてるの私!!い……今は、ライの呼吸を取り……取り……取り戻すが先決よ!カレン! それに、今は誰もい……いないんだから」何かに対して言い訳をしながらライの口元に近づいた瞬間

「誰か、そこにいるのか?」茂みの向こうからスザクが現れた……

「何で……何で……あなたは、私の邪魔をするの!!」 勢い余つてライのお腹をおもいつきりに叩いてしまった。

ゲホ!!

「しまった! ライ大丈夫!?’’すると、今のシヨツクなのか……ライの口から大量の水が吐き出され……息を吹き返した。

「そつか……今の叩いたシヨツクで水が吐き出されて息を吹き返したんだ……ちよつと残念な気もするけど……」

「カレン? 今、何て言ったんだ? 聞こえなかったけど……」
「うるさい!!あなたには関係ない!」

「よく、わからないけど……ライは大丈夫なのか?」

「ええ! 先まで川の中にいたからぐったりしてるけど……水を吐かしたし、呼吸もしてるようだから、取りあえず大丈夫だと思う!」
息はしているから、大丈夫だけど……意識がまだ戻っていない……

ひよっとして、また記憶のことと何か関係があるの？　お願いライ！起きてー！！

夢の断片8

「ライ様！、起きて下さい！　到着しましたぞ。」　僕の目の前に最初に見た時より少し若いガロンが僕を起こした。　どうやら……ここは、馬車の中だな……それにしてもここはどこなんだ？　少なくとも今のエリア11じゃない……しかも、馬車なんて……100年ぐらい前の代物だぞ……まさか僕はタイムスリップでもしてエリア11に来たのか？……だけど、だったら何で現代のKMFや現在の社会の仕組みをしってるんだ？……

「ライ様！、また、考え事ですが？　最近、下町でご友人と遊んでいらっしやるのは御存知ですが、あなたは皇族なのですからやるべき責務はしっかりと行ってください！！　本日は本国から参られました、公爵家のご挨拶参りです。」　どうやら、この時の僕はジント出会って遊んでるみたいだな……それにしても、僕が皇族か……この前の川の一件の時の少年達の言動聞く限り、僕の立場はあまり良くない環境みたいだ、恐らくこの挨拶も建前だけでさしあたって僕の婿養子先の話かそのあたりだろう……何だろうな……このやりきれない思いは……！？　あれ君は

「では私達の方も、こちらは、私の養子のレイだ！」

「初めましてライ様、私はこのトール家の養子のレイです！　よろしく願います！！」　赤髪の少年は僕に深くお辞儀をしていた。

そうか、この時に彼と……あれ視界が揺れる………それに頭に響くこの声は……

神根島　川辺付近

「ライ！、しっかり……ライー！！」　僕の視界にはさっきと赤い髪をした彼女が居た。

「カレン？ カレンなのか？」

「よかつた、無事で……」

「……あれ、何で僕はここに居るんだ？ 先まで森に居たのに？」

「そうだ、あの時川の水が流れる音が聞こえて、音の方に走って、そこから……」

「ひよつとして、この前みたいな頭痛がしたの？」

「……みたいだね、 どうやら記憶が思い出すのが進んでるみたい……今ではその時の感情や……言ったことも思い出し始めてるみたい……ただ、その反動なのか頭痛が酷くなるみたいだ。」僕は寝そべっていた体を上半身だけ起こそうとしたら腹に激痛が走った。

「ちよつと、ライ大丈夫なの？」

「どうやら、川に流された時に腹を強く打ったみたいだ……それにしても、えらくピンポイントに当たったもんだな……」

「………そうね《やばい！！ 先の私がお腹を殴った時のだわ……》」

「どうした、カレン？ なんだか顔色悪いけど……」僕はカレンが心配になりカレンの顔に近づいた。

「ちょー！！ 《顔が近い……どうしよう、先の人工呼吸のことを……／／／／》ちよつと！ 待つて！？ あ あっ ひゃ！？」

「カレン！、危ない！！」僕はカレンがビックリした反動でそのまま後方の川に倒れ込みそうになったのでとっさに手を掴んで止めようとした瞬間に僕も一緒に川に落ちた。

幸いにも川は浅瀬のため溺れることはなかったが……

「カレン、大丈夫か？／／／／／／／」

「ええ！？、 ええ……／／／／／／／／／／／」そう、先の動作で倒れたためカレンが下で僕が上で馬乗り状態で、この島の熱いせいなのか、カレンのパイロットスーツが胸元まで緩めていたので目のやり場に困った、何より倒れた拍子なので二人の顔との距離が近い。

「……《何て、喋ったら良いんだ？…ダメだ、頭が回らない！！》」

「…《どうしよう…》、何でこうなってるの？ 何で体が動かないのよ！！》」

『あ…あの』ダメだ、二人同時に喋ったら何て答えたら良いんだ？ と言うか…どうしたら良いんだ？

「カレン！！、ライは目を覚ましたかい？」茂みの向こうからスザクの声が聞こえた瞬間、僕とカレンは川から上がってお互い背中合わせで座った。

「あ…あれ？、スザクもこの近くに居たんだ〜（スザクの声の方向から聞こえた距離からして僕達のやり取りは見てないはず…）」
「うん、僕もこのあたりで散策している時にカレンとライが居て、取りあえず僕はこのあたりの食べられる物を探していたんだ。」スザクは両手抱えて持ってきた果物を僕達に見せた。

「ところで二人は背中合わせになってるの？」

「えっ！！ あっ…え〜と、そうそう、起きて立ち上がるうとして立とうとした時に足元がふらついてカレンにもたれ掛る様にそのまま川に落ちてさあ〜、火を起こすものがないから背中合わせでお互いの体温で温めていたんだよ〜そうだよねカレン！」

「ええ！ そうなのよ！！ まだ、動ける状態じゃないのに無理して体を動かして倒れそうになったの支えようとしたら…足元がすべつて、それでそのまま落ちたの！！」僕たちは二人して少し慌てた状態でお互いの状況を合わせていた。 多少違えど大まかには合ってるから嘘ではない。

「そうなんだ、まったくライは相変わらず無茶するな〜それで傷なんかしたら…」

『キスはしてない！！』

「いや、二人してそんなに傷はしてないって言わなくても…」

『傷？（ま…紛らわしい言い方するなあー！！！！！！！！！！）』

「二人して顔赤いけど、大丈夫かい？」

「いや、それにしても寒いな〜スザク火をつけるのない？ さすがに背中合わせだけで体を温めるのは無理そうだから…」

「えっ、そうだね、今から火を起こす枝とか取ってくるから」スザクは取ってきた果物を僕達の近くに置いてまた茂みの中に入っていた。

数分後

「それじゃ、ライも僕とカレンと同じように目が覚めたらこの島に流れ着いて、島の散策している間に誤って川に落ちてそのままここに流れ着いたってことで良いのかな？」スザクは焚火の火の具合を見ながら僕がこの川辺に来た経緯を確認を取っていた。正直、スザクに記憶が思い出す時の頭痛が起きて目まいして川に落ちたとは言いにくかったが、今言えば、この間チヨウフの時のことも問い詰められそうだったから仕方なくそう説明をした。

「うん、川の水が流れる音がしたからさ、ちょうど長時間歩いた後だったから全速力で駆け抜けたらさ、底が崖になつてから、それでそのまま落ちて見事にここまで流れ着いたわけなんだ。」

「そっか、見たところ大きな怪我はないみたいだから一安心だけど、ライにしては不注意な行動だな。」

「仕方がないだろのどが渴いていたんだから（……正直ルルージュの件でそれどころじゃなかったし……そうだ！！、カレンはゼロの正体を知ってるのか？）カレン……こんな時に聞くのもどうかだけど……カレンはゼロの正体を知ってるのか？」

「……やっぱり、ライも聞くのね……」

「も？ スザクも聞いたのか？」

「ああ、どうやら団員のメンバーも知らないみたいなんだ。」

「そっなのか……悪い、じゃ〜これで最後にするから……ゼロはカレンを含むメンバーに日本をブリタニアから取り戻すって言ったのか？ それともブリタニアを倒すって言ったの？」

「ええ、私達の日本を取り戻すって言ったわ！」

「そっか、……良かった。（ルルージュ、君が何の目的で黒の騎士団を設立したかわからないけど、カレン達と共に日本を取り戻す考

えはあるみたいだね……だとしたら、ゼロとして君の真意が知りた
い！！」

「良かった？何を言ってるんだ！！ ライ、ゼロは間違ってたやり方
で日本を取り戻そうとしているんだぞ！！」

「いや、僕が良かったって言ったのはゼロのやり方じゃなくて、ゼ
ロにも交渉の……そうか！それでスザクを……」

「どういうこと？ライ、ゼロが何でスザクと関係があるの？」

「いや、ゼロが今回スザクを捕獲の目的のの意味がわかって……」

「目的？、 ランスロットの捕獲が目的じゃないのかライ？」

「違うよスザク、それだけなら、あの時にスザクを交渉はしないは
ずだ…ブリタニアの象徴を取るためだ。」

『ブリタニアの象徴？』

「良い二人とも、今やゼロを救世主となって日本人の希望になって
いたんだ……最近まではね」

「ちよつとライ！！ 今の聞き捨てならないわ！！ ゼロは私達、
日本人の希望よ！！ いくら、ライでも聞き捨てならないわ！！」

「カレン！！ 君はあんなの奴が日本人の救世主になるって本気で
思ってるのか？ 仲間にも素顔を見せない奴を」

「じゃ！！ ブリタニアの中に日本人を救おうと考えてる人物はい
るの？それともスザク！あなたが日本の救世主っていつつもり？」

「そうだよ。」

『ええ！！』二人は僕の言葉に驚いてしばらく沈黙していた。

「少なくとも、客観的にみたらブリタニア側からみたら今のスザク
は1つの日本人の象徴になってる。」

「今、エリア11で二つの日本人の生き方が示されてる。 ゼロの
外からの革命によってかつての日本を取り戻す道か、スザクのように
名誉ブリタニア人になってスザクのようにブリタニアから認めて
もらう新しい道か…当然、黒の騎士団はブリタニアの象徴になりつ
つあるスザクを騎士団に迎え入れてブリタニアを骨抜きにして叩く
つもりだろうけど（もっとも、ルルーシュはスザクと戦わないため

の策だろうけど……」

「それなら、なおさら僕は黒の騎士団の要求には答えられない！ゼロのやり方じゃ、状況を悪くしてるだけだ！！」スザクはいつになく熱が入った意見を言った。正直、スザクがそこまでゼロとしての考えが気に入らないにしてはちよつと感情的な気がする。

「それじゃ、スザク！ブリタニアのやり方が正しいと言えるの？日本最後のサムライ枢木玄武首相の息子とは思えない発言だね！」

「二人とも！！言いたいことはいっぱいあるみたいだけど……取りあえず場所を移動しようよ 海岸に移動して一晩過ごそう、そこで火を焚いていれば海の向こうの誰かに気づくかも知れないだろう」僕は立ち上がって川の流れの方向を考えて海岸があると思う方向に歩きだした。

「ライ、海岸だったら、こっちの方向が近いよ！」スザクはすぐに僕を追い越して海岸のある方向に誘導しながら歩いた。

「待ってライ！ そんな足元がフラフラの人をほっとくわけには行かない！！ あくまでも一時的にあなた達の捕虜としての形だけども、ゼロをみつ……」

「わかつてる。ゼロが見つけるまでの間でも僕達を敵として見ないなら僕は助かるよ！ ありがとう、カレン！！」

「／／／／／あ……あくまでもゼロが見つかるまでの間だけよ！！」すぐさまカレンは左腕掴んでカレンの肩を借りる状態で歩き出した。

後編に続く

EP6 真実の門（中編）（後書き）

正直、ここからの展開に悩んでいます。自分もみなさんが楽しめる展開に慣れたいと思います。

EP7 真実の門（後編1）（前書き）

三部内容のつもりが上手くまとまらず後編だけが細かく分けることになりました。

何とか2で終わるようになりたいです。

EP7 真実の門（後編1）

???????

黄昏に輝く神殿に二人の人が居た。

「シャルル、良いの？彼をこのまま生かして」一人は見た目は10歳になるくらいの金色のロングヘアをした少年が目目の前に問いかけた。

「良いではないですか兄さん、彼の目覚めは我々の計画に必要な要素です。」

「確かに彼が目覚めれば僕の兄のB・Bの手がかりになるけど……同時に彼が僕達の敵になる可能性だってあるんだよ……その辺のことはわかってるよね？」

「愚問ですよ兄さん！ そのための私のギアスがあるので……」男は両目が赤く輝きだした。

「なら良いや、僕としては例の機械を作動するか試してみたいけどね……」

「相変わらず兄さんはやるこゝろがえげつないですね」

「フフ…仕方ないよ、僕達の計画を成功をさせるためなら手段なんて選んでられないんだから……それともシャルル、今さら怖気づいたのかい？」シャルルは神殿の中央に立ち堂々とその少年を見た。

「何を言ってるのですか兄さん、私達のこの計画は私達の祈願でもあり世界のためなのですから」

「皇帝陛下！！」部下らしき人物がシャルルの耳元で伝言を伝えた。

「シュナイゼルが……フン、好きにさせる…我々の計画に狂いはない！（さて、あなたは我々の計画にどうかかわるのでしょうか？銀狼の王よ！）」

月夜が輝く草道

「ライ様、先ほどはすみません」　レイは僕に申し訳ない表情で謝っていた。

「気にしないで良いよ、それに僕達しか居ない時ぐらいライって呼び捨てで良いから！　それに謝るなら僕以外にも居るだろう？」

「しかし！彼は！！！」

「何だよ！！　市民には謝るにも価値もねえーてか？　ったくライのダチじゃなかったら、お前も何発かは殴ってるぞ！」

「いや、そのつもりはない！！　確かに最初はライ様と市民と遊んでるって聞いてやめさせるつもりだったが…　本来上流階級である私達貴族が市民の助けは一切していない現状を見てしまつては…　それにあなたに礼を言うのは何と言うか釈然としなかつたと言つか…　納得がいかない……」

「あゝゝゝめんどろな奴だな！　どうでもいいことウジウジしゃがつて！！　そんなんだからライと同じ年なのに小せえーんだよ！！！」

「背は関係ないでしょう！！　あなたみたいな筋肉バカよりマシですよ！　ライさ……　ライさん！　市民と遊ぶにしてもこの野蛮人とはやめましよう！！！」

「だどどどど！！　この野郎黙つて聞いてれば言いたい放題だな、オイ！？　このどチビ女男！！！」

「プチ　あなたは私にしていることを言いましたね！！　このアホ猿！！！」

「まあまあ二人とも！　喧嘩はアジトに戻つてからにしようよ！！　じゃないと僕がル　に怒られるよ」僕は二人をなだめながら僕達の自警団のアジトに向けて再び歩き出した。

「そうだな！　ル　の怒るとこの女男よりおつかねえゝゝからな」ジンは僕達に笑いかけながら僕達の先頭を歩いた。

「誰が女男だ！！　私の名はレイだ！！　……　いい加減に覚える……　ジン！！　それよりライさん、はやくアジトに戻りましようル　さ

んも心配していますから！」レイは僕の腕を引っ張って走り出した。「おいおい、俺だけは呼び捨てかよ……ライ、レイ！ ビリの奴はアジトの周りにある湖を一周泳ぎな！」 ジンは全速力でアジトに向けて走りだした。

「ずるいぞ！ レイ急ごう！！、 ジンを抜くぞ！！」

「ハイ、ライさん！！」僕達もジンを追い抜くつもりで必死に走った。

……そうだ、この時レイが僕達の自警団に加わったんだっけ……この頃は家にはほとんど居なくて毎日ジン達と居たな。それを見たルがズルイってせがまれたな……ダメだな、段々と思いだしてきたのに妹と母親のことは全然ダメだな……何でだろう君や母親のことを思うと胸が痛むよ……

ライ！ 大丈夫？ 何で思い出せないんだ？ 何で君を思う

とこんなに苦しむんだ？

ライ！ 大丈夫！？ 僕は……

コードギアス 蒼の奇跡 EP7 真実の門（

後編1）

神根島 海岸

「ライ！、 しっかりして！！」 カレンが僕の肩を揺らしていた。

外はいつの間にか夜だった。

「えっ？ あれ、どうしてんだ、僕？」

「何って、私達が話しあってる最中にライが……大丈夫？」 話……そうだ、スザクが取って来た魚を焼いて食べていて、二人がまた日本についてそれぞれの思いで話している姿を見て……そうか、その姿が先のジンとレイの関係に似ていたから記憶がフラッシュバックして思い出していたんだ。

「どうしたんだよカレン？ 大丈夫、ボーとしてたのは悪かったけど、今はちゃんと聞いているから」

「そうじゃない！ だったら何で泣いているの？」 そう言われて僕は

頬を触つてみたら、確かに泣いていた。

「本当だ……何で泣いてるんだろ？ 自分でもよくわからないよ）違う、多分先の記憶の映像で妹の名前が拳がったのにそのことに全く思い出せない自分が悔しくて、情けなくて泣いてるんだらう……本当に情けない僕は……）」

「ライ、僕達に隠してることがあるなら話して欲しい！ 前に言った通り僕は君の力になりたいから！！」 スザクが強い眼差しで僕を見て言った。

「……確かに隠しきれぬ症状じゃないな……カレンには少し話したけど、ここ最近になって記憶が戻り始めている。最初は寝ている時だった。最初の方は声だけ聞こえる状態だったんだけど、学校で倒れた時を境に起きている時でも……まるで、頭の中の記憶と外の情景や思いつて言うのかな？ とにかく記憶の中で起きた状況やその時の思いが今の自分の行動がリンクすると記憶が蘇えるようになった。ただ、その反動か頭痛が起きたり、意識が飛んだりする症状が始めている。見る記憶の方も日が経つにつれて、人の顔やその景色やその時の感情やいった言葉も次第に思いだすようになっていった。」

「そっか、ライの体調が悪くなってるのもその記憶が思い出す時の症状が原因だったのか……」

「でも、今の言い方だとライに取ってあまり良い記憶じゃないことしか思いだしてないの？ 前に言ってたことと関係があるの？」

「いや、確かに嫌なこと思い出してるの事実かもしれないけど、その時の友人や妹の顔を見れたことは嬉しかったよ……ただ」

「ただ、何だい？」

「今の段階になっても妹の名前も思い出せないことや、記憶の回復が進むにつれて僕自身が何者なのかわからなくなってくるんだ！」

自分は何故貴族でありながら他の兄弟から疎まれているのか、あれほど友人関係に恵まれていたのに何故ギアスと言う、あんな恐ろしい力を求める事態になっているのか、そして、今でも気になる

のは最初の時に見たあの僕が宣言した言葉は何故自分自身がここま
で恐怖しているのかわからないだ。

「悪い、ちよつと風にあたって来るよ。　すぐに戻るから……」僕は
立ち上がって砂浜を歩きだした。　カレンもすぐ後ろから行きそう
だったが僕が首を横に振つたらすぐに大人しく待つていてくれた。
僕はカレン達が見えるギリギリの位置に腰を置いた。

「ここなら、カレン達も見えるから安心するだろう……それにしても
静かな夜だな……ユフィとルルーシュは大丈夫かな？　本当は
ルルーシュの過去を聞くつもりだったけど、さすがにスザクにカレ
ンの前でルルーシュの過去を聞くのは不味いよな」カレンの様子
だとゼロの忠誠心がすごかったな。　あれじゃ、ゼロの正体がルル
ーシュなんて言ったらどうなるんだろう？　信じないだろうし……い
や、ゼロのことに關してはスザクも一緒だな……まったく今日は驚く
ことばかりだな……カレンがああ赤い機体のパイロットでゼロの正体
がルルーシュ……しかも僕の記憶がここに來て急激に早くなってる」
僕はそのまま寝転がって夜空を眺めていた。

「戦っていた敵が僕にとってかけがえのない人達なんて世界は僕達
にどこまで残酷な試練を与えるんだ？　あの頃の僕もそう望んでい
たのか？」僕は十字架を月と重なるようにして眺めていた。

「さて、そろそろ戻るか……（おい！　ライ）　うう！」僕は立ち
上がるうとした瞬間に膝の力が抜けるように倒れた。

「またか……（ライさん！）……意識が」……

夢の断片10

満月が見える広い草原

「おい、ライ！　今日の褒美だ！！」　ジンは僕にリンゴを投げ渡
した。

「おお！　大きいリンゴだな～いただくよ……おいしい！！」

「まあ、今日でライは15だから、成人の祝いも兼ねてな！　本当
は酒でもしようか考えたけどお前酒の匂いでダメだからな～まあ～

ちょうど良いのがうちの近所のばあちゃんが営んでるリンゴが豊作
みたいだからいくつかおすそ分けで貰ったんだ!!」

「いや、でも働いた後に貰ったものだから、いつも家で食べてるや
つより断然美味いよ!」

「そいつは良かった! それにしても、俺たちが自警団を設立して
ちょうど5年か〜ライと出会ったのがちょうど7年かあ〜、最初に
会った時はビックリしたけど…今では義勇軍の第8部隊の隊長か…
俺達も随分昇りつめたな〜」

「もう、そんなに経つんだ〜、ちょうど自警団の設立の年にレイ
が入ったんだだけ? そこから色々あったな…でもジン! 隊長の件
は僕で良かったのか? だって自警団を設立したのはジンの人望が
あったからだし…義勇軍の件もジンがあこがれたんじゃないか?」
「良いんだよ! 俺は上に立って命令するより、好き勝手暴れられ
る方が性に合ってる…それにここまで育て上げたのライやレイの頭
脳のおかげだ!」

「へえ〜、ジンがレイのことを褒めるの珍しいな〜」

「おいおい、俺はレイのことを生意気なガキとは思ってはいるがあ
いつの実力はライ同様認めてるんだぜ! ……それにしてもあの二
人は何してるんだ?」

「ああ〜、何か忘れ物があるから取りに行くって言ってたな……確
かに遅いな…」

「ふ〜ん、最近あの二人コソコソしてるな…お兄さん!」ジン
はにやつきながら僕を見てからかい始めた。

「何だよお兄さんって…別に良いんじゃないか仲が良いのは悪い事
じゃないんだから!」

「おやおや、随分つと余裕だな…後で泣きついて俺に相談するなよ
〜」

「何の相談だ?」僕はジンが言ってる意味がわからなかった。

「……………ライ……………お前のこつ言うのに疎いのはここまで来ると罪に
近いな…はあ〜……………まあ〜ライらしいと言えばらしいけど……………」ジ

ンは今までないガツカリした表情しながら草原に寝転がっていた。
『遅くなつてすみません!!』 ふつと後ろを振り向くとレイと妹が居た。

「何、取りに言つてたんだ？」ジンは二人が来たのを確認して起き上つて近づいて行つた。

「ハイ！兄上にこれを」 黒い生地に銀色の狼の横顔と月見草の花の絵柄が縫われているペナントを渡された。

「これは何の旗だ？ いやそれよりこれ？手作りか？」手作りにしては職人並みの出来栄えだった。

「ハイ！ 私とレイさんで兄上の15歳の誕生日にっと思ひまして！」

「ライさん、このマークは僕が思つた自警団のマークです。」

「自警団の？ 確かにチーム名やマークなんて作つて無かつたけど… 何で狼と月見草なんだ？」

「これは僕がずっと前から考えてたのですが、実はですね…」

「なるほど、狼はライで色が銀なのは髪の色からだろう、月見草は確か自由の心だっけ？ だいたいそんなもんだらう？」

「凄いですジンさん!! 何で一発でわかつたんですか？」

「へへへ、俺は天才だから」

「あなたつて人はどうして人が説明しようつとした瞬間にわつてはいるんですか!!!!」

「まあまあ、ありがとう二人とも！ これは僕達の自警団のシンボルだ!!」僕がそう言つた瞬間みんな思い思い嬉しそうな表情だった。

「これで兄上は明日から義勇軍での出兵でも大丈夫です!!」妹は胸張つて宣言していた、満月をバックにして言つたせいか妙に神々しく見えた……月……そうだ……君の名前は

神根島 海岸

「ルナ……そうだ、君の名前はルナだ……よかつた……やつと……や

つと思い出せた……」 僕は十字架を眺めながらまた泣き始めていた。

「ふ〜ん、ようやくここまで思い出せたんだ！」 突然頭に直接声が聞こえた、今まで違い頭痛の傾向がなかった。

「あつ！ 大丈夫、僕との会話はあいつらがした記憶捜査と違うから心配しなくて良いから！」 記憶捜査？ どういうことだ……

「まあまあ、それより腹は括った？ 記憶を取り戻すことに……」

何なんだ？ 先からこの声は……いや、この声はまさか

「君がすべてを取り戻す気があるならここに向かいな〜」 すると頭の中に映像が流れた。おおきな石碑の壁があった、まるで大きな門のような形に見える。 何より門の中央のマークがギアスのエンブレムがあった。

「それじゃ、また、会う時まで〜」 その瞬間に頭の中の映像も声も聞こえなくなった。 あたりを見わしたが声の主はいなかった。ただ、背後の大きな岩陰に明りが見えた気がした。

「ライ、どうしたんだ？ そんなにキョロキョロして！」 スザクは突然背後から出ってきた。

「！！ ビックリした！ 急に後ろから声をかけるなよ！！」

「いや、ライの様子が気になって……気のせいかあの大きな岩陰の向こうが明りが見えた気がしたんだけど……」

「やっぱり、スザクもそう見えたのか？ ひよっとしたら捜索隊が来たかもしれない。 明日の朝に行ってみないか？」

「そうだね、ひよっとしたらロイドさん達が探しに来てくれたかもしれないからね。 ユフィのことも何かわかるかもしれない！」

「そうだね、（恐らくルルーシュも今の明りに気付いて向かうかもしれない……そうだ、その時にゼロの真意として聞こう！！） それじゃ、もう寝るよ今日は散々だったからね！」 僕はカレンが居る焚火の方に向かった。

「ライ！、君に話がある！！」 スザクは僕の前に来て真剣なまなざしで僕に問いかけた。

「それは、今話さないとダメか？　出来ることならこの島を脱出した後が良いんだけど？」

「……そうだね、ごめん　でも、この島を脱出した後にちゃんと聞いてほしい！！」

「わかった、　それじゃ、お休み…二時間後に交代しよう」そう言つて僕は焚火の近くの岩陰に持たれる形で眠る準備をしていた。

「わかった、お休みライ！」スザクの声が聞こえたかぐらいに睡魔がきてそのまま眠ってしまった。

「ライ！、まさか君がこれほど苦しむ道になるなんて思わなかったよ……（正直、今の君にこれ以上、体調が悪化するなら軍を辞めて学園生活を送ってくれって言つのは無責任な話だね）でも、君の存在は僕達には欠かせないものなんだ！　それに、これからの戦いにカレンとは戦わせたくない！　君は十分、僕を助けてくれた…だから、今度は僕が守りたい！　この僕の生き地獄に君を巻き込みたくないから…」スザクは熟睡しているライに語りかけるように喋っていたが、当のライは静かに寝息を立てながら寝ている。

続く

EP7 真実の門（後編1）（後書き）

今回は、スザクの思いやようやくライの妹の名前が出せるなどの描写が出来て良かったです。何とかテンポ良く書けるようになりたいです。

EP8 真実の門（後編2）（前書き）

何とか『真実の門』編を今回で完結させることが出来ました。試
行錯誤で何回も書き直したのでめちゃくちゃ所もありますが、み
なさん楽しんでもらえることを願っています。

EP8 真実の門（後編2）

翌朝 明け方

「……あつ、イケない！ ウトウトしていた。」 僕はついさつきスザクと見張りで交代したが…さすがにキツイな…スザクは…よく寝てるな…カレンは…あれ！？」

「あれ、カレンが居ないウトウトしてる間にどこかへ行ったんだ！ 何処だろう？ いや、落ち着け！！ 足跡を追えばすぐに見つかるだろう！」 僕はカレンが通った足跡と思われる足跡の方向に歩いていった。

「どうやら昨日の川辺の方向に向かっているみたいだな…まさか、ゼロ（ルルーシュ）を探しに行ったのか？ 不味いな…今、ユフィと居る所見つかつたら色々と面倒だ早く見つけないと！」 僕は駆け足で走りながら茂みを飛び越えた。 辿りついたの昨日カレンに会った滝の傍だったけど…そこにカレンが居た…裸で

「なあ！？ ……／／／／／／／／／／／／／／／／ライ！？ どうして居るの？」 カレンはすぐさまに騎士団の上着で体を隠して顔を真っ赤にしながらこっちを見ていた。

「いや、…居眠りしてる間にカレンが居なくなってたから…てつきりゼロを探しに行ったのか？ と思ったからさ！ それで、焦って探しに行ったら…こうなって…このような状況に」 何だろう言ってることが事実でもこの状況で言うつとのぞきをする口実を言ってるみたいに話してる自分が恥ずかしくなってくる。

「／／／／わかったから！！ とにかく向こうに向いて！！」

「ハイ！ すみません！！」 まさか、朝からこんなトラブルになるなんて…こんな調子で大丈夫か？

〜数分後

取りあえず着替えたカレンは数秒間の間に目にも止まらない早さで僕を数発殴った後、スザクの居る場所に歩き始めた。

「その、ごめん！ のぞくつもりはなかったんだ……」

「もう、いい！！ とにかく、女の子が勝手に居なくなつた時は男の子はおとなしく待つのが礼儀よ！！ 本当にライはデリカシーがないわ！！」

「グサ　うう！　以後気をつけます！！（もう朝からすでに心折れそうだ……）」僕は重い足取りで何とか歩いてる状態だったが、カレンの表情が何だか暗かった。

「ねえ…ライは私のことをどう思った？」やっぱり聞いてきたか…いや、本来はそこから話すべきだったかもしれないのに…ちゃんと向き合わないとダメだと思って僕はカレンと向き合った。

「……どうして急に？……って言うわけじゃないな……正直、色々驚いたかな。でも、どこかで納得する所はあつたかな？　君が日本人の対する思いとか、僕が日本人じゃないかって思った時の安堵した時の顔とか……だから、聞かせて欲しい！　カレンは何のために戦っているのか！！」僕はありのままの思いにカレンを伝えてみた。

しばらく沈黙はしていたが、深呼吸してから話してくれた、彼女の本当の名前は紅月カレンで母親と兄と暮らしていたが7年前のブリタニアの攻撃を受けて、カレンの人生がすべてが変わつた…日本人の名を捨てられシユタットフェルトとして生きなければならぬ屈辱や、兄がレジスタンスとして活動していて命を落として兄の意思を受けづいて必死に戦っていた。そんな最中にゼロつと言う男が現れてブリタニアから日本を取り戻すことに希望が見え騎士団として活動に奮起していた。

だけど、その途中で母親のリフレインに蝕まれていた、そして母親の思いをしり日本取り戻すことに拍車がかかった。それでも、シヤーリのお父さんを巻き込んだことや僕とスザクと戦うことに苦し

んだりしたが、それでも日本を取り戻すことをあきらめることはできない…それが、カレンの思いでもあり心境だった。

「……そんなことが…」この先の言葉出なかった。カレン自身が黒の騎士団で戦うのにそれなりの理由と覚悟あることはわかっているつもりだったけど、いざ聞いてみるとカレンはずっと一人で戦っていたんだっと思うとカレンの黒の騎士団の行動が間違っていると、すごいと安易に慰めの言葉を言える状況ではないことだけはわかった。

「ライはやっぱり優しいね…」先ほどの暗そうな表情にほんのわずかだけど彼女は笑ってくれたような気がした。

「優しい？ そうかな、ただ、どう言ったら良いのかわからないだけだよ。」

「でも、私の話を聞いてくれた。それだけでも、十分すぎるよ」「カレンはいつの間にか暗い顔していた僕を照らすように笑顔を見せてくれた。

彼女の笑顔は何度見ても僕の心を優しく包むように心地良いものだけど……君の力になりたい！ だから、もっと僕を頼ってくれ！！ もし、依然のようにお互いの事情を知らなかった僕ならすぐに言えたのに……今は、お互いの立場とか、事情知ってしまったて……立ち止っている。そんな自分が嫌なのに…カレンに何て言葉をかけて良いかわからないことにただ悔しさが募るばかりだ。

「そろそろ、スザクが居る所に戻ろう！ 昨日見た明りも気になるし！」僕は自分の中の思いを押し殺して、彼女と一緒にスザク達の居る所に戻った。

30分後 神根島 森

「ねえ、本当にこんな所に捜索隊の人達がいるの？」僕達はあれから昨日の夜に見た明りがあった場所に向かって歩いていった。

「昨日、僕とライが確認したあたりがこの近くだと思うんだけど…」

しばらく歩くと茂みを抜けた。あたりは数m木も障害物もない平地だった、唯一気なる点は、約5、6mぐらい四方に伸びた石の作りをした床が見えていたぐらいだった。

「おかしいな？ このあたりに明りがあったと思っただけど違っただかな？ 取りあえずこの辺を……！？ 誰だ！！」 僕は前方の茂みに人の気配を感じて思わず声を出してしまった。

「スザク！ ライ！」 茂みの向こうからユファイが現れた。

「まずい！ ユファイが居ると言うことは……」

「動くな！ 彼女は私の捕虜だ！！」 ユファイの後ろからゼロことルルーシュが現れた。

「そこにいる私の部下を返して貰おう！ 人質交換だ！！」

「ゼロ！ お前またあ！！」

「待てスザク！！、要求を受け入れよう！」 そうだ、事情知ってる僕がこの場を何とか納めないと

「でも、ライ！！」 スザクはゼロの元に近づこうとした。

「近づくな！！ フツ 卑怯だと言うのか？ フッフ いかなる犠牲を払おうともテロリストを排除する君もこのルールに乗っ取り主を見捨ててみるか？」 ルルーシュはお得意の口勝負の上に不気味な笑いをしながらスザクの動きを制止させた。

「（ルルーシュとしてみると……何だろう 小者にしか見えないな…… 迫力がないっと言うか……何だがな……いや、今は） そんなことはしない！ 要求を受け入れる！！」

「ライ、何で？」 スザクは僕の言動に納得していないようだけど、

「ここでつまらない揉め事している場合じゃないんだ。」

「今はユファイの命が大事だ！ ゼロ！！どうなんだ？」

「良いだろう……ならお互いの中央にあるあの石碑の床で交換だ！」

僕はそれぞれゆっくり石碑の床に向かってゆっくり歩いていたが……

「但し、人質がそちらにいたら……」ルルーシュの言ったと同時にカレンがスザクを拘束する。

「おやめなさい！」

「何にも出来ないお飾りのお姫様はだまってな!!」
「まあ!! スザク、ライ! 私に構わず戦って下さい!」
「今だ!!」スザクはカレンの拘束を解きユフィの所に向かった。
ルルーシュはユフィから離れ距離を取りながら警戒していた。僕
とカレンはそれぞれの主の元に近づいた時だった。
「フフフ 来たね」この声は!? 頭にその声を聞いた瞬間に
僕達の足元の石碑の床がギアスのマークが赤く輝きだした。そし
て僕達の足元が沈み始めていた。

神根島 遺跡

「なにこれ? どうなってるの?」ロイドはモニターに映る異常
数値に驚いており…

「お下がりください! わが君!!」バトラーは現在の主であるシ
ユナイゼル殿下を下がらせている最中に目の前の壁画前の天井が崩
れ落ちて来た。そこから五人の人影が見えた。

「枢木少佐! ライ少佐! それにゼロ!?」僕は遠くでロイドさ
んの声が聞こえた気がしたが僕は目の前の壁画に目を奪われていた。
「これは…昨日見た(さあ)手を翳すだけですべて戻るよ! 但
し君にその覚悟があるなら) !? また声が…」

「ライ! スザク! しっかりして!」そうだ! 今はユフィの
安全が先だ! 僕はユフィと放心状態のスザクを遺跡の柱の影を
誘導して向かった。

「取りあえずこれで…!? 危ない!!」僕達の頭上に瓦礫が落
ちて来たので咄嗟にユフィとスザクを突き飛ばした。

「ライ! 大丈夫ですか?」
「何とか…!?」僕は何とか瓦礫を後方に受け身を取る形で避け
たが、立ち上がる時に壁画に手をかけてしまった。

「しまった(あらあら、君には迷ってる選択肢はないようだね……
まあ…武運を祈るよ!)!!! 何だ! 頭が……」頭の中から聞こ

える声を聞いた瞬間に電気が通った様に頭に大量の情報が流れ始めた。

記憶の邂逅

そうだ！僕とルナはブリタニアの領土の1つに君臨する父とどう言った経緯で巡り合ったかはわからないけど日本の貴族である母の間に出来た子供だった。僕は見渡す限り草原に僕はルナと母さんと暮らしていたんだ。でも、父である国王に僕達に自分の領土内に暮す様に命じられてあの国に来たんだ……。そこで待っていたのは、血筋にこだわる異母兄弟たちのいじめだった！僕はブリタニアに近い顔のため母や妹ほど仕打ちはなかったが酷い日々だった。そんな時にジンと出会って僕は初めての友達が出来た。そして僕は下町を守る自警団を立てて活動していた。その活動している時にレイに出会いそしてルナも加わりますます僕達の活動が活気があらわれたおかげで国から義勇軍に昇格した。この時は僕はそう思っていた。

だけど、僕達の活動が異母兄弟達から疎まれ僕達は濡れ衣を着せられてルナはよその国に政略結婚に僕・レイ・ジンを含めた下町の人達は処刑にされそうな時に彼に出会ったB・Bに出会い僕はギアスを手に入れた。そして、僕はみんなに助けるためギアスを使って父と異母兄弟を殺した。そして僕が王になったが：当時のブリタニアは他国との戦争が活発で僕達は生き残るために戦い続けた。そして、ぼくはあの日すべて失った。たった一言ですべてを失ってしまった。「北の蛮族どもを皆殺しにしろ！」その命令した後映ったのはあたり一面が血の色に染まっていた。そこにはルナ：母さん：ジン：レイ：下町みんなが横たわっていた。そうだ、僕が殺したんだ！

「うわあああああ！！ 違う！！僕は！僕は！ こんなことをするために戦ったんじゃない！！ 僕は！僕は！……」自分の手が血

に染まってるの見て僕の意識が途切れた。

くとある古い洋館

「ようやく、目を覚ましましたか……これで、私達の計画が進みますね。」黒いフードを被った男が目の前の少年に語りかけていた。

「ふん、そうなんだ！ 僕としては彼の目覚めはあまり興味ないね……」少年はあまり興味ない表情で近くにあつた椅子に座つた。

「お前はシャルルほど、彼には関心は無いみたいだなV・V！」

「僕にとって彼はシャルルとの野望を叶えるために必要な駒程度にしか思つてないよ！ 駒に情が湧く必要がないからね」冷たい表情でありながらも不気味な笑みを浮かべるV・Vだった。

「その駒を目覚めさすのに私は2000年を時を費やしたのですから、多少なりとも嬉しくなるのは必然だよ……」

「まあいいや、わかつてると思うけど、彼の目覚めが、僕達の邪魔になるようなら……その時は彼と君を消すからね」

「その時があれば……」 男たちはライの目覚めに各々野心を胸に暗雲漂う空を眺めていた。

ライの目覚めが世界の流れが大きく動くこととしていた。

続く

EP8 真実の門（後編2）（後書き）

やっと物語の核の部分が見えてきて良かったです。後は矛盾が出ない様に頑張って書いて行きたと思っています

EP9 苦悩(前書き)

今回は騎士団のキャラクターがです。
このイメージがみなさんに合うことを願っています。

「あれ…僕は、どうしてここに？」 僕の目の前の景色は白い霧が濃いため辺りがほとんど見えない状態だったが、僕の後ろから声が聞こえてきた。

「兄上」「おい、ライ！」「ライさん、こっちです！」「ライ！」「ライ様」振り返ればルナ・ジン・レイ・母さん・ガロンが居た。

「みんな！ 無事だったのか？」僕はみんなの元に駆け寄ろうとしたが中々距離が縮まらなかった。

「何言ってるのですか？兄上……………兄上が私達を殺したんじゃないですか？」その瞬間にみんなの姿が血で紅く染まって横たわっていた。

「あ…………あ…………ああああああああああ……………！！！！！！！！！！」

自分の部屋

「ハアハア…………僕が…みんなを…………この手で…………この手で」僕は…これからどうしたらいいんだ…

コードギアス 蒼の奇跡 EP9 苦悩

翌日の朝方のゲッターの公園のベンチ

「もう…………朝か」そう僕はあの後、眠ることができず深夜から歩きでこのゲッター周辺を目的も無くただ、歩いていた。僕はあの

島で記憶を取り戻したショックで意識を失って気がついたら東京租界の病院に居た。ロイドさんの話だと、僕が気絶している間にゼロ（ルルーシュ）とカレンに試作機のKMF「ガウエイン」を奪われ逃走されたみたいだ。

スザクはゼロを始末する命令を無視した行動により数日の間、軟禁されるみたいだけど、ユフィの騎士だからすぐに解放されるってセシルさんが言ってたから大丈夫だろ……問題は僕自身だ！

僕はこの時代の人間でも無い上に自分の大切な人をこの手で殺してしまったんだ。

正直、あの惨劇の部分を見たせいなのか、あの時のショックせいなのかはわからないがあの前後の記憶とこの現代の学園に来る前の記憶は未だに無い……だけど……僕自身が原因なのは変わりはない……本当にこれからどうしたらいいんだ？ そんな思いに耐えれず外に出ってしまったのだ。そして、今は寂れた公園のベンチに腰掛けられている。

「………何であんなことになったんだ？ 僕はただ、母さんやルナがいじめられない場所を作るため、差別をなくすためにジンとレイで自警団のみんなで戦ってきたのに……それなのに僕は……何て酷いことを……」 カチャ

「手を挙げてそのまま立ってこっちに向いて」僕の後頭部に銃を押しつけて命令されているが……

「撃ちたければ撃てばいいよ。ここに来たからにはある程度は予想してたよ……カレン」

「聞こえなかったの？ おとなしく手を挙げてそのまま立ってこっちに向いて！」

「聞いてないのはカレンだろ？ 撃ちたければ撃てばいいって……何か聞きたいことでも？」僕はあくまでもカレンの指示を無視をして話を続ける。

「………良いわ、このままの姿勢で聞いてていいわ！！ ライ、あなたはあの時に記憶を取り戻したの？」

「……8割は戻ったかな？ ある出来事の前後の記憶が未だにわからない」

「ある出来事って何があったの？」

「そこまで聞くか……いや、そうだね…カレンは僕の記憶の手がかりずつと探してくれたもんね。知る権利はあるか…僕が家族と友人を殺めたかも知れない……」

「！？ どういうこと？ 何があったの？」

「わからないよ！！ 僕だって何度も考えたよ！！ あれほど大切な家族を友人を死に追いやったのかわからないんだよ！！ でも、原因が僕にあることだけがはつきりわかってる……僕はとんでもない最低の人間だつてことだよ……」僕は思わず叫ぶように喚いてしまった。ただ、自分でもどうしたらいいかわからない……ただ……それだけなんだ……！！？」

「そう、……辛かったのね……ごめんね、ライ。あなたには何度も助けてもらってるの何も出来なくて！」 カレンはベンチの後ろから優しく抱きしめてくれた。

「何で？何で……優しくするんだ……僕は君に優しくされるような人間じゃないんだ！！ 頼むから優しくしないでくれ……」

「そんなことない……だったら何でそんなに辛そうに泣くの？ そんな風に涙を流せる人が理由もなしにするはずがないもの」カレンに言われて、自分がまた泣いていることに気付いた。

「怖いんだ……僕はカレンやみんなを自分のせいで居なくなるのは嫌なんだ……だから、僕は逃げ出したい……」

「……それが、ライの思い？」

「……うん！」 そう言っただけでしばらくしてカレンが抱き寄せた腕を解いて、僕の目の前に来た。

パシーン！！

「!?!」どうやら僕はカレンに思いつ切りにビンタをされたみたいだけど、そのことに気付くのに数秒の間気付かなかった。

「ライの辛い気持はわかる！ でも、何もかも投げ出さないで！！今は辛いかもしれないけど…失ったものは戻らないけど…逃げ出したリなんかしたらライの大切に思った人達を悲しませるのよ！！」そう言ったカレンはすぐに後ろを向いて数歩程歩いて立ち止まった。

「ごめん！！ こんな言い方しかできなくて…でも、こんな形で逃げ出したら許さないから！！」そう言ってカレンは駆け足で公園を去った。

あれからどれくらい時間が過ぎたのだろうか？ 突然、携帯が鳴り響いた。

「ハイ、ライです！」

「ライ？ 今どこですか？」 電話の主はユフィだった。

「……ちよつと、気晴らしにゲッターでブラブラしてたかな？ ところで何かあったの？」

「いえ……ライは今も謹慎中なのですか？」

「まあ一応、だから緊急の出頭命令以外は謹慎かな… 騎士の關係で書類作業ぐらいなら問題はないと思うけど…仕事？」

「いえ…ちよつと、私も気晴らしにクロヴィス兄さんの美術館に行こうと思ひまして、ライも護衛と言う形で来れるかなと思ひ…」

「ありがとう、護衛になるかはわからないけど…僕の気分転換になりそうだ、 軍服に着替えてから行くよ」

「わかりました。では11時に美術館の方で」ユフィは電話を切り、僕は取りあえず軍服に着替えるために自分の部屋に戻ろうと公園に出った。

「さつき…カレンに酷いこと言ったな、謝らないと……いや、今は電話をすべきじゃないか……ひよつとしたら、僕の電話に出ないだろう……行こう、ユフィが待ってる」カレンとのやり取りに後悔はあったが今はどうすることも出来ないと考え駆け足でその公園を去った。

黒の騎士団戦艦内部 格納庫

「…はあ…私は何でライにあんなことをしたのかな…記憶のシヨックで混乱している時に何で私は叩いたのかな…私が落ち込んだ時は私が泣きやむまでずつと居てくれたのに」

「ふっふん、カレンはそんなにライって子が好きなんだ！」私の横に急に井上さんが現れた。

「井上さん！！、何時から居たんですか！！ あの今は…その」

「ハイハイ、誰にも言いませんよ！ ところでカレンはどうしてそのライって子と何かあったの…一応人生の先輩として話ぐらいは聞くわよ」井上さんは缶コーヒを1つを私にくれて近くにあってコンテナを背にしてに私達は腰かけた。

「井上さんは私がアッシュフォード学園に通ってたのは知っていますよね？」

「ええ、ナオトさんのお願いでもあったからね…確か病弱設定だったけ？ あのカレンがね」

「そこはもういいです！！ ある時に記憶喪失である学園に迷い込んできたのがライで、本人の手がかりは名前と首飾りの十字架ぐらいしかなくて、その生徒会長が私に彼のお世話係に勝手に任命させられちゃって、その時は、ちょうどあのホテルジャックの後だったから、騎士団の活動もスタートした頃だったから忙しかったから正直面倒なことをって思ってたんだけど…」

「ひよつとして、その彼って前にゲッターで無頼を目視操作してカレンを助けた人？ あの頃、よく学校に行ってたし」

「うん、あの時はビックリした、あの時は正体をバラせなかったから、無頼を運転出来ない状況だったから…そんなことがあってライに興味湧いて、その日からよく記憶の手がかりを探す名目で色々な所に行ったかな…そんな時かな…あのリフレインの事件があつて…」私は今でもそのことを思い出す…あの時、倉庫でお母さんを見かけた時のショック、お母さんが私のためにあの家に居てくれたことの事実や、今でもそのことを思うと辛い

「…たしか、お母さんが居たのよね…」

「うん、あの後、一旦お母さんを病院に送った後ね 私、お母さんにどんな顔して会って良いかわからなくてそのまま、病院から逃げてたの」

「…それで」

「…うん、それで、あのゲッターの公園のベンチで休んでいて…あの時はお母さんに対する後悔で全部失った気分だった…そんな時にライが来てくれたの、ライはあの時、記憶の手がかりを探している時に私の姿を見て追って来てくれたみたいで」

「へえ〜良い所あるわね〜」

「その時は泣きそうな自分を見られなくなかったから…そのまま退散しようと思つてベンチから離れようとしたら」

「したら？」

「私の手を握って止めてベンチに座らしたの、しばらくの間はただお互いに座ってたんだけど……したらライが『カレンは頑張りすぎだと思つ、だから僕と居る時ぐらい無理しないで居て良いから…だから泣いても良いよ！泣く姿は辛いけど…それを我慢してる姿はもつと辛いから…だから泣いても良いよ』って言われて」

「それで泣いたの？」

「最初はそれでも泣かないつもりだったけど…ライがその後に優しく頭を撫でてくれて『よく頑張ったよカレン！だから、もう泣いて良いよ！』って言われて、頭を撫でられたのは昔、お母さんにテストの点が良かった時やお手伝いをした時に褒めてくれた時にし

てもらったことを思い出して思わず泣いてしまった。「今、考えたら私がライのことを好きっと思っただのはこの時からかも知れない……いつも私が落ち込みそうな時に居てくれるライに惚れていたのも」「そっか……、っでその彼が今、ものすごく落ち込んでる時に思わず叩いてしまったと……」井上さんは改めて私が気にしてる所を突いてきた。

「ええ……まあ」今、思い出してももっという慰め方があったのに何であんなことをしたんだろう。

「こう言う時は過ぎたことを気にするんじゃないで、これから彼をどうするかを考えるべきじゃないの？」

カレンはどうしたいの？」

「それは……ライには元気になって貰いたいけど……」

「そうね……私達の立場上は敵同士……しかも、私達の作戦の邪魔をしたあの青兜のパイロットでエリア11の副総督の騎士だから、思いきった行動は出来ないから悩むのはわかるけど……でもね、私自身はカレンのライ君が好きなき持を大事にして欲しい！」井上さんはいつになく真剣な表情で私に問いかけて来た。

「井上さん」

「本当はこう言うことを言っただメなのはわかってる。そういう誰かを好きになる気持はね……一生に何度あるかわからない……思いを伝えられない後悔はね……心にずっと残るのものなの……特にライ君はどこかナオトさんに似ているから……一人で勝手に突っ走って居なくなる人よ……」

「そっだ、井上さんはお兄ちゃんことが好きだったんだ。」

「私は……」

「今すぐ、答えを出さなくても良いのよ、でも、どんな選択でも後悔のないようにしなさい……また、悩みがあるなら相談に乗るから」井上さんは立ち上がってそのまま格納庫を出ようとした。

「井上さん！ありがとうございます！」

井上さんは私に笑顔を見せて格納庫を去った。

後悔のない選択か…私は……

美術館

僕がユフィの電話に呼ばれてしばらくして美術館に来ていた。

最初はユフィの兄であるクロヴィス殿下の美術品を見せられていたが、しばらくしてユフィはある絵を見せてくれた。

「この絵は……」

「ハイ、ライを呼んだのこの絵を見せたかったのもあったのです。僕は、今ある絵の前に立っていた。その絵は7年前に亡くなられたブリタニアの王妃のマリアンヌ王妃とその子供のルルーシュとナナリーの絵が飾られていた。

「どういうことだ…（これは、どう見てもルルーシュとナナリーだ…しかも、この時のナナリーは目も見えている上に歩けるみたいだけど）」

「そうです、ライがああ島で見た方はこのルルーシュ・ヴィ・ブリタニアです。彼は7年前に死んだことになっていますか…」

「7年前…まさか、ブリタニアが日本に攻撃を仕掛けた時と同じ時期に」

「ハイ、ちょうど日本の侵略の前に本国にある事件があったのです。」

「ある事件？」

「このマリアンヌ王妃が何者かの襲撃で命を落とされたのです。」

「殺された？ 本国で襲撃なんて、その時の警備は…まさか、内部での事件？」

「私もそこまではわかりません。ただ、彼はその時のお父様の対応が許せなくて王位継承権を辞退して妹と日本に旅立ったのです。」

「そんなことが…ちょっと待って、それじゃ皇帝は日本に自分の子供が居る国に攻撃を下したつと言うのか!？」 それじゃ、ルルーシュがブリタニアに復讐しようとしたのも、偽名にしたのも頷ける……それじゃ、ナナリーが足と目が不自由なものこの一連の出来事が原因なのか？」

「信じたくはないのですが…少なくとも彼はそう思ってるみたいで…」

「…こんなことを聞くのは気まずいけど…彼が生きてることをコーネリア総督に報告するのですか？」

「いえ、お姉様には、まだこのことは話しません…私はただ彼ともう一度昔みたいに過したいのです。」

「…一つ聞いて良いかな？」

「ハイ、何でもしょう？」

「彼は何のために戦ってるんだろう？ 自分を見捨てたブリタニアに復讐？ それとも、母親を殺した犯人を探してるのか？」

「彼は妹と生きれる場所を作るために戦ってるっと思います。」

「そうですね（ルルーシュ…始めて会った時からどこか似ていると思っただけど…まさか、かつての僕と同じ境遇だなんて…）」

「ライ、このことは…」

「わかってます。このことは他言無用にします。」

「ありがとうございます。それじゃ、そろそろ出ましようか？」 ユフィがああ絵から離れようとした時、僕は1つの疑問があった。

「ユフィ！ 僕に聞いて欲しいことが合ったんじゃないか？ スザクと何かあったのか？」

「…何故、そう思ったのですか？」

「前にも言ったけど、僕にケータイに連絡がある時は大抵、スザクのことが多いって、それにスザクから連絡が未だにないからちょっときになったから」

「…ライにはお見通しですね…スザクが騎士を辞退をしたのです。」
「スザクが？ 何で？」

「自分にはその資格がないって」

「そんな……っでユフィは引き留めたの？」

「ええ、でも、スザクには頑として断られました」そう言って泣きそうな表情だった。

「ごめん、嫌なことを思い出させて……もう、遅いから帰ろうか？」

僕はユフィを美術館の駐車所に誘導してから美術館の外に出た時に入り口で騒がしかった。

「ユーフェミア様！ 私です！ニーナです！！」

「この怪しい奴め！」

「ニーナ？ 何をやってるんですか！！」僕はニーナを押さえつけている警備員を制止させ様と向かった時に

「おやめなさい！！」彼女は私の友人です！」ユフィが車の外に出て来て警備員にニーナの拘束を辞めるように命じた。

↳数十分後 皇族の別家

「すみません、ダールトン將軍、謹慎中に勝手なことをして」

「いや、仕方ないだろう、美術館でそんな騒ぎが起きたら……まあ、今はこちらもキュウシュウの件でそれどころじゃないから、そう騒がないだろう」

「ありがとうございます！ あの失礼承知で聞いて良いでしょうか？」

「何だ？ライ」

「何故、私にも枢木スザク同様にキュウシュウの出撃命令が出なかったのですか？ あくまでも緊急命令でしたら」

「今回はあくまでも陽動作戦だ！ 出動が必要がないと判断したままでだ！ 何か疑問でも？」

「いえ、ただ気になっただけです。 出すぎた真似してすみません」

「ハハハハ、 まあ、お前も若いから戦闘に出て活躍したいのはわかるが、体調が良くないものを出すほどわが軍は人員不足じゃな

い、今はしつかり休養を取れ！ それじゃ、また「ダールトン将軍が電話が切れて、僕は電話の受話器を置いた。」

「…陽動作戦？ このやり方…式根島の時の命令した同一人物、シユナイゼル殿下か…正直、あの方が何を考えているかわからない。コーネリア総督のような野心みたいなのはみえない…かと言ってユフィのような慈愛主義にしては怪しすぎる…いや、今は、ユフィの所に行かないと」僕はユフィとニーナが居る部屋の前にノックをした。

「ユーフェミア様、こんな時にすみません、私に出頭命令を出して貰いませんか？」

「ライ？、ちよっと待って下さい！！」ユフィは慌てて部屋を出てくれた。

「待って下さい！ライ、あなた昨日倒れたばかりですよ…それに、あの時のあなたの様子見て出撃命令が出せますか？」

「無茶は承知です。正直、あの島での出来事で未だに整理がついていません！自分のことをどうしたら良いのかわかりません！不安で押し潰れそうです。ですが、嫌なんです！友達が危険な所で頑張ってるの自分がじつとしているのは…そして、何より勝手に騎士を辞退したことも…だから、行って、あなたの元連れ戻してきます！お願いします！ユーフェミア様！！」

僕はその場に土下座のような状態で頭を下げた。あの惨劇の詳細はわからないが…ただ、わかってるのはあの時にすべてを失った。

そして、そんな思いを二度としたくないだから

「わかりました。ただ、これだけは約束してください。二人とも無事に私の元に戻って来てください！」今、ユフィがルナが首飾りをくれた時のことを思い出して、僕はあの十字架を握ってあの時の約束したように

「イエス・ユア・ハインス！！」

く キュウシュウ上空付近 アヴァロン艦内

「あゝあ、こんなに敵さんが多いならライ君に来さすように頼んでおくんだつたよ」

「ちよつと、ロイドさん！ 今、スザク君がキュウシュウ基地に突入付近に向かつてる最中に何なんですか？ それに、彼の容体を考えれば当然の処置です！！」

「ええ〜〜どうしてダメなの？ せつかくクラブにもフロートユニットを付けたのに〜」

「ロイドさん、あんまり子供みたいにダダをコネだして下さい！！」
そんな時に突然通信が入ってきた。

「こちら、ユーフェミア副総督の騎士！ ライ少佐です！ ロイドさん、セシルさん聞こえますか？」

「ライ君？ どこから連絡してるんですか？ というより謹慎中でしょう！！」

「ハイ ハイ、とここで、ライ君は今どこ？」

「そちらのレーダに反応があると思いますが？」 レーダにはアヴァロンにもものすごい速さで向かってくる一機の戦闘機の反応があった。

「まさか、ライ君、戦闘機に？ どうやって？ と言うか、何で操縦が出来るの？」

「まあまあ、セシル君、そんなことは後にして、それで、ユーフェミア様に何て命令を？」

「専任騎士を辞退をした枢木スザクを連れ戻すことです！！」

「なあ！？ ライ君？ そんな、命令のために戦闘機を借りてここに来たの？」

「ソフソフ、あいかわらず、おもしろいね〜っでここに来たってことはクラブを取りに来たの？」

「ハイ、クラブを取りにここまで来ました。お願いです！クラブを

こちらに……!?」ライが乗っている戦闘機に敵のターゲットになり攻撃を受けていた。

「了解〜! せっかくだから、クラブをこのまま投下させるから何とかうまく脱出してクラブに乗りこんで」

「ちよつと! ロイドさん? 何でそんな無茶させるんですか? ライ君何とかこつちに一旦来て! その方が安全よ!」

「ありがたいですが、そんなことをしてる間にスザクが危ないのでロイドさん案で行きます…それに、騎士である前に僕はテストパイロットです! あらゆる状況のデータを取るのが仕事です!」

「さすが〜わかってるね、それじゃ、行くよ」ロイドさんの合図とともにアヴァロンのハッチからクラブが投下された。

「ありがとうございます。それじゃ行きます!!」僕は戦闘機をクラブの頭上付近まで近付いて戦闘機から飛び移って、クラブの緊急レバーを作動させてコックピッドを開いて乗り込んで再びコックピッドを閉じた。

「フ〜 成功しました。」

「成功しましたじゃないでしょう!! 何でこうあなたは無茶ばかりするんですか? 見ているこつちの心臓が持ちません!!」

「すみませんセシルさん、今、このフロートシステムを確認中なので後でお願いします。」そう言うライの状況はクラブに乗ったものの今現在も落下中の状況下である。

「って、ライ君!? 良いから早くフロートシステム起動しなさい! このままだったら海に叩きつけられるわよ!!」

「そうなのですか、僕のクラブ、まだ、システムがちゃんとインストールが出来て無いみたいで……今何とかそれを急ピッチで……よし! 出来た!!」僕はクラブを起動させて、海にあたる寸前にフロートシステムが働いて何とか飛び出すことに成功した。

「セシルさん、引き続きでフクオカ基地のルート指示で現状状況を教えて下さい!」

「まったく、あなたって人は……ライ君、今のあなたの位置から北

西に約30?ほどにキュウシュウ基地があります。今スザク君が
キュウシュウ基地に突入したみたい!」
「了解! それじゃ、僕はこのままフクオカ基地に突入します!」
僕はクラブを星が輝く海上に全速力でキュウシュウ基地に向かった。

続く

EP9 苦悩（後書き）

中々テンポ良く書けません。
たいです。

何とか少しづつ書けるように頑張る

EP10 夜明け（前書き）

何とか、書けました。なるべく更新が途切れない様に頑張ります。

EP10 夜明け

今でも思う…僕はここに居て良いのか？ 本当はすべてを捨てても姿を晦ますした方が良いんじゃないのか…そして、今していることは正しいのかさえも考えてしまう……何一つ結論が出っていない…ただ、言えるのは、今の僕の原動力が…

「こちら、ランスロット・クラブ！ ただいま、フクオカ基地に到着、これより枢木スザクの援護並びにこの騒動の首謀者、澤崎を捕獲をこれより開始します！」 生徒会のみんな…特派…ユフィ…スザク…ルルーシュ…そして、カレンなんだ…だから、僕はここに居たい…！

「各機…！ 目の前の敵機を追撃しろ…！」 目の前に複数の鋼體ガン・ルイがクラブに攻撃態勢に構えている

「（敵はざつと40機か…これだけの数がまだ居るってことはスザクも苦戦してるのか？ 早く合流しないと…だから）遠慮はしないぞ！」 僕はフロートユニットを外して全速力で前進して所持している可変ライフルを敵機を次々と殲滅を始めた。

「どけえええ…！！！！！」

コードギアス 蒼の奇跡 EP10 夜明け

フクオカ基地 スザクサイド

「クツ……迂闊だった！」 まんまと澤崎さんの言葉に気を取られる隙にヴァリスは奪われ…敵に囲まれるなんて…エナジーも尽きかけている

「投降したまえ、スザク君。 枢木ゲンブ首相の遺児として、丁重に扱うことを約束するよ」 ……

「お断りします！　ここで父の名前を使ったら、もう自分を許すことが出来ない！！」　そうだ、父さんを殺して、…カレン達のような悲しい思いをする日本人を出しといて…自分だけおめおめ生きるなんて…そんなことを…

「そうか、残念だよ…それじゃ…」澤崎さんの合図で僕の周りに居る鋼體ガン・ルがランスロットに砲撃準備の体制で構えていた。

みんな…ごめん！

その瞬間に爆発の音がしたが、聞こえて来たのランスロットでは無く周りに居た鋼體ガン・ルの方だった。

「スザク！　無事か！！」　爆煙の中からクラブが現れランスロットを守るようにして出ってきた。

「ライ！？　何で来たんだ？」

「決まってるだろう？　連れ戻しに来たんだよ…何の相談もなく騎士を辞めて勝手にユフィの面倒押しつけられたんだ…辞退をするにしても同僚に一言あっても良いんじゃないか？」

「今はそんなことを言ってる場合じゃない！！　ランスロットのエナジーは尽きかけているんだ！　ライのクラブもエナジーが少ないはずだ！！　だから、今すぐ帰還してくれ！！」

「悪いけど、こっちも命令で何が何でも君を連れ戻さないとダメなんだね…それに、ここで仲間を見捨てることは出来ない！！」

「しかし！！」

「もう、嫌なんだ…。目の前で大切な人を失う思いは二度としたくないんだ！！　だからスザク、何が何でも君を東京租界に帰す！

あそこには君を待つてる人たちが居るんだからな」

「ライ……」相変わらず君は強いな……ロイドさんに君の話聞いた時は深刻な表情をして落ち込んでいたと聞いてたのに……それなのに僕は……　ここで、諦めたらライの命も危ない！

生き残らなければいけない！！ …… 生きる… 何だ？この感覚は…

バアアアン！！

僕達の頭上から赤黒い閃光の攻撃が僕達の周りに居た鋼體ガン・トルや戦車に当たり、僕らの周りの敵の数が半数近く減った。

「何だ、この攻撃は？」

「大変です！上空に二機のKMFがこちらに向かって来ています！」

そして、黒い機体とそれより遙か遠くに紅い機体がこっちに近づいてきた。

〈30分程前 黒の騎士団の潜水艦 作戦会議室

「…以上！今回の作戦は私のガウエインで敵の本陣を叩く！他のものはブリタニアからの増援の警戒に並びに退路の確保に専念しろ！」今回のゼロの作戦は澤崎らのグループを叩き各地の日本人にアピールするために単機で敵基地に乗り込むみたい…私も出撃したかったけど…騎士団のKMFで飛行能力があるのは、あの島で奪ったガウエインだけだし…この作戦で大事なのはゼロが単機で乗り込むことが重要みただから諦めようと思っていた。

「井上！フクオカ基地の現状状況を教えてくれ！」

「ハイ！今現在、フクオカ基地にランスロット一機で攻めている様子…… 待つて下さい！瀬戸内海付近にKMFの反応が…… これは、ランスロット・クラブがすごい速さでキュウシュウ基地に接近しています！」そんな、ライがあそこで戦おうつとしてのの？記憶のことであんなにも心がボロボロ状態なのに…… 何でなの？

「あの青兜も向かっているのか？ まあ良い、奴が居た所で今回の作戦には大した影響はない。私は出撃準備に入る！ 扇・デイトハルト・藤堂！ 後のことは頼んだぞ！！」

「ああ、わかつたよ！」 「お任せ下さい！ゼロ！」 「承知した」ゼロはガウエインが待機している格納庫に向かおうとした時「では……どうした、カレン？」

「ゼロ、勝手なことを言っているの承知の上ですみません！！ 私もフクオカ基地の奇襲に同行させて下さい！！」

「カレン、何を？」 「あなた、ゼロの作戦を理解してないのですか？」

「待て！扇、デイトハルト！！ カレン、私の作戦の意味を教えなはす……それでも、同行したいと言っのはどう言っ訳だ？」ゼロを含め周りのみんながざわめいていた。

無理もない、私がゼロの作戦に意見したのはこれが初めてだから……でも今回だけは……

「そう言えば……あの二機のパイロットは君が通っている学友だったな……確かに今回の彼らの作戦は陽動作戦にしては切り捨てたいな作戦だ。しかも、あの青兜のパイロットはあの島での様子から見ても万全の体制とは思えない。君が心配するのは無理もないだろう。だが、それだからと言って君の同行を認めては今回の作戦の意味が無くなってしまっ」

「わかつています！ 覚悟の上でお願いします！」私は深々とゼロに頭を下げていた。

「ゼロ！私からもお願いします！ カレンの同行を認めて下さい！ 処罰なら私が受けますから！！」 井上さんも私と同じように頭を下げてくれた。

「良いんじゃないか？ 同行させても」 会議室のドアからC・C

が現れた。

「どの道、あれだけの敵兵がいるんだ、カレンが居れば基地制圧の時間稼ぎになるだろう。それに、あのライットと言うパイロットは枢木よりかは柔軟な考えの持ち主だ、交渉の材料がてらに恩を売っても問題はないだろう？」　あのC・Cも私に見方を？　どういう風の吹きまわし？

「フツ、成程…確かにあのライットと言うパイロットは敵ながらも面白い人物だ…：そうだな、ここで恩を作って今後の作戦の交渉材料にするのも悪くはない…：良いだろうカレンの同行を認めよう！　但し、カレンはあくまでも、私が敵司令部を叩くまでの間の足どめをすることだ。それ以外の勝手な行動した場合はわかっていなな？」

「ハイ！」

「では、ラクシャータに発進準備にするよう言っておけ」ゼロの言葉聞いた私はもう一度返事をしてから急いでラクシャータさんの元に駆け寄った。

「ありがとう、ゼロ！！」扇と井上が深々と頭を下げた。

「仮に私が許可をしなくても勝手に出って来そうだからな…：その方が作戦の支障が出るからな…：まあ、日本人へのアピールが若干下がるが、交渉材料が入る可能性があるなら良いだろう」ゼロはそのままガウエインの格納庫に向かった。

現在　フクオカ基地　ライサイド

「その枢木スザク、ライ・アスプルント！　まだ、エナジーが残っているか？」

「僕の方は後数分持つがスザクの機体がエナジーがもうない！！」
ルルーシュが乗っているガウエインが僕達の前に膝をつく状態で

手を差し出してきた。

「これは、エナジーファイラー？」

「私はこれから、敵司令部を叩きに行く。君たちはどうする？」

「スザク、ここは、受け取って行こう！ 僕達はここで終われない、帰りを待つてる人が居るんだから」

「ライ……わかったよ。ゼロ！残念だけどお前の願いは叶わない。自分が先に叩かしてもらおうよ。」スザクのランスロットはガウエインからエナジーファイラーを受け取ってエネルギーをチャージさせた。

「スザク、君が何に悩んでいたかは知らない！ 僕も自分の悩みに答えが出っていないから正直……辛い。でも、ここですべてを捨てて投げだすのは早いよ……だから、これから納得いく答えを探そうよみんな……だから、生きて帰ろう！！」僕は可変ライフルをランスロットに渡して、ツインMVSを抜き構えた。

「ああ……生きて帰ろう！」僕達はランスロットとクラブの右手のこぶしを互いに軽くぶつけあって誓いを立てた。

「ゼロ！！ お前たちは日本を憂える同士ではないのか？」

「我ら、黒の騎士団は不当な暴力を振る者はすべて敵だ！」

「クツ……おのれ！！！！ 構わん全機出撃！ あのナイトメアどもを蹴散らせ！！！」僕達の前方に次々と鋼體ガン・ルの部隊が大量に出ってきた。

「どうやら、味方だと思ってたゼロが敵側に行ったのが想定外だったみたいだったな……良いのかゼロ？ 僕達を抑える絶好のチャンスなのに」

「私に同じことを言わせる気か？ 我らの目的は不当な暴力を振る者は裁きを下すことだ……そのためには一時休戦をとってすることもある。ただ、それだけだ。」

「……（ルルーシュ……）わかった！ スザク、ゼロ！！ 目の前の敵は僕が引きつけるから君たちはその隙に司令部を叩いてくれ！」

「そんな、単機であの数をやるなんて、無茶だ!!」

「僕が来るまでそれをやるうとしたの誰？ それに、単機じゃないよ」僕の言葉と同時に空中輸送機から紅蓮が僕達の前に降りて来た。

「フツ、ようやく、来たな…この二機ならあの数の鋼體ガン・ルでさえ、お釣りが出るな」そう、今ここには僕にスザク、ルルーシユ、そしてカレンがいる…これ以上に心強い味方はいないだろう。

「行け！スザク!!」僕はスラッシュハーケンで近く居た鋼體ガン・ルに当たって飛び込んで、ツインMVSで次々と周りに居た敵を撃破していった。

「わかったよライ！ すぐに戻る!!」スザクは僕が空けた道をランスロットは全速力で駆けて行った。それに引き続いてルルーシユが乗っているガウエインも再び飛んで敵司令部に向かった。

「さて…(クラブの会話は全部セシルさん達に届く…ってことはここではカレンの名前を出さない方が良いな…) 紅いナイトメアのパイロット！僕が敵を引きつけるから君はそこで、攻撃をして欲しい…良いかな？」

「わかったわ(私の名前を言わない…まさか、ライ達私のことをブリタニアに言つてない？ いえ、今は目の前の敵のことを考えなくちゃ！ 何のためにここに来たのよ)…呼び名は紅蓮で良い！」良かった、僕の意図に気付いてくれて…、これでカレンのことはブリタニアにバレないだろう。

「それじゃ…行くよ!!」この掛け声を合図に僕とカレンは動き出した。

基本の行動パターンは僕がツインMVS・スラッシュハーケンで鋼體ガン・ルの足元や銃口を斬りつけて動きを止めて複数に固めさせて、そこでカレンが輻射波動で一気に敵を倒す寸法で行っていた。それを繰り返すことでクラブのエネルギー消費を抑える上にパターンを組むことで敵はその作戦を止めようと僕の所に集中的に攻めてくるが…そう、僕の狙いは初めからこれが狙いだった。

「何をしてる！！ あの青い機体一機に何を手こずるんだ！！ 数
ではこのガン……アアア……！！！！！！」僕は目の前の鋼
體を倒して、モニターである確認をしていた。

「よし！！、 そろそろ、ポイントだ！」僕はあるポイントに向け
て猛スピードで向かって行った。

「どうするの？ このままだったら行き止まりに行くわよ！！」カ
レンは僕の後ろに着いて来てくれている。 だけど、カレンの言う
とおり僕が向かっているのは行き止まりがある基地の路地の方に向
かっているのだから当然の反応だろうな……

「大丈夫だ、ここで決める、だから、紅蓮。僕がポイント目印を付
けるから、それまでいったん散会して合図とともにそこに輻射波動
を打ち込んでくれ！」

「ちよつと！ もつと詳しく教えないとわからないでしょう！」

「仕方ないだろう！ 君とはオーブンチャネルで喋ってるんだか
ら全部話したら、敵に作戦の意図を読まれるんだから！！ とにか
く君は一旦屋根の上を通ってこの先の行き止まりの全体が見れる位
置で待機してくれ！！」

「……わかったわ！」紅蓮はスラッシュハーケンを使い屋根の上に
上がりあのポイントが見渡せる位置に移動し始めた。

「さて、後はここで待つだけだな」僕は例の行き止まりで立ちふさ
がる場所について残りの鋼體ガン・ルリが来るのを待っていた。 数分後に残
りの鋼體が僕を通った道を追って来たようだ。

「これで、お前も終わりだ！！」敵が僕に接近する前にツインMV
Sを槍の形に変えて地面に深く突き刺した。 しばらくして、刺し
た根元から水が噴き出してきた。

「今だ！ 紅蓮、あの槍の先端部分を！！」僕はカレンが槍の近く
でスラッシュハーケンを打ち付けて槍の先端部分に輻射波動を当っ
てMVSが熱で変化し始めた頃合いに僕は紅蓮を掴んでスラッシュ
ハーケンで近くにあった建物屋根にさして屋上に上った。

「これで、王手だ！！」その瞬間に槍の刺した場所周辺が赤く
なつて……

ドオオオオオオン！！！！！！！！！！

その周辺には大きな穴が開いていた。

↳数分後

「成程、この水道管に穴を空けて、紅蓮の輻射波動で水蒸気爆発を起こさせて一気に敵を殲滅とはな……よく思いついた手だな」僕らが上った屋上にガウエインが上空から現れた。

「今回は助かったよ……ありがとう」

「……君から礼を言われる筋合いはない……だが、次に我々の計画を遂行の障害になるようなら……」

「ああ……僕達は戦うだろう……でも、僕は今日みたいにお互いが共に歩める道があることを信じたい！」

「フツ、理想論だな……さすが、あのユーフェミアの騎士のことだけあつて甘い考えだな」

「それでも、信じて見たいんだ……ここでの出会いで僕が変わった様に……」そうだ、学園に来た時の僕なら今こうして居ないかも知れないんだ。みんなとの出会いで僕が変われたんだから

「では、我々はここで退散させてもらおう！」ガウエインが紅蓮の左手を握り飛行移動し始めていた。

「ありがとう、紅蓮！！君のおかげで助かった！！」僕は遠くに見えなくなるカレン達を目で追いながらある決心をした。

明け方 東京租界 政庁 屋上庭園

「スザク、これを」 ユフィはスザクに騎士の勲章を差し出した。

「ですが、私は……」

「スザク、！ 私のことを好きに成りなさい！」

「ハイ、・・・えっ？」

「その代わりに私があなたを大好きになります！」

「ユフィ……………」

「スザク、私はあなたの頑な（かたく）の所も優しい所も悲しそうな瞳も不器用な所も猫に噛まれるちゃう所も全部！！ だから、自分を嫌わないで！！」

「……………そうか、返って心配させちゃんだね……………あなたって人はいつもいきなりです。 出会った時も皇女だって名乗った時も学校を決める時も僕を騎士に選んだ時も……………いつだって」

「そうです！ いきなりです。 ………………いきなり気付いたのですから」「でも、そのいきなりの度に僕は扉を開けられた気がする。 ありがとう！」

二人ともしばらくの間、沈黙があつたが……………

『あ、あの』 二人同時にしゃべりだし、気が緩んだのか二人とも楽しく笑っていた。

「スザク、私わかつたのです。 理想の国家とか大義とかじゃなくて、ただ、私は笑顔が見たいんだって。 今、好きな人とかつて大好きな人の笑顔を。 だから、私を手伝って貰いませんか？」

ユフィは再びスザクに騎士の勲章を差し出した。

「イエス・ユア・ハインス！」 スザクはユフィの手を取り合い再び二人が笑いあつてた頃僕は……………

「……………あつ、カレン、……………今、大丈夫か？」僕はあの二人と少し離れた場所でカレンに電話をかけていた。

「…ええ、ライ…あなたに…」

「ありがとうカレン！」

「なあ！？ なんてお礼を言うのよ！ あの時の戦闘のことのお礼はあの時に聞いたわよ！！」

「そうじゃない、確かにあの時の含んでるの本当だけど…でも、

僕がお礼を言いたいののはあの時カレンが逃げるな！って言うてくれた一言があつたからここに残る決意が決まったんだ」

「ライ……」

「確かに、記憶のことは、まだ整理がついてない……けど、そこから逃げたら、カレンやスザク、生徒会のみんなとの出会いを捨てるんだって考えたなら、例え苦しむ道になってここに残りたいって自分の思いに気づけたんだ！ それに、あのフクオカの出来事で僕なりの決心がついた。」

「決心？」

「うん、今まで敵同士だったのがあの時、同じ敵を倒すために手を取り合つて戦った。僕達が目指す道は互いに取り合つて共に日本を救うことなんだって思つてね。だから、僕はお互いが協力し合える様にするのが僕の目標だ。甘いのはわかつてる。それでも、同じ夢を持つているのに友達同士が戦うのは悲しすぎるよ……だから、僕自身がブリタニア側から変える努力をする。だから、カレン君は日本人側として橋渡しの役目になってくれないか？」

「私が？」

「うん、だから、最初の第一歩として学校に戻つて来て欲しい！素姓のことは僕達だけの中だから大丈夫だ……」

「……でも」

「僕が君と居たいんだ！ それではダメかな？」

「わかつた……でも、怪しいっと思つたらその時は」

「わかつてるよ、そうなら無い様に僕は頑張るよ」

「うん、ずっと私が見てるから……」

「ああ……、待つてるよ！ また学校で！」

「またね！」カレンが携帯の電源を切つたの確認して僕は庭園の屋上から東京租界を見渡した。

この数日の出来事は僕にとって衝撃なことばかりで、絶望しかけていた……でも、みんなとの繋がりで対上することが出来た。だから、たとえどんな困難があつても夜明けがあることを信じてみるよ。

続
く

EP10 夜明け（後書き）

ようやく、C・Cが出て来ました。早く他のキャラも書けたら良いなと思いました。また誤字脱字の方がございましたら指摘の方お願いします。

EP 11 つかの間の休暇(1) (前書き)

ええ、今回から生徒会温泉編です!!

EP 11 つかの間の休暇(1)

AM07:45 アッシュフォード学園校門前 カレンサイド

「はあ、つい勢いで来ちゃったけど……、確かにライとスザクなら私の正体のことを黙ってそうなのは確かだけど……とは言っても行きにくいわ」

私は、この前のライとの会話で私のことをブリタニアに喋ってないのが本当かどうか確かめるために早朝の人が少ない時間帯を選んで来たのだが……

「とにかく、職員室に忍び込んで私がまだ在学しているか確かめないと」

私はそのままの直接職員室に向かおうとしていたが、ふっと生徒会室に明りがついていた。

「こんな、朝早くにいったい誰が……もしかしてライが？」

そう思った瞬間に生徒会室に一直線に足を運んだ。そして、気付かれない無いようにそつと扉を開けて中の様子を見渡していた。

そこには、大量の本が山積みになっていたが、そこに銀色の髪がゆらゆらと揺れている所を見つけてそつと、近付いていた。

「~~~~ZZZZZZZZ」

どうやらライは何かの作業している最中に眠ってるようだ。

それにしても、ずいぶんと気持ち良さそうに寝ている……本当に無邪気に寝ている……もうちょっと近づいても大丈夫かな？

「うん、あれ、カレン？」

「どうやら、ライが私の気配に気づいて目が覚めた様だ。」

「もう、朝か…いつの間にか寝ていたんだなあ……ふあ……」
ライはあくびをして立ち上がって両手を上に伸ばしていた。

「何で、ライがこんな時間に生徒会室に？」

「ああ、ちよつと、いい資料を見つけたからさ、それを参考に企画書を提出するために昨日の晩から居ただけど…いつの間にか寝てたみたいだ」

「何の資料？」

「うん、日本の歴史をちよつとね…後はブリタニアとEUや中華連邦の歴史書とかそう言った本が多いよ。」

「確かに本の表紙を見る限りそう言った本だったけど……」

「所でカレンは何でこんな朝早く学校に居るんだ？」

「えっ、それは、ライが言ったことが本当かどうか確かめるために職員室に忍び込んで私が在学中なのか知るために朝早くに来ただけど…生徒会室に明りが点いていたから…誰が居るのか覗いてみたらライが居たから……」

「そっか、何度も言うんだけど、僕とスザクは君の素性は軍には報告してないよ、もし、報告してるなら今頃大騒ぎだし、カレンとこうしてゆっくりっつとしゃべれてないよ。」

「そう、……わかったわ、ライの言葉を信じるわ。」

「ありがとう、カレン」

ライは私に優しい表情した笑顔を見せてくれた。

ピンポン！

「すみません、政庁からの速達でこちらにライ・アスプルントさんは御在宅ですか？」

クラブハウスの玄関先に政庁の使いの人がライに封筒を渡して、ライも何か封筒を渡していた。

しばらくして封筒の中身を確認してからライの動きが止まっていた。私も封筒の中身が気になって玄関先に向かった。

「どうしたのライ？」

「ああ……ユフィが僕達生徒会のメンバー分の温泉の旅行券を渡してきたんだ。」

「ええ！何で！？」

「ええ！？ユーフェミア様が私達に！？」

「マジか！？ライ！！」

「えっ！本当なの！？」

「さすが、皇女殿下様ね」

今のライの発言で何処からの陰から出たかは分からないけど、二ナ・リヴァル・シャーリー・ミレイさんが現れて来た。

「毎度のことだけど…みんな何処から出って来てるの？」

「よっしー！ 今度の連休で生徒会で温泉旅行に行くわよー！」

『おおおー！！』

みんな、ライの質問を無視して温泉旅行に行く気マンマンだった。何だか久しぶりの登校早々、大変なことが起きそうな予感だった。

コードギアス 蒼の奇跡 EP11 つかの間の休息(1)

数日後 河口湖付近 移動バスの中

「まさか、旅行に行くとは思わなかったよ……学際準備まで二週間切ったのに」

そう、僕達は今、フジサンの近くの河口湖の温泉に向かっていた。行く理由を作ったのはユフィの計ら이었다。理由はコーネリア総督とともに温泉に行きたいみたいだが……さすがの総督と副総督がいきなり行くのは不味いので現地調査と下見を兼ねて僕達を選ばれたそうだ。

確かに学生の団体旅行ならそう怪しまれないからだろう。まあ、みんなはそんなこと考えずに楽しんでるみたいだな……三人を除いて

「安心して、カレン！ 学生名簿で僕達の人数を確認しただけで、詳しい身辺調査はされて無いみたいだから」

「ええ…それはわかってるんだけど。ところで、ライ？ 1つ聞いて良い？」

「うん？ 何かな？」

「あなた、 ユーフェミア様のことユフィって呼んでるの?」

「ああ、 彼女自身が公の前以外はそう呼んで欲しいって言われたからね。 最初はスザクも僕も慣れなかったけどね」

「ふ~~~~ん、 そうなんだ……」

何か急に無言に成りだしたカレンがちょっと怖かったけど、この楽しい雰囲気中であまり楽しそうじゃない二人が居た。

「ルルーシュ、 ナナリーごめんな、 何だか無理やり連れて来て」

「いえ、 気になさらないください。 ただ、 バスの乗るのが久しぶりで緊張しているだけなので」

「俺のことも気にするな、 バスにちょっと酔っただけだ」

「おいおい、 ルルーシュ大丈夫か?」

「リヴァル席立たない!!」

何とかリヴァルとシャーリーのお蔭で場は収まったが、恐らくルルーシュとナナリーは自分達の正体のことを気にしているのかも…… 何とかあの政策が早く形に成れば良いんだけどな……

「ところで、 ライ、 俺たちが泊まる温泉はどこなんだ?」

「ええくと、 あっ! あそこ!!」

ちょうど車窓から見える位置まで来ていたみたいだ。

場所はフジサンと河口湖が見える位置にある所だ。 さすが、 ユフィが選んだ温泉だけあつてもものすごく広い温泉旅館だった。

正直、 こんな所に旅行に行く学生なんて貴族かそれ同等の金持ち

ぐらいしか行かないだろうな…まあ、せっかくのご厚意なんだから
ゆっくり楽しもう。

PM 17:35 旅館「珂湯」玄関前

「さうて、これからどうする？取りあえずチェックインは出来る
みたいですけど？」

ちなみに今回この旅行に来たのは僕とスザク、カレン、ルルー
シュ、ナナリー、シャーリー、リヴァル、ミレイさん、ニーナ、そ
して運転手兼ナナリーの世話のために手伝って来てくれた咲世子さ
んで合計10人つとまあそこそこの団体旅行者の人数は揃った。

「そうね、まずはチェックインするためにそれぞれの部屋に行きま
しょう！それで18時30分に一階のロビーに集合で！！」
ミレイさんがテキパキと指示してくれた。さすが、あれだけ
のイベントを起こすだけあってこう言ったことにはなれてるみたい
だ。

『賛成！！』

みんな素直にミレイさんの指示に従って女性陣は3階で男性陣は
2階の部屋に行った。

PM 17:45 珂湯 2階 男部屋

「おおおお！！ すっげ〜！！ おい！ 見てみるよ！！ 外
の景色がすげ〜！！！！！！」

リヴァルは部屋に入って早々に窓の外に見えるフジサンに感動し

たみたいだ。

「まったく！リヴァル！！ お前はバスの時からしゃぎすぎだぞ」
ルルーシュもやれやれっという態度で部屋の座椅子に屑ろいで居た。

「でも、リヴァルの気持はわかるよ！ 目の前にあれだけ景色をみれば誰だって声をあげたくなるよ！！」

スザクもリヴァルほどではないが楽しそうな表情で部屋で寛いでいた。

「考えたら、僕はみんなと旅行に行くのは初めてだな（そう言う意味では昔もこんな形での旅行は無かったな……）」

ダメだな……ほとんどの記憶が戻ったせいか、つい感傷的になるな……いや、今は目の前のことだ！ 先のことはその時が来るまで後回しだ！！ 僕もルルーシュと同じ様にして座椅子に座った。

「さて……、時間までどうする？」

正直、今から外に出かる程の時間はないし……かと言ってこの旅館を探検するほど気力ではないからな

「まあ、時間が来るまで大人しくしたらどうだ？ せっかくの休暇なんだから」

「うん、そうだね。ルルーシュの言うとおり今日はもう遅いしゆっくり休もう！明日もあるし。 あっ！みんなお茶いる？」

スザクが僕達に粗茶を進めてきたのでみんなは取りあえず一腹して飲んでいた。

「まあ、ここんどこ、文化祭の準備で忙しかったからな、誰か

さんがサボらなければもつとらくだったけどなあ〜ルルーシュ！」
リヴァル言うと同時に後ろからルルーシュを後ろから抱きつき頭をクシャクシャさせていた。

「やめる！リヴァル！！ 暑苦しい！！」

ルルーシュはリヴァルから離れようとしてリヴァルの顔を手で押さえて離そうとしていた。

「まあまあ、自業自得だろルルーシュ！ 理由もなしにサボるからだよ！」

まあ〜、そう言う時は黒の騎士団関係で居なくなってるから複雑ではあるけど…でも、今日はこっちにいる分は安心かな？

「ルルーシュもそうだけど…ライは休めって言われた時は大人しくして欲しよ」

「ええ…だつて〜」

「ハハハ、まったく、ルルーシュはライの真面目さを、ライはルルーシュの怠け癖の一部分でも交換できたらちよつど良いバランスなのにな！」

「ダメだよリヴァル！ ルルーシュはともかく、ライにはルルーシュの怠け癖はどうかだと思っけど？」

「おいおい、俺はライにとって黴菌かよ」

ルルーシュの一言で、どうしてかは分からないけどみんなしてバカみたいのに笑ってしまった。こつ言う時間は本当に良いもんだ。カレンも向こうでこつ言う風にして過してるかな？

「へえ、ニーナ！ ユーフェミア様とそんな話をしたんだ？」

今、私達は先日ニーナが偶然ユーフェミア皇女とお会いになった話で盛り上がりつつあるんだけど…正直あのお姫様は私は苦手だ！ 勿論、あの人自身が悪い人じゃないことぐらいはわかってる。

現にゲッターの中でもユーフェミアを指示する人がいるくらいだから…ただ、自分では何もしないでいつも誰かに助けてもらうのが当たり前みたいな考え方が気に入らなかった。

後は…私がライに会えない間にあいつ（ユーフェミア）に会ってと思うと何だが無性に腹が立つてくる。

「あらあら、カレン！ あなたの王子様を専任騎士にしたユーフェミア様の話はつまらなかった？」

「えっ！ 別にライのことなんか！！！（この人、私の心を読んだ！?!）」

「おや、私はライ何て一言も言ってますが！ オホホ！！！！！」

「なあ！？（この人は~~~~~！！！！）」

「会長！！ あんまりカレンをからかわないでやりましょう！ ライが怒りますよ！」

「シャーリー…ありがとう」

「それで、ライとはどこまで行ってるの？」

「やっぱり聞くのね…」
シャーリーの対応であれだけど…とりあえず、元気そうで何より
だけど…

「いや、私とライとは別に…」

「……」
「……」
「……」
「……」
「……」

ちよつと、気まずいじゃない!! 何でそんなに喰いつくのよ!
…この感じじゃ何もありませんでした。じゃ、すまない……とにかく
く何か話さないと……!!?

「会長!!、会長のその鞆は何ですか? 二泊三日の荷物にして
は多い様な…」

『逃げたな…(逃げましたね)』

今、みんなの心の中の声が聞こえた気がしたけど、このまま恥ず
かしい思いはしたくない!!

「あゝこれ! ふふふふ……気になる〜、良かろう! なら
ば教えて上げましょう!!」

『!?!?』

「ちよつと、会長!!…」

「だってライは参加してないんだよう、それに私的には前回

のはまだまだ燃え足りなかったから!!」

「でも、ミレイちゃんここは外だし……」

「ノオー！ プロブレム！！ 大丈夫！ やるのは男子の部屋でやるから…勿論、ルルーシュとライには内緒よ！」

「どうして、お兄さまとライさんには内緒何ですか？」

「それはね…あの二人がこの手の内容を聞いたら真っ先に逃げるからよ！」

『確かに』

「でも、何でわざわざ旅先でやる必要があるのですか？ 確かにルルーシュとライ君のをちよっと見てみたいけど…」

「あつ、シャーリーは何だかんだ見て見たいんだ…でも、ライのもちよっと興味があるわ…」

「そうね、まあ面白そうだからやってみたいのは半分冗談として…」

『半分は本当なんですか!!』

「ここん所、学園祭の準備もだけど…世間は色々なゴタゴタがあったじゃない…そんなせいか、学園全体のオーラが暗いからさ…まずは生徒会のメンバーから元気に成って貰いたいな…って思ったの…まあ…柄にもないこと言っちゃったけど…それより、男子に何着させる？」

「会長……そうですね！ 生徒の見本として私達が元気じゃないとダメですよね！！ あっ、私はこれとこれが良いですね！！」

「私は…これとかが良いと思う！」

「咲世子さん、どんな服があるか教えてくれますか？」

「ええナナリー様！ 私個人としてはルルーシュ様とスザクさんにこの様な格好を……」

みんな、今を楽しんでる……本当にこの会長の一言はすごい……ブリタリアのお偉いさんがこんな人だったら争いなんて起きないのに……いや、別の意味で大変なことになりそう……でも、こうやってみんなと居るのは本当に楽しい、ライとスザクには感謝しないとダメね……後どれくらい居れるかは分からないけど…それでも今を楽しもう！！

「あっ！ ちょっととそれライに着させてはダメかな？」

私がここに居る時間がわずかだとしても……

EP 11 つかの間の休暇(1) (後書き)

今回からこの様に書いたのはここから先の本編の展開を考えシリアスなのが多いので気分を変えて書きたいと思ったからです。こう言った話なので、ライを含む登場人物の心情を上手く描けるように頑張りたいです。

EP12 つかの間の休暇(2)

コードギアス 蒼の奇跡 EP12 つかの間の休

暇(2)

夕食後 大広間

「ふう〜美味しかったなあ〜」 僕達はあその後でフロアーに行つてしばらく雑談した後で夕食の会場に移動して食事をしていた。

「それじゃ〜、ライとルルーシュは今から売店で適当にお菓子やジュースを買つて来なさい! これは、会長命令です!」

「何ですか?それじゃパシリじゃないですか!」

「まあまあ〜、ルルーシュ良いじゃないか! 別にお菓子ぐらいで目くじらを立てなくても」

「さすが!私の息子! 度量が違うわ〜」

「いえ、ミレイさん…僕は、正式な息子になつた覚えはありませんよ!」

うーん、この件も何とかしないと面倒がことになりそうだ…

「私達は男子の部屋で待つてるから!」

ミレイさんが言ったのと同時に僕達の部屋に向かつて行った。

「ミレイさん、何か企んでそうだな…」

「あの会長が企んでなかつた方が少ない気がするが…まあ〜ここは、

旅先だから学園程騒ぎになることは無いだろう。」

「そうだな…いくらミレイさんでも旅先で迷惑なことをしないでろうから、そんなに大騒ぎすることでもない。」

「それもそうだね。こここの所色々あったから変に疑ってたよ！
ハハハ」

僕とルルーシュはミレイさんに頼まれたお菓子を買いに売店に向かった。

「まあ、日頃の行いのせいだろう？」

「ルルーシュが言うと言得力がないよ。まあ、僕もこの所無茶ばかりしてるから…人のことは言えないか。」

僕はここ最近の行動の無茶ぶりを振り替えて苦笑していた。

「頼むから問題行動の火種は会長だけにしてくれよ！俺達の身が持たん！！」

「心配をかけたのは悪かったけど…そう思うなら生徒会の仕事をサボるなよ！」

僕らはこんな他愛ない話をしながらお菓子を買って部屋の方に向かつてる時に電話がかかって着た。

「悪い、ルルーシュ電話だ…たぶんこの旅行の企画者だと思うからちよつと外で話して来る！」

「…そうか、わかった。菓子は俺が持って行こう！…あつ！
それと、この旅行の企画者に礼を言つといてくれ！」

一瞬曇った顔をしたけど、すぐに表情を戻して僕が持っているお

菓子を持って部屋の方に向かって行った。

「わかったよ！ 素直に本人にお礼が言えないのは辛いな……あつ！！ 電話しないと」
僕は周りに人が居ないことを確認して折り返して電話をかけた。

「もしもし、ユフィ？」

「あつ、ライ！ 今、大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫だ！ どうしたんだ？」

「実はライに報告がありました」

「報告？」

「ライが企画してくれた政策をシュナイゼルお兄様が褒めてくれましたよ！」

「えっ！！ シュナイゼル殿下に見せたんですか！？」

まさか、まだ訂正箇所が多い所もあったのにも関わらず見せるとは……ユフィならではの行動だな……

「それで、殿下は何と答えたのですか？」

「良く考えがまとまった企画だと言ってくれましたよ！」

ユフィは、自分のことのように喜んでくれていた。

「出来ることなら殿下の意見も仰げれば儲けものだったけど……」

わかったよ！ とりあえず、今度具体的な政策とコーネリア総督に提出する企画書を作るので一度目を通してくれますか？」

「はい、わかりました。でも、ライは今休暇中なのでゆっくりで構いませんよ」

「正直、主が仕事している時に休暇は心苦しいところもあるけど……少し振りにゆっくりらせてもらおうよ。ユファイ！」

「そう言っただけで喜んで貰えると旅行券を渡したかがあります！」

「あっ！ そうそう、さっきみんながこの旅行のことでお礼を言っただから！ それじゃ、切るね」

僕はユファイが返事を確認して電話を切って、みんなが居る部屋に向かった。

「ごめん遅れ……… 何だこれは」

僕は目の前の光景が信じれなかった……

「何でそんな格好してるんですか!？」

そう……みんな……何かしらの格好しているんだけど……ただ、服装が男女逆のような……

「あっ！ライ、来たわね　これが我がアッシュフォード学園名物『男女逆転祭』よ……!」

堂々と言うミレイさんだったが、ミレイさんの格好は前に本で見た日本の偉人『坂本 龍馬』の服装だった。

因みに女性陣はサムライの格好中心だった。シャーリーは『柳生 十兵衛』の格好でカレン・ナナリー・ニーナの格好は『新撰

組』の有名な水色の羽織だ。

特にカレンの格好は確か新撰組の中でも鬼の副長で有名な『土方歳三』の写真の格好だった。

「よくこれだけの日本の有名人の格好が有りましたね…」

「いーや、ライの歴史人物の紹介の方がすごいわ」

「心の声聞かれた！？ …それで、男性陣はいつたい…」

『無理に言うなライ』

「ルルーシユもリヴァルもとっても似合ってるよ！ ねえ、ライもそう思うよね？」

聞かないでくれスザク！ 確かに今の男性陣の中でドレス姿で一際目立ってるのに正直驚いてる…けど、この状況で回答を求めないで欲しいよ。

いや！それより問題はこの流れでは…

『ライ！ ライはどれが良い？』

女性陣が万勉な笑みで僕を囲う様にして近づいて来た。特にカレンに至っては目が今までに見たことないほど輝いていたからなおのこと怖い…

「みんな、旅行だからといって初日から張り切ってたら疲れるからさー 今日はこの辺りでお開きにしないかな？」

僕はゆっくりと後退しながら入り口方に向かって居るとき

「咲世子さん！お願いしますー！」

カレンの合図と共に僕の後ろから奇襲で床に押さえ付けられた。

「申し訳ありませんライ様！ 何分皆様のご要望ため致し方なくつて……因みに私は忍びでございます。」

いや！ もう格好じゃなくてその行動に驚いてるんですけど！？

「ライ〜 観念して！」

もうカレン達が目の前まで来ていた……

「みんな！ 取りかかれー！」

『おおおおおおー！』

そして、僕の目の前が真っ暗になった。

「あああー！……！！！」

そして、僕は学んだ。この生徒会のメンバーでのんびりとした旅行は出来ないことを改めて痛感した。

二時間後 P M 21:42

男湯

「あゝ地獄を居た気分だよ。」

「そんな大袈裟な！ ライは良く似合ってたよー！」

「スザク、そんな事言われて喜ぶ男は世界でお前ぐらいだー！」

「まあ、ルルーシュにも劣らない変装ぶりはすごいが……本人は嬉

しくないのは確かだな……」

僕達はあの男女逆転祭を二時間に行われて正直ヘトヘトだった。最後に至ったては何処にでもありそうな恋愛系のミュージカルみたいな芝居をやらせたのは疲れたけど 目が見えないナナリーを楽しませる事が出来たのは良かった。

「明日はピクニックだったよねお弁当とかどうするの？」

「さつき、咲世子さんが旅行の人に言って調理場を借りて作ってくれるそうだ。」

そう言ったルルーシュは僕を見てニアニアして微笑んでいた。

「何だよ、ルルーシュ！ まさか！？ 何か企んでるのか？」

「まあ、当たらずとも遠からずってところだな。」

「ルルーシュ、それはもしや……」

リヴァルがルルーシュの耳元で囁いた後でルルーシュと同様にニアニアしていた。

「ああ、そうだリヴァル！ まあ、ライにはバレない様にな！」

「了解」

また、二人してニアニアし始めていた。正直、何でニアニアしているか分からない身としては何だか居にくいなあ……

「悪いけど、先上がるよ！」

僕はそのまま脱衣場に向かった。

「ねえ、二人は何でライを見て笑っていたんだ？」

「スザク、まじで分からなかったの！！」

「お前の空気の読めなさ… もはや末期だな」

次回に続く

EP12 つかの間の休暇(2) (後書き)

ええ〜とパソコンの調子が悪く修理していたため時間がかかりました。今現在スマートフォンで作業のためここしばらくはいつも以上に遅れて投稿します。

EP13 つかの間の休暇(3) (前書き)

前回は余りにも内容が薄かったので今回はライとカレンを中心に当
てて書いて見ました。 それではどうぞ！

EP13 つかの間の休暇(3)

屋上露天風呂 P m 22:03

「カ…カレン何でこんな所に？」

「ラ…ライこそ何で入ってるの？ さっき男湯に入ってたじゃない！！」

僕達は今、この旅行の目玉である屋上露天風呂に居る理由は今から数分前にさかのぼる。

コードギアス 蒼の奇跡 EP13 つかの間の

休暇(3)

それは今から約15分前 P m 21:47

旅行一階ロビー

「それにしても温泉って言うのはのんびり湯船に浸かるのがこんなに良いもの何て知らなかったな」

僕は旅館の一階のロビーの椅子にまったりと座っていた。すると奥の売店近くで咲世子さんがいた。

「咲世子さん、何を見てるのですか？」

「これは、ライ様！ この旅館にはお土産は何を置いてあるか見ていたのです。」

「そうなんですか、 そうですね。 咲世子さんは確か明日のピクニックのお弁当を作ってるんですね。 よかったら僕も手伝いませうか？」

「!? いえ、ご心配なくライ様はゆっくりと寛いで下さい。」

「でも、10人分を1人は大変ですよ！」

「後少しで仕込みが終わるので……！ そうですわ、ライ様、露天風呂は入られましたか？」

「さ
露天風呂？ いや、入ってないな」

「でしたら是非一度入られた方が宜しいですよ。 特に今日は満月なので綺麗ですし」

「へえ、そうなんですか！ そうですね、今は雲が無いから満月もはっきり見えますし。 それじゃ、僕はこのまま露天風呂に入つて来ます。」

「はい、ごゆっくり堪能してください。」

僕は屋上露天風呂に行くため、そのまま一階のエレベーターの方に向かった。

「もしもし、ミレイ様！ そちらは様子はどうなってますか？」

咲世子はライが去った後にミレイに電話をかけていた。

「今、ようやく半分終わった所だけど……もしかして男子の誰か来たの？」

「ええ、ライ様が何とか屋上の露天風呂の方向に向かわせましたが何時お戻りになるか分からないので警戒にっと思ひまして」

「そうかライか……咲世子さん、ライは今、屋上の露天風呂にいるのよね？」

「ハイ！ それが何か？」

「そうか、フフフ 良いこと考えたわ！ 咲世子さん！！ 今からやって欲しい事があるの」

「ミレイ様、いったい何を？」

「それはね よ！」

このミレイの発言がライに巻き起こるトラブルに合うのだった。

そして、露天風呂に向かったライ

「良いな、この露天風呂は満月が綺麗だし雲が無いお陰で星も見えるなんて」

僕は咲世子さんの薦めで屋上の露天風呂に来たけどこれほど綺麗なものだと思わなかった。こんなことならみんな誘えば良かったな、今なら貸し切り状態なのに……

「ルナ達にもこの景色を見せたかったな……もし今、ルナがいたら狡いって言われて怒られそうだな 八八八」

何言ってるんだらう？ ここでルナ達の事で悲しんでも戻れないのに……！？

「イケないイケない！ しめぼっくなちゃダメだ！ せつかくの旅行何だから」

しめぼっくなった気持ちを切り替えようつと湯から上がろうつと立ち上がった時に扉の開く音がした。

「カ…カレン何でこんな所に？」

「ラ…ライこそどうして入ってるの？ さっき男湯に入ってたじゃない！！」

僕の目の前には今まさに風呂に入ろうつとタオルで身を包んだカレンが居た。

「いや、咲世子さんの薦めで来たんだ。」

「えっ！ライも？」

どうやら僕達は咲世子さんに…いや、こんなことするのはミレイさんしかない！！

「とにかく、僕が出るよ！ カレンはゆっくり湯に浸かれば良いよ！」

そうだ、今はミレイさんを問い詰める前にここから出ないつと…今のカレンには目の……ノノノノノ目のやり場に困る！

僕はそのまま脱衣場に向かおうつと足を運んだ。

「待ってライ！ ライに聞きたい事があるの！！」

その場から離れようとした僕にカレンは手を握って静止させた。

「その、ライの過去のこと…前に聞けなかったから…」

「！？」

……そうだな、遅かれ早かれカレンには話さないっといけなかった。例え不透明な所があるうっとな僕がどういう人生を歩んだかは明確なんだ…例え拒絶されても話さなければ、もうカレンには嘘をつけないからな…

「…ちよつと長い話になるから湯船に浸かろう！」

僕とカレンはそのまま湯船に浸かった。僕は数回ほど軽い深呼吸をして、しばらく沈黙して話す決心をした。

「今から話すことは多分…理解不能なことを言っつと思っけど最後まで聞いて欲しい…」

「…わかつたわ」

「そうだな…今から2000年ぐらい前にある皇子が居た。彼は当時のブリタニア皇族の血を持った父と同じく日本貴族の母の間に生まれた子だった。そして、彼には3つ下の妹も居た。」

「!?!」

「当時のブリタニアは今ほど力が無くてブリタニアの領土は離れ小島のように孤立していたから各々の領土で独自の文明を築いていた。その内の1つが父が治めていたんだ。だけど、当時のブリタニアは今以上に純血主義が根強かったから母と兄妹は異端の目で見られていた為に王の別宅に住んでいた。」

「それでも兄妹にとっては幸せの日々だったけど、彼が8歳の時に父に彼ら三人を本宅来るように命令された。当然、王の命令には逆らえないから三人は従って本宅に来た。そう、そこには母以外にも妻がいて…彼女達は母と違いブリタニア人のため三人の家族に

対して酷い仕打ちをする日々だった。特に彼の母親と妹は髪の色や肌の色の違いと言っただけの理由で虐められていた。」

僕はその時のことを思い出が甦っていて無意識の内に握りこぶしを作っていた。

か

「…ライ」

カレンは握りこぶしを作っていた僕の手を優しく握りしめてくれた。

「ごめん…カレン！　そんな日々の中である日、異母兄弟達が僕の妹が大事にしていた帽子を川に投げ捨てたんだ。　彼は妹の帽子を取るために川にはいったけど…水の流れが激しい川だったからそのまま下流まで流され」

「酷い…」

「でも、下流まで流されてる時に助けてくれた人がいてね…彼にあってその命の恩人が初めての友達だった。」

ジン！　君と出会いが僕の人生にとって明るい道に導いてくれたんだよ。

「いい人だったんだね。」

「その出会いをきっかけで彼と妹はよく恩人の所に行って遊んでいた。　だけど、彼はその恩人が住んでいた町の廃れ具合に納得出来ず父である王に頼みに行ったが謁見の機会も貰えなかった。　そこで彼はその恩人と組んで自警団を作ったんだ。」

「自警団？」

「まあ、自分達で町をパトロールしたり困った人を手助けする…
何でも屋かな？」

「へえ、そんなことをやってたんだ」

「最初は近所のお手伝い程度だったけど次第に仲間が増えてきてね…彼の妹も自警団に入って…あっそうだ！彼の妹が入って来た時に同じ時期に貴族の子も入ったから自警団は大きな組織になった。それがやがて国に認められて自警団から義勇軍に昇格したんだ。」

「確かあの時のルナは自警団に入るために自警団のアジトまで乗り込んで来たけど…そして、レイが入ったことで組織としての統率力が上がりその上他の貴族の人達のパイプラインとしての活躍のお陰かで義勇軍の昇格の話が出たんだっただな」

「すごい…」

「義勇軍に成ってから戦地に駆り出されたけど、彼らのチームワークのお陰で負けることなく勝利続けた。だけど…余りにも勝ち続けたために他の異母兄弟にとって疎ましい存在だった。そして、事件が起きた…」

「事件？」

「彼ら義勇軍がクーデターを起こすって言うデマが流れて彼らは処刑宣告を出された。当然、彼らからしたら濡れ衣を着させられピンチの状況の時に彼は…ある男に出会った。」

「…ある男？」

「その男は彼に力を与えるって告げた。正直、得たいが知れなかつ

たが…このまま大切な仲間を守れなくて死ぬくらいなら悪魔の契約
だろうが魔王の契約だろうが仲間が守れるならつと契約を結んだ。
そして、彼はその力を使って真のクーデターの犯人を異母兄弟達に
したてあげてそして、彼ら兄弟とそして父である王を殺した！」

「その力って…」

「彼が得た力は一度だけどんな命令を下すことができる『絶対遵守
の力』を得たんだ。彼は異母兄弟達を殺した後ことにより国からは
英雄視され、そのままの流れで王になった。」

「王に!?!」

「うん…王になった彼はそれまでの純血主義の考えや貴族制度を変
える改革を行って国を活気づかせた…でも、当時、戦争が各地で多
発していたからずっと戦いの日々だった。何とか勝ち続けたけど…
勝てば勝つほど領土が広がる…そして、その分領土を取るために敵
が出てくる……」

「……ライ」

「その活躍のお陰か彼は敵から『銀狼の王』と畏れられる存在にな
っていた。」

僕はここで一呼吸を置いて……あの時の状況を整理していた。

「ここから話す内容だけど…残念だけど記憶が途切れ途切れだから、
あくまでも僕の推測として話すね」

「ええ……」

「戦争の日々が続いたある日…彼はある国と戦う前に士気を高めるために兵士の前で演説をしたんだ。問題はその演説の内容のせいで最悪の悲劇が起きた…」

「…何を言ったの？」

「その国の人を皆殺しにしろ！」

「！？ ……そんな」

「おそらく言葉の内容が彼に与えられた力に反応してその言葉は国中に響いて…国民全員がその国の人達を皆殺しするために戦地に行ってしまった。勿論その中には…彼の家族も仲間も……いた。」

「そこで、彼の意識途切れてた…多分暴動を止めるために行動したっと思うけど……結果は敵と共に全滅していたんだ…」

僕あの時の惨劇の光景を思い出していた。戦場には多くの死体と血の臭いで溢れていた。そして、そこには母とルナとジンとレイの亡骸が転がっていた。僕が守りたかった人達は僕のたった一言で全てを失った。

「後のことは…ごめん！わからないんだ……ただこれだけは言える。彼は大切な人達を守るために力を手に入れ父と異母兄弟達を殺してまで守ろうとしたのに……その力で……自分で全てを壊したんだ……そんな愚かな王…ライ・デイ・ブリタニアこそが僕の正体だっ……てことだよ…」

今、振り返ってみると僕がしてきたことは何だったんだろう？

大切な人達を救うつもりで手に入れた力だったのに、その力で全て失った…まったく関係ない市民まで戦いに巻き込んだ最低の王が今もこうして生きてるなんて……本当、最低だよな……

「ライは悪くないよ！」

「良いよ、カレン！ 同情なんかしなくても…むしろこんな無茶苦茶な話を聞いてくれただけでも感謝してるんだ。だから、軽蔑してもいいんだ。だから無理に!？」

僕が話そうとした時にカレンはいつものように優しく包むように抱きしめてくれていた。

「ライは悪くないよ！ だってこんなにもいっぱい傷ついているのに！ こんなにも大切な人達のために頑張ったライを私は軽蔑なんかしないから!! だから、ライ！ 私の前ぐらい甘えても良いよ！ 泣いたって良いよ！ ライだって私の時もそうしてくれたんだから!! だから!!」

「ありがとう、カレン…ありがとう…」

そこからの僕は声を殺しながらだけどカレンを抱きしめながら泣いていた。今まで溜まった思いを流すようにただひたすら泣いていた。

あれからしばらく泣いていた僕はようやく落ち着いて話せるようになった。

「もう、大丈夫？」

「ああ、久しぶりに思い切り泣いたら何だか軽くなったよ。ありがとう、カレン！」

僕らはお互いの抱き寄せた腕をほどいて夜空に浮かぶ満月を眺めていた。その後はルナやジンにレイの話をしていった。過去を思い出して穏やかな気持ちになったのは久しぶりだった。

本当にありがとう、カレン…

「ライ、どうしたの？」

「カレン…好きだよ」

僕はカレンの唇をそっと自分の唇を重ねた。

「／／／／／／／／／／／／／／／」

カレンの顔が林檎のように真っ赤になっていた。

「ごめん、カレン！ いや…その我慢ができなくて…カレン？
大丈夫か！」

「だい…大丈夫な分けがないでしょう！！いきなり…キスなんて
／／／その…こ…心の準備が…なんて…その／／／／／
とにかく、今のズルい！ だから今度は／／／ちゃんとして欲しい！！」

「わ…わかりました。／／／うわ、何だか…緊張するな…／
／／カレン…目を閉じてくれ！」

カレンも真っ赤な顔になりながらだけど目を閉じてくれた。そして、さっきと同じようにカレンの唇に優しくキスをした。

「カレン、好きだよ…」

「私もよ…」

僕達はもう一度お互いの唇にキスをした。

「あの～お二人とも…そろそろ上がって貰わないと他のお客さんが

入りにくいんですけど…」

「!?!」

僕達の後ろにいつの間にか生徒会の女性メンバーがいた…気のせいか全員の頬つぺたが赤かったけど

「何時からいたんですか!?!」

「確か、ライがカレンに告白してキスした辺りの会話だったかな?」

そんな時から居たのか!? ヤバい今になって自分の行動が恥ずかしいノノノ

「いや…ライもカレンも見掛けにもよらず…大胆だった。私もここまで予想してなかった。」

いや、原因作った張本人が何言ってるんですか?

「大胆…です。」

ニーナ!確かにそうだけど! 改めて言わないで!

「すごい…二人の愛の結晶!」

シャーリー!?! 気のせいか話が飛躍しすぎてない?

「その、ライさん!カレンさんも!お幸せに!」

ナナリー!?! 今、ここで言うセリフじゃないから!?!

「まあ、お暑いことまで!」

咲世子さんまで!?!

「まあまあ、みんな！ そろそろ一人さんを湯船から上がらせましょう！」

ミレイさんの一言で女性陣は脱衣場に向かった。

「僕達も上がるか…」

「ええ…」

僕達ミレイさん達が出ていた後で湯から上がってそれぞれの脱衣場に行った。

そして、露天風呂前の廊下に出た。

「それにしても女性陣が何で揃いも揃って来たんだ？」

「それは明日のピクニックでわかるわ」

そう言ったカレンは嬉しそうに語っていた。 明日のピクニックで何をするんだ？

「それじゃ、ライ！ お休み」

「お休み、カレン」

僕らそのままそれぞれの部屋に向かった。

旅行初日してはバタバタしたけど…こんなに楽しい思いは久しぶりだった。明日のピクニックも何か有りそうだけど、不思議と楽しみにしている自分がいる。 みんなという日々がいつか残りの記憶を取り戻す勇気に繋がる気がした。

続く

EP13 つかの間の休暇(3) (後書き)

今回はライの過去の話をしり当てる見ました。この蒼の奇跡でのライの過去の話近日中に出したいと思ひます。投稿時期はおつて連絡します。

また、誤字脱字がありましたらご指摘お願いします。

EP14 つかの間の休暇(4) (前書き)

すみません、話の展開が中々決まらなかったなので投稿が遅れました。

これからも度々と遅れるかも知れませんがなるべく切らさない様に頑張りたいと思います。 それでは本編どうぞ！

EP14 つかの間の休暇(4)

夢の断片11

戦場…

「ルナ…母上…ジン…レイ…」

血と死体独特の臭いが充満した戦場…そう…これは僕の一言で全てを失ったあの戦場……辺りを見渡していても…立っているのは僕以外いなかった。

そして、目の前にはかけがえない家族と友の死体が転がっていた。やがて戦場を洗い流すように雨が降りだした。僕は脱力して座りこんでいた時に雨の音しか聞こえない戦場の中で一人の人間が僕の方にゆつくりと向かって歩いて来た。

「
　　 ϕ \times \uparrow 」
目の前に来た奴は僕に何かを語っていたが…残念ながら何を言っているのか理解が出来なかった…僕は語りかけてる人物の顔も見ずに下を向いていた。

「
　　 £ ……………」
また同じように僕に語りかけてるが相も変わらず僕は先と同じ態勢のままだった。次第に僕の視界が狭まりだしたが…

いや……ダメだ！ここで逃げたら前に進めない！！ここで目を瞑っていたら真実がわからないままだ！！

「良い心がけだね！　ようやく僕が知ってる君に近づいたね！」

「!?!? この声はB・Bか?」

B・Bの声が聞こえた瞬間に先ほどまでの戦場の景色から真っ黒の景色に変わった。

「フッフ、そうだよ! もう一度確認だけど…君は本当にすべての記憶を取り戻したいの? 全部を思い出しても家族や友達はもう戻らないよ…それでも知りたいの?」

「確かに…本当のことを知ってもルナ達はもう会えないのは変わらない…自分のしたことの罪が消えるわけじゃない…けど、だからこそ! すべての記憶を取り戻さなければならぬ!」

「ふ〜ん…すべてを知ったら今の学園の生活が送れないかも知れないんだよ…記憶を取り戻せば…君はあの時みたいな戦いの日々に戻ることだってあるんだよ!」

「それでも、このまま何も知らないままの日々を過ごす分けにはいかないよ…このまま、残りの記憶の内容でみんなを傷つける存在なら尚更だよ! 自分の過去とは向き合えないと前には進めない!」

「わかったよ…近いうちに東京租界に行くよ! その時にすべてを話そう…だから、今は休暇を楽しめ!」

次第に景色が真っ白に染まりだしてきた。

「待ってくれB・B!! 君との記憶も曖昧なんだ!! それは残りの記憶と思い出さないと関係があるのか?」

「……相変わらず君のそう言う人のことで一生懸命の所は変わらないね……そのことも話すよ！ だから今は休暇を楽しんで行けよ！ 王としてでは無くてただの”ライ”として日々をね」

そして、等々何もかもが真っ白に染まりB・Bの声が聞こえなくなつた。

コードギアス 蒼の奇跡 EP14 つかの間の休息(4)

旅行2日目 AM11:35 河口湖周辺の公園

今日はこの旅行のメインの河口湖の公園でピクニックして過ごす予定だ。これは、みんなナナリーに少しでも外の世界に触れさせたい思いでしていたが…実際問題、こここの所のブリタニアと黒の騎士団の戦いの日々によりエリア11がピリピリした状況になっている。

しかも、この旅行のメンバーに黒の騎士団の総帥のゼロことルル・シユとそのエースパイロットのカレンにこっちはエリア11の副総督の専任騎士の僕とスザクが居るのだから…事情知っている僕としては気にしない状況ではない。だけど、B・Bの言葉を聞く限りではひよつとしたらみんなと別れなければならない状況になるかもしれない。だから、今はこの旅行を存分に楽しもう！

「それにしても、いい天気で良かったわ！」

「会長の場合は天気が雨だろうと嵐だろうと関係無さそうですけど」

「ちょっと、ルルーシュ！いくらなんでも私は嵐の時までやることは思わないわよ！」

『雨の時は何かやるのですか！？』

『思わずルルーシュとミレイさん以外のメンバーが思わず突っ込んでしまった。』

「でも、会長さんの言うとおり今日は良い天気で良かったですね！カレンさん！」

「そうね、せっかくのピクニックなのに雨だったら嫌だもんね。ねえ〜カレン！」

「ちょっと！ 何で私に振るんですか？」

『だってねえ〜』

何だがカレン以外の女性陣が声をそろえてカレンをからかっていたが：何だか昨日のリヴァル達と同じだがいったい何なんだろう？

「まあ〜、ライも良かったよな！ 天気が悪かったらこのピクニックもダメだったんだし！」

「そうだね！ …でも、大丈夫だったと思うよりヴァル！ 天気予報でも晴れだって言ってし、カレンと出かけてる時はいつも晴れだったし」

「ちょっと、ライ！」

「えっ？ 何か不味かった？」

『へえ、いつもですか』

何だかカレンは頭を抱えていたが僕は何かイケない事を言ったただろつか？　つと言うよりも昨日からみんなして声をそろえるけど…何か企んでるのか？

「まあ、お二人さんのことは置いてそろそろこの辺りでシートを広げましょう！」

僕達はフジサンと河口湖が見える位置にシートを広げてみんな寛いでいた。辺りは秋が近いために木々が赤と黄色で色めいていた。

「秋か…」

「どうしたんだいライ？」

「ああ、僕がアッシュフォード学園に迷い込んで結構時間がたったんだなってしみじみ思ってたね」

「考えたら、ライが来て結構経つんだな」

「本当だね！　今思えば色々あったな…特にライについては」

「ハハハ、そうだねライは結構見かけによらず無茶のことをしてたよね！」

「酷いな、スザク！　君の無茶には言われたくないよ！」

「でも、ライさんも無茶だと思います！」

「ナナリーまで言っつ？」

「仕方ないだろ事実なんだから、学校の理科室の火事なんかそうだ。」

「そうそう、あれにはビックリしたわ！ ライが火事の中でカレンを助けに行ったなんて、あれ以降はカレンのファンクラブの人達がまた、ガツカリ君・しょんぼりさんが続出したもんね！」

「本当、映画の話みたいでロマンチックよね！ 私もそんな燃える展開のような恋がしたいな！」

「それで、助けられたお姫様のカレンさんはその時の感想はどうなのよ。」

ミレイさんがカレンに肘を突くように迫って来た。

「ええ、いや／＼／＼ その、凄く嬉しかった！」

「ええ／＼／＼！ それだけ？ ライが体張ってあの炎の中に飛び込んで助けに来たのそれは無いでしょうカレン！ 昨日みたいのことは無かったの？」

『昨日？』

今度は男性陣が声を揃えて聞いてきた。

「ちょっと会長！ 何を言い出すんですか！！ あれは昨日が初めてで……」

「あら、私は昨日としか言っていないけど、そうですか、昨日のあれは初めてだったんですか？」

『えっ！ あ……いや／＼／＼』

「やばい、昨日のことを再び思い出して僕とカレンはお互い顔が赤くなり始めていた。」

「それからしばらく、みんなから（主にミレイさん、シャーリー、リヴアル）僕達のことではばらくからかっている間にちょうどお昼の時間になった。」

「さて、みなさん！そろそろお昼にしましょうか！」

「そうやって咲世子さんはある箱を出してきた。」

「咲世子さん…これは？」

「はい、これはミレイ様のアイデアで男子の皆さまにはこの箱に入っているおにぎりをこちらにいる女性陣の誰が作ったか当てて貰います！」

「えー！！、俺達もですか！？」

「成程…、それで、昨日、俺が調理場を手伝おうとした時に門前払いしたのはこれが狙いだっただけか？」

「そうなのか？ だから、昨日、咲世子さんがお弁当を作ることを知っていたんだ。」

成程…昨日の咲世子さんが慌てっていた理由がこれの仕込みのためだったのか… あれ？ それで、何でルルーシュ達がニヤニヤしていたんだ？

「それで、会長！ 見事当てた場合と外れた場合は何ですか？」

「相変わらず素っ気ないわねルルーシュわ！ まあ良いや！ 見事

当たった方には生徒会の女子メンバーの手づくり弁当を差し上げます！もちろん外した場合は……こちらに入っている罰ゲーム様（失敗作）の食品を食べてもらいます！！」

そう言っ出てきたのは黒い箱と女性陣が作ったと思われるお弁当箱が入ったバスケットが現れたが、あの黒い箱から異臭とは違う何だかドス黒いオーラの様なものが出っっていた。

『（おい、何なんだこの差は！明らかにあの黒い箱は食べ物じゃなくて毒物でも入っそうだぞ！！）』

今、男性陣が心の声の一つになって訴えていた。

「ミレイさん…質問良いですか？」

「何、ライ？」

「そのおにぎりを当てるのは全員の分を当てるのですか？ それとも一人をあてるのですか？」

「そうね、細かいルールの説明がまだだったわね！ ルールは簡単で、男子は目隠しをして箱の中から3つのおにぎりを取ります。

それを食べて作った人を当てる。チャンスは三回までね！ 後このおにぎりの中にはハズレもあるから注意して選ぶように！ 以上！！」

「成程、ようは3つのおにぎりの中で1つでも良いから作った本人を当てればこっちの勝ちで、外した場合はこっちの負けか！ しかも目隠しをすることで見た目では誰が作ったかは分からないから、判断基準はおにぎりの握り具合と具のセンスでその人物を当てるのか？」

「多分、ミレイさんのことだ、殆どがハズレにしてくるだろうな…」

「しかも、こう言うゲームは最初と最後がキツイパターンだよな」

リヴァルの一言で僕達に緊張感が流れていた……………そして

『最初はグー！ じゃんけんポン！！』

結果は……………

「え〜と、一番手はリヴァルで二番手はルルーシュで三番手はライでラストがスザクで良いわね！！」

「クツソ〜！ 何で俺はじゃんけんが弱いんだ！」

リヴァルはブツブツと文句を言いながら目隠しして準備をしていた。

『（それにしても、スザクとリヴァルがじゃんけんの時にチョッキを出す癖があったお蔭で最悪の事態は免れたな！）』

僕とルルーシュはリヴァル達がじゃんけんを出す癖を知っていたので一回目は勝ったお蔭でハズレを最も食べるポジションから免れていたんだけど……………

「それではリヴァル！まず一つ目のおにぎりどうぞ！…」

リヴァルは勢いよく食べたが……………一向に反応がない

「おい……………リヴァル？」

ルルーシュが軽く肩を叩いたがそのまま倒れてしまった。

『リヴァル！……！』

どうやら、食べたおにぎりで気絶したみたいだけど……いったい何を入れたんだ……！

「それでは続いてはルルーシュはです……！」

「何！ つづけるのですか？」

「え……、せっかく私達が一生懸命作ったお弁当をただで食べさせるつもり……！」

「その代償で俺たちが倒れても良いのですか？」

「なら中止にする？ せっかくナナちゃんも一生懸命に作ってきたのにね……！」

「何！？、 ナナリーも作っていたのか？」

「ハイ、 私は咲世子さんに手伝って貰いながらですけど……！」

「フツ、良いだろう！ この俺が勝負事で逃げる分けがない……！ 何よりナナリーが作ったお弁当をお前ら二人にやらん……！」

『（うわ……） すごい、シスコンぶりだな……（）』

などつと僕達が心の中で思っていたことは黙って居ておこう。

「それではルルーシュ！ 1つ目のおにぎりどうぞ……！」

ルルーシュはリヴァルの時とは違い小さな声でブツブツと言いなが

ら目隠した状態でおにぎり（恐らくナナリーの）を探していた。

「これだー！！！！」

そして、ついに一個目のおにぎりを口にした。

「さ〜〜で、これは誰が作ったおにぎりでしょうー！」

「か…」

「か？」

「か〜〜ら〜〜い！！！！！！！！！！」

ルルーシュはフジサンにでも響くぐらいに大声で叫んでいた。

「残念！ カライさんはうちのメンバーにいません！！ さて次行
つてみようー！」

何と言つ惨いゲームなんだ！

「つ…次こそは…」

ルルーシュは再びおにぎりに手を付けた。

「さあ〜このおにぎりは誰が作ったでしょう？」

「これは（中身はゆで卵だ！ 普段なら明らかにハズレだが…あの
2つに比べると緩く感じる！つまり、これは当たりの可能性が高い
…問題は誰が作ったかだ…握り加減からして力強かったからナナリ
ーとニーナの線ではない！ カレンも、こちらでは猫を被っている
からカレンも消える…残るは会長とシャーリーか…だが会長にして
は芸がない…なら答えは…）シャーリーが作った！」

「正解！」

「何で私だとわかったの？」

「シャーリーが料理が苦手なのは知ってるからな。だから、単純にゆでるだけのゆで卵を選ぶのが予想が出来た。」

「さすが、ルルーシュね！ それじゃ見事に当てたルルーシュはシャーリーのお弁当を贈呈します。」

ミレイさんがバスケットの中からシャーリーが作ったお弁当をルルーシュに渡した。

「その…私は料理苦手だから…あんまり期待しないでね！」

強気のセリフの割には手をモジモジしていたシャーリーだった。多分、不安なのかな？でも、ルルーシュなら

「開けても良いか？」

「ええ！？ あっ…うん、どうぞ！」

シャーリーの了解を聞いてルルーシュはお弁当箱のふたを開けてみた。中身はサンドイッチとミートボールとポテトサラダにおにぎりの具に入ってたゆで卵だ。

「ありがとう！ 後で美味しくいただくよ！」

「うん、（あれ、何で嬉しいんだろ？ ルルーシュとはそんなに仲良かったわけじゃないのに…）」

何だかルルーシュとシャーリーの間に久しぶりにいい空気に成っていた。

「さて、次はライだね。」

等々、僕の番か…よし！頑張つてカレンのお弁当を当てよう！

「これかな？」

僕は取りあえずすぐにおにぎりを口の中に入れたが…ゴリ

「……（何だこれ？ 表面は堅いが…中は生焼けだった…多分、から揚げだろう…これは恐らくハズレだ！） ハズレですか？」

「残念！ それはニーナが作りました！」

ええ！？ これ当たりなの？

「ニーナ…これは普通の油で揚げたのか？」

「いえ…バーナで焼きました……」

「そうなんだ…（から揚げするのにバーナって聞いたことないよ！ ああ…どうしよう、このミニゲームは完全に作った本人の趣味嗜好が分からないと危ない…次こそは…） 次はこれだ！」
僕は迷わずに次のおにぎりを取って口にした。

「さあ…誰が作ったおにぎりですか？」

「これは…カ…」

「カ…」

「カオス…！」

僕は思わず倒れ込んでしまっていた。 何だこれは…セシルさん

のといい勝負なおにぎりだ……正直意識が保つのがやっとだ。

「まさか…リヴァルに続いて大外れのやつに当たるなんて……きつい様なら棄権する？」

さすがの僕の様子でミレイさんを始めつとするメンバーが心配懸けていたが……

「つ…次…行きます!!」

僕はみんなの心配を無視をして次のおにぎりを食べていた。

「これは（このにぎり具合に塩加減にこの小さい海老フライは確か天むすだったかな…これを作ったのは）カレンが作りました。」

「正解!!」

「さすが、ライ！いとしの彼女の手料理を良く当てました！カレンっと言う決め手はズバリなんですか？やはり、一番良く食べたことがあるからですか？」

「ハイ！カレンの料理はおいしいですし、何よりも心が温かくなると言うのか…心が落ち着くっと言うか…とにかく、カレンの料理は優しさがあるので大好きです。だから当てられました！」何だこの感想はすいぶん支離滅裂だな…カレン怒ってないかな？

「いや、相変わらずストレートだね……」

「リヴァルがお前の素直さに尊敬できる理由が分かる気がする。」

「…大胆です。」

「何かこつちまでドキドキする」

「ライさんって本当にすごいですね！」

「若いって良いですね！」

「？ スザク、僕は何か変なこと言ったかな？」

「いや…ただ、君の素直な気持ちに関心しただけだよ！」

「カレン、僕は変なことを言ったのかい？」

「もう…！ 何で、ライはそんな恥ずかしいことをいつもサラって言うの…！」

「いや、思ったことを口にしたただけなんだけど…変だったかな？」

「変とかじゃなくて…その…何で思ったことをそのまま口に出来るの？」

「それは知って貰いたいからかな？ ありのままの僕を…」

「ライ…」

「これは、カレンに限ったことじゃないけど…ここにいるみんなには記憶のない僕をありのままに受け入れてくれたから…そんな僕に出来るのはありのままの感謝の気持ちを伝えることしか出来ないからね。 たまに自分でも照れくさいことを言ってるのは自覚はあるけど…伝えたくても伝わらない思いをするのは伝えることよりも辛いのは分かるから」

僕はまたルナ達のことを思い出していた。　伝えたかったことは山ほどあったのに色んな理由を付けて伝えなかった…そして、失って始めて気付いた時は…もう、取り戻せないものになった。　今度は後悔したくない！

「だから、今の僕の思いを伝えたいんだ！」

「全くライには敵わないわ」

「カレン…」

「あの…良い所で申し訳ないけど私達のことを忘れてませんか？」
いつの間にか僕とカレンの前に少々あきれた顔したミレイさんを筆頭に全員がやれやれっと表情だった。

「それじゃ、時間が無いからカレン！ライにお弁当を渡して！」
ミレイさんはバスケットを渡してミニゲームを続行していた。
多分、僕達のことを気を使って…

「ライ！　これ、お弁当！！」

僕はカレンからお弁当を受け取った。

「開けて見て良いかな？」

「ええ」

そして、開けてみたお弁当の中身はおにぎりとハンバーグときゅうりとプチトマトを串でさしたのとウサギの形をしたリングのお弁当だった。

「いつも思うけどすごいねカレンは料理の天才じゃない？　ありが

とうカレン！ おいしくいただくよ！」

「どういたしまして」

それからの僕達の結果はスザクは天性の勘のおかげか一発でナナリーのおにぎりを当てたのでルルーシュからものすごい形相で睨んでいたが……僕達はその後、それぞれが獲得したお弁当を堪能していたが……リヴァルは再び意識の世界に突入していったのだった。

僕達がこの旅行に堪能してる間にも……僕にとってのこの日常を過ごせる日々が徐々に迫って来ていることはこの時の僕は知らなかった。

サガミ湾　とある倉庫

「まったく、この呼び出しとは相変わらずだな」

「そう目くじら立てないでよC・C！　今回はふざけてる場合じゃないんだ。知ってるんだろシャルルの目的も？」

「……」

「だんまりか……まあ良いや！　それはこっちで何とかするだろう！　君は自分の契約を果たすことを考えとけば良いよ！　ただ、ライの件については協力してくれ！」

「私に何をさせるつもりだ！」

「簡単だよ！　君の干渉の力で彼の深層深く眠る記憶を呼び起させる！」

「そんなことして、何を教えたいんだ？」

「戦うべき、敵かな？」

つかの間の休暇編 完

EP14 つかの間の休暇(4) (後書き)

この話の展開にやく一カ月近くかかりました。なるべくこのように詰まらない様に執筆を頑張りたいと思いました。

最後にライの過去の話を書く際にこの蒼の奇跡の章を分けて書くべきか…もう一本別に書くべきでしょうか？ 出来たらみなさんの意見が聞きたいです。

また誤字脱字がありましたらご指摘の程お願いします。

EP15 向き合つべき真実(前書き)

今回は次回のために短めにしました。 今回の投稿から章ごとに分けてみました。

至らない所もありますが楽しんで読んでもらえると幸いです。

EP15 向き合っべき真実

あの旅行から3日が過ぎたがB・Bからの連絡は来ない。僕自身も東京祖界やゲットーで探したかったが…学園祭まで1週間ちよつとなので準備に覆われる毎日で時間がなかった。

「はあく、終わらないな」

僕は今、学園祭に必要な物の買い出しの帰りに休憩がてらで公園のベンチで休んでいた。

「こここのところ学園祭の準備で忙しいのは良いけど…黒の騎士団が忙しいのはな」

何よりも気になるのはルルーシュとカレンがサボる日が増えていた。これは黒の騎士団が何らかの準備で動き出していることがわかる。こつちもそろそろ例の政策『行政特区日本』を本格的に行動しなければダメだが…あれはあくまでも最終目的でそれまでの前段階に手を焼いている状況だ。

「お前は相変わらず悩んやでるな。そんなんだったら、どこそこの童貞坊やと変わらんぞ！」

僕が座っているベンチの横に緑の髪の少女が出て来た。

「君は……」

「C・Cだ！ しばらく会わん内に名前を忘れるとは随分酷い男だな。」

「いや、そうじゃない！ 何で君がここに居るんだって聞こうとしただけだ！ 代々、僕がC・Cの名前を覚えていることを知ってて聞いているんだらう？」

相変わらず人をからかうのは好きみたいだが…それにしても久しぶりだな。

「何だ、ちよつと見ない間にからかいのない男になったな。」

C・Cは僕が思った反応しなかったのでいじけた表情をしながら僕の隣に座った。

「ところで、僕の質問には答えてないけど…もしかしてB・Bのことか？」

「ああ、あいつに伝言を頼まれてな」

「伝言？ わざわざC・Cを使ってか？」

「お前の疑問はもつともだが…その辺の察してやれ！ 私は忙しいから手短に話すぞ。」

「ああ…」

「あいつは今夜にお前と会いたいそうだ！ 場所はこの紙に書いてある。行くかどうか最終確認をしたいそうだ。」

「急だな………わかった！ 今夜その場所に行くよ。」

僕がそう言うつと気のせいか一瞬暗い表情だったC・Cだったが、すぐに待ち合わせ場所が書いてある紙を僕に渡してベンチの席を立った。

「確かに渡したぞ。それじゃ、なあ」

C・Cはそのまま公園を出っていた。

「自由気ままだな…さて、場所は…ゲッターの廃工事が…いよいよか」

僕は公園から見える夕日を眺めていた。まるで、日常の終わりを告げる合図に見えたからかもしれない。

コードギアス 蒼の奇跡 EP15 向き合つべき真実

A・m・ 0時15分 ゲッターの廃工事

この工事はシンジユク事変の時の現場なのか銃痕の跡やほんのすこし血の臭いがしている。正直、人が寄らない場所に独りの少年が立っていた。

「久しぶりだねライ！」

少年の見た目は僕と同じ歳ぐらいで瞳はルルーシュと同じアメジストで月と同じように輝くブロンズ色の髪に後ろに一つで束ねている。しかし服装は黒のコートだった。

「久しぶりだな…気のせいかな髪型が違うのか？」

「ああ…これね、まあ…事情があつてね。被らない為にね。まあ…細かいことは後にして……単刀直入に聞くけど覚悟は出来てるんだね？」

「ああ…覚悟は出来ている！」

正直、不安だった。確かに残りの記憶も気になるのは本当だ。

だけど…その為に今ある幸せを捨てるかも知れないことには躊躇いがあった。それでも、このままは嫌だった。ここには大切な人達が居る！もう助けられる存在じゃなくて守れる人になりたい！

そのためにも自分の存在にはつきり知りたい！　ただ、それだけなんだ。

「いい目だ！　わかったよ！それじゃ、残りの記憶を思い出させよう。」

「その前に聞きたい！　僕の記憶喪失は君の人為的にやったものなのか？」

「当たらずとも遠からずかな。」

「なあ！？」

「理由を話しても構わないけど…見てからの方が早いでしょう」

B・Bは僕の頭に手を乗せ始めた。

「わかった。その記憶はもう一度最初から見れないのか？」

「最初からって君があこのホラントに来た時からかい？　出来なくは無いがどうして？」

「いや、覚悟はしたもの…いきなりは不安だから…その」

「ハイハイ、わかったよ！　ったく！　人使いが荒いな」

B・Bがそう言うってから僕の意識が薄れてきて、足元から崩れてきた。

「ありがとう……ピッツ！」

そして、僕の意識が途切れていた。

「ありがとうはこっちだよ！ まさか、もう一度あだ名で呼んでくれるなんて…」

「どうやら、行ったみたいだな
倉庫の入り口からC・Cが現れた。」

「ああ…まったく、いつも驚かせてもらうよ！ライにわ」

「…アイツは記憶の中から戻って来れるのか？」

「フツ、 気になるなら君も彼の記憶の中をしてみるか？ 案外、君が求めていた答えが出るかもよ」

「ほお、お前がそこまで言うとはな…まあ、暇潰しがてらに見てみるか！」

C・Cはライの額に手を乗せ始めた。

「思わぬお客が来たみたいだけど、見て行きな！…あの激動の時代に！」

序章編終了

EP15 向き合つべき真実(後書き)

今回はようやくB・Bの対面ができました。B・Bの見た目のイメージはV・Vをルルーシュと同じ歳ぐらいの見た目で髪を1つ括りにしました。B・Bの話は追々に出したいですが、次回からはライの過去の話しです。ゲームでのライの設定を自分なりにアレンジを加えて話を書くので不安ですが読んでくれる皆さんに楽しんでもらえるように頑張りたいと思います。いつものことですが誤字脱字の方がありましたらまた教えてもらえると助かります。

追憶編 設定（前書き）

この章での主な登場人物や世界観の紹介です。

追憶編 設定

追憶編の主な登場人物

主人公 ライ・デイ・ブリタニア（登場時は8歳）

外見 ゲームと同じ

性格 「蒼の奇跡」より少々好戦的な性格である。

備考 頭脳と身体能力はこの当時から神童と言われるほどの実力者だがまだまだ幼いため油断しがちな面が見える。

ルナ・デイ・ブリタニア（登場時は5歳）

外見 ライと同じ青色の瞳で髪型は幼少時はショートカットで髪色は黒でウェーブが掛かっている。

性格 泣き虫なのに誰よりも負けず嫌いな所があつて少々意地っ張りな面がある。だけど、誰よりも兄であるライのことを気にかけている。

備考 不器用のため折り紙でも中々出来ないため兄のライに桜などを作つて貰うように頼む可愛い面もある。

ヒナタ・デイ・ブリタニア（登場時26歳）

外見 黒髪ロングヘアで瞳の色はスザク達と同じ緑色の瞳

性格 外ではあまりしゃべらず控えめだが家族や親しい人達の前では陽気で優しい人物である。

備考 ヒナタは当時のブリタニア領土と日本の外交関係を円滑するために日本貴族の皇家に嫁がされるように命じられた。彼女自身最初は嫌々だがいつの間にか夫であるダリルに引かれていた。ヒナタは代々、日本貴族の皇家を守護する一族のために女性でありながら剣術などの武術に長けていたために後にライとルナに武術を叩きこんでいた。

ダリル・ビィ・ブリタニア (登場時36歳)

外見 銀色のオールバックで蒼い瞳

性格 厳格で他人対して冷たく接する。

備考 彼は皇族でありながら本家に留まらず領土拡大のために異国の地に足を踏み入れ剣ひとつで見事領土を奪ってその功績ですでに「英雄皇」とブリタニアに浸透するほどの実力者だった。

ガロン・エーゼン (登場時57歳)

外見 褐色の肌で白髪をお下げのように束ねていて瞳はアメジストの色をしている。

性格 表面上を紳士的に接するがどこか謎めいてる人物

備考 彼は元々ダリルの副官だがダリルの要請でライの専属執事となる。ダリルともに戦場を駆け抜けたため剣の実力も確かなもので遠方から剣の指導を欲しさに来る貴族も居るくらいの実力者だ。

アルヴァス・A・ブリタニア (登場時12歳)

外見 金髪のウェーブが掛ったショートカットで藍色の瞳

性格 強いものには媚びへつらい、弱い立場の人間には大きな態度をとる、小者の性格

ハーリ・P・ブリタニア (登場時10歳)

外見 茶髪のキノコヘヤーでぼちやりな体系で薄水色の瞳

性格 典型的な腰巾着

オーガン・T・ブリタニア (登場時10歳)

外見 赤髪のス オヘヤー で薄緑の瞳

性格 ハーリと以下同文

世界観

時代設定は本作のおよそ200年前の皇歴1800年代のお話。

ブリタニアが独立し始めた頃で内政が不安定のため、各々の領地で独自の文化を築き始めている時代。

主な舞台

ホラント領土 1792年に第二十皇子であるダリル・ビィ・ブリタニアが僅か20の若さで3万の兵力で2ヶ月で占領下にした。

しかし、隣国との戦争が多いためか内政はあまり上手く行っていないために貴族達が好き勝手な生活を送っているために市民の被害が日に日にエスカレートしていつている。

追憶編 設定（後書き）

残りの登場人物は随時登場次第に追加します。

E P O 始まりの地 ホラント（前書き）

皇歴1790年 第74代ブリタニア皇帝 アレス・ファン・ブリタニアは領地拡大のために王位継承権を持つ者に各国の侵略を命じた。それが後の第一次世界大戦になるまでに発展していった。そう時代はまさに戦乱の時だった。これはそんな戦乱の中で生き抜く孤独の王の物語だった。

E P O 始まりの地 ホラント

コードギアス 蒼の奇跡 追憶編 E P O 始まりの地 ホラ
ント

皇歴1808年 ホラント領土の離れ島

ここは、ホラント領土の王のダリルの別荘地の島で僕たち家族が住んでいた。僕達がここに住んでいる居る理由は、僕達家族が純粹のブリタニア人じゃないためだからだとこの当時の母さんがそう話っていた。僕はこの時は父さんは母のことが…僕達のことを家族だと思っていないからだと考えていた。それでも僕は寂しいとは思わなかった。この島には僕と妹のルナと母さんが居たから……あの日が来るまでは……

皇歴1808年 6/15

「ヒナタ様、陛下からお使いで参りました。 ガロンです！」

「お久しぶりですね、ガロンさん！」

この日、珍しく本土領土から使いが来た。彼の名前はガロン・エーゼン、父であるダリル・ビー・ブリタニアの副官である。母さんから聞いた話ではガロンは剣の実力者で遠方の地からわざわざ指導して貰いに来る人が居るぐらいだそうだ。ただそれ以外のガロンことは年に一度父からの手紙を届けるぐらいなのでそれほど詳しく無い。ガロンが訪れたのはいつもの経過報告に来たと思っていた。

「兄上！ 兄上！」

僕がガロンのことを気にかけている時に僕の服の袖を引っ張って声をかけたのは僕の妹のルナだった。

「どうした、ルナ？」

「兄上！ また桜を折って下さい！ 何度やっても私にはわかりません！！」

ルナの手からはクシャクシャになった折り紙が出ってきた。

「またかよ……、（まあ、ガロンの話はいつもの経過報告だと思っし……聞かなくても良いか） わかったよ！ 僕達の部屋に行こう！」
僕はルナを連れて自分達の部屋に入っていた。

〓1時間後

「後はここを折って……折りかしてやれば………完成！！」
僕は何十個作ったかわからない桜をテーブルの山に置いた。

「ここを………こう折るのですか？」

「そうそう、 後をここをこの向きにして折る。」

「そして、ここで………で………出来ました！！」

ようやく桜を折ることが出来るようになったルナは部屋中を駆け回っていた。

「今度は一人で折れるように頑張れよ！」

「ええ〜！！ 兄上は私にもう、折り紙を教えてはくれないのですか？」

「いや、そうじゃないけど…僕もこの所、剣術と武術の稽古が厳しいからあんまりルナに構ってやれなくなってきたから…」

僕たち兄妹が物心がついた時から母に色々なことを教えてくれた。母から教わるのは主に日本の武術や剣術が多かった。勿論、ブリタニアの文字や読み書きやそれ以外の英才教育もやっているけど…僕は母から日本の話が聞くのが好きだった。特に一番興味を持ったのは日本でしか見れないピンクの花を咲かせる桜の話は僕もルナも好きだった。そんな環境のためか、僕達はブリタニアに居ながら日本文化も学んでいた。

コン、コン

ちょうどその時に母さんが入って来た。

「ごめんね、お話が長くなって」

「母上！！」

母さんの姿を見た途端にすぐにルナは全速力で母に抱きついていった。

「また、父上からの経過報告ですか？」

「そのことなんだけどね…あなた達に大事な話があるの！！」
いつになく真剣な表情の母に僕とルナは静かに聞いていた。

「実は父…陛下から私達に本土領土に来て欲しいって通達命令が来たわ…」

「それって、僕達が父上が居られる所で住めってことですか？」

「ええ……そうなるわね」

「そんな！ 勝手すぎるよ！！ 散々、僕達のことをほったらかしにしていたのに突然、一緒に住むなんて無茶苦茶だよ！！」

「ライ！ 確かに私達家族はルナが生まれてからこの別荘地に住んでいて陛下とご対面はされていませんけど、陛下自身は私達のこと気にかけていましたよ！」

「だったら、何で経過報告以外での手紙が一通もないのですか？
いくら今は戦争中だからと言っても手紙を書くぐらいはできるのに
！！！」

「陛下に事情があるの、今は難しいかも知れないけどいつかライにも分かる時が来ます！」

「僕はいつか先の話しじゃなくて、今、の話をしているのです！！
母上……こうは言いたくはないのですが……父上……陛下が僕達をこちらに住まわしたのは僕達が、純潔、ではないからじゃないんですか！！！」

当時のブリタニアは領土拡大の士気を高めるために純血主義、階級意識が根強かったため母さんのような異国の民や僕とルナのようなハーフは迫害の対象だった。

「ライ……確かに私達三人は純粹のブリタニア人ではありません。
そして、私達のようにブリタニア人じゃない人達を迫害する人が多く居るは本当です。」

「それなら、何とか断れないのですか？ このまま行けば迫害の対象になるのは目に見えてるじゃないのですか！ 僕は母上やルナが迫害の対象になるなんて耐えられない……」

「ライ、あなたの気持は嬉しいわ…でもね、私はこれは私のためでもあり、ライ、ルナのために成ると思うの。」

「私のため？」

「ええ！」

そう言った母はルナを自分の膝の上に座らせた。

「確かに、ライの言うとおり…恐らくお城に行けば私達のことを目の敵で見る人達が居ると思う。 の中には私達のことをいじめる人達もいるかもしれない。 けれどね、私はライにもルナにもこの迫害…いえ、差別の問題にはちゃんと向き合って欲しいの！」

「どうして？」

ルナは不思議そうな瞳で母を見ていた。

「それはね… 今、世界中であちこちで戦争が起きてるの、その理由は様々なの…でも、私はその中で最も悲しい理由は自分と違う人間だからつと言う理由で人を傷つけること！」

「母上…」

「でも、あなた達は生まれながらにして2つの民族の血が流れていて。 だから、辛いことですが…そう言った人達に私達の他民族の人達を認められる社会を作って欲しいの」

「でも母上…僕達に何が…このホラント領土の王位継承権は僕達二人にはありますが…僕達がこの国…ブリタニアを動かす力なんて…無いですよ!」

「ライ、別に王位を継げなくても出来ることはあります。」

「え？ それは一体何ですか？」

「まず、私達のことを知って貰うこと！ そして、頑張ることです。ただ、それだけです。」

「そんな…無茶苦茶です母上!」

「母上、頑張るって私達は何をしたら良いのですか？」

「それはね、みんなの力に成ることよ！ そうね、とにかくお手伝いをすれば良いかな？」

「それならルナにも出来る…!」

「ふざけないでください!」

僕は思わず怒鳴ってしまった。僕にはそれは迫害する奴らの言いなりの成れと言われているような気がしてそれが悔しくて大声を出してしまった。

「兄上……」

ルナは僕の態度にビックリして…そして、泣きそうな顔で僕の心配してくれていた。

「（こんな、泣き虫なルナが迫害するような連中のいる所に連れて行くななんて……）僕は本土に行くのは反対です！……！」
僕はその場から離れるように部屋から出って行った。

: : : : : : : : : : : :

「何で、僕達家族をそつとして置いてくれないんだ？ 僕達は王位継承権なんかいらさない！ 三人で仲良く暮らせれたら良いだけなのに……」

僕はあのまま部屋を出て行った勢いで屋敷を出て島の見晴らしの良い海岸に来ていた。 出た時が夕方のせいか夕焼け凄く綺麗だった。

「ライ、ここに居たのですか？」
後ろから母上が現れた。

「母上……」

パシーーン!!!

「?!」

僕は母上に叩かれたことにビックリして戸惑っていた。

「どれだけ、私達が心配したと思ってるのですか!」

怒って喋っていた母上だったが、表情は泣きそうな顔をしていた。

「その……ごめんなさい。」

そう言った瞬間に母上は僕を優しく抱きしめてくれた。

「いいのよ! でも、二度とこんなことをしないで…あなた達二人が居なくなったら私はもう生きて生けないから……」

叩かれた僕が泣きそうなのに僕を抱きしめながら母上の方が泣いていた。今、思うと僕の前で母上が泣いたのが最初で最後かも知れない……

「母上! 兄上!」

どうやら、ルナも僕のことを探してくれて居たようだ。恐らくこの場所もルナが言ったのだろう。ここは良く二人で遊んでいた場所だから…

「ルナ、ごめんな、心配かけて」

「うん、私、凄く心配しました! だから、兄上は私に黙って何処かへ行かないでください!」

ルナは母上とは違って頬を振らまして怒っていた。何だかこの時ばかりは母上よりかはルナの方が強いかもっと考えていた。

それから、しばらく僕達は三人で夕日を眺めていた。

「先の話の続きだけどねライ！ 私はね、あなた達二人に実は助けられたの？」

「？ あの母上、話が見えないのですか？ さっきの本土領土とどう関係があるのですか？」

正直、この時の母上の気持はわからなかった……それがわかるのに後200年ぐらい先に成るなんて

「私はね、自分の故郷とこのホラント領土の貿易の関係を良くするために陛下の所に嫁がれたの……だから、最初は苦い思いも沢山あったの……でも、そんな時にあなた達に二人に出会えたからこの遠い異国の地でも私は頑張って生きられるの」

「（そつか……だから、僕達二人が居ないと生きられないって言ったのはそういうことなのか）辛かったんですね、母上」

「母上、可哀そう」

「辛くなかったつとえば嘘になるけれど……でも、あなた達二人に出会えたことに比べれば小さいものよ！」

その言葉でルナは嬉しくて母上に甘える様寄り添っていた。

「だから、ライ！ ルナ！ これだけは言います。例えこれからどんなことがあっても私達家族は見方だから、あなた達はどんな所でも傷ついて泣きそうな時、辛い時は私の所に来て泣いたり甘えなさい！ だから、あなた達はその分、困った人達を出来る限り助けなさい！ いじめたり・裏切ったりされるかも知れない……それでも自分からはいじめたり・裏切ったりはしないで！」

そうやって正しいことをすれば、いつか私達、家族以外にも見方が
出来ます。　そうすれば周りからの私達の見る目が変わります！
だから、私達は一週間後に本土領土に出発します。」

「ハイ！　私、母上と兄上が居るならどこでも行きます！！」
ルナは元気よく返事して立ち上がっていた。

「……しょうがないな…母上とルナだけじゃ心配だ！　僕は向こう
に行つて陛下に認めて貰つて、僕達の異国の血が入つてる人達が認
めて貰える国にするために頑張ります！！」
僕もルナと同じように立ち上がつて叫んでいた。　まるで決意表明
のように叫んでいた。

そう、この本土に行く時から僕達家族……ホラントを巻き込んだ戦
いが始まるとは僕達三人は予想たりともしていなかった。

続く

E P O 始まりの地 ホラント（後書き）

今回からいよいよ、ライの過去の話です。 正直、ちゃんと書けているか不安ですが何とか完結させるように頑張ります。 投稿は不定期になりますが何とか更新を切らさない様に頑張ります。

E P O ・ 1 0

英雄皇 ダリル（前書き）

何とか書けました。

「母上！ お城はまだですか？」

ルナは長時間の馬車にも飽きて母上に駄々をこねていた。 僕達、
家族三人は陛下の命令で本土領土の移住の道中だった。

「もう少しで着きますよ」

「ええ〜！、さっきも聞いたよ〜！！」

「本当に後、少しだから」

「……………」

「どうしたのですか、兄上？」

「？、どうしたルナ！」

「いえ、兄上がボーと空を眺めていたので」

「ああ…、ちよつとな…」

「ちよつとつて何ですか？」

「ルナが気にすることじゃないよ！ ほら！見えて来た」

馬車の外から大きな城壁の建物が見えて来た。 城壁の周りには
幾つもの町が見えていた。 何よりも城の城壁近くに大きな川が見え
ていた。 このホラント領土は土地柄が豊かのため水や食物の問題

は無かった……貴族や皇族は…… この時の僕は自分達の生活が誰に寄って支えられているのか、この様な事が世界中に起きていることを知らなかった。 やがて、何時の日か、これが母上が僕達に託した願いだと知るのもう少し後のことだった。

コードギアス 蒼の奇跡 追憶編 E P O ・ 1 0 英雄皇 ダリル

皇歴 1 8 0 8 6 / 2 3

ホラント領土 本城の謁見の間の前

「第六王妃、ヒナタ・デイ・ブリタニア！ 第四皇子 ライ・デイ・ブリタニア！ 同じく第八皇女 ルナ・デイ・ブリタニアのお〜〜
〜〜な〜〜〜〜〜り！！！」

扉の傍の兵士が僕達の紹介をして扉を開け僕達を誘導した。 僕達目の前の玉座には剣1つでこの国の領土を納めた『英雄皇 ダリル・ビィ・ブリタニア』が堂々とした態度で座っていた。 剣1つでこの領地を納めただけのこともあり、風格と威圧感が凄いため、初めて顔合わせをするルナは震えていた。 僕はルナの手を握り締めながら父の前で片膝を着いてお辞儀をした。

「よく来た、長旅御苦労。 後はガロンから説明があるから、それじゃー！」

そう言った途端に父上は席を立ち僕達を素通りして扉の方向に向かっていた。

「待って下さい陛下！」

僕は立ち上がり、父上の余りの態度に引きとめてしまった。

「何だ、挨拶は済んだぞ。 用があるのならガロンに伝えとけ！」

私は忙しいんだ！ 悪いがお前たちに構ってる暇などない！」

淡々と話す父上にイラつきながらも僕は喰いついて話していた。

「何故、自分達、家族をこちらの本土領土に招いたのですか？」

「お前達が使用していたあの島は我が軍の訓練所にするためだ！」

「そんなことのために僕達をこちらに招いたのですか？」

「ライ！いい加減にしなさい！！」

母上は僕を抑える様に手を引っ張っていたが

「あの島は私の領地だ！ どう使おうが私の勝手だ！ これで、満足か？」

「つまり、陛下お一人のお考えのご判断として処理してよろしいでしょうか？」

「ああ！ 下らん時間を作らせるな！」

父上はそのまま、扉の向こうに歩んでいた。僕は父上の対応の冷たさにただ、ただ、悔しかった。

「ライ様、お部屋のご案内がしたいのですか……」

「そうね、ライ…まずは部屋に行きましょう…これからの話もあります。」

「兄上……」

ルナは心配な表情で僕の服の袖をつ掴んでいた。

それから、僕達はガロンの案内で自分達が生活する部屋に来ていた。荷物の設置は本土の使用人の人達がやっていてくれたので僕はゆ

つくり休むことが出来た。

「ライ様！ 先ほどの陛下に対する態度は今後は控えてもらいたのですが…」

「そうよ、ライ！ あんなことをしたら本当は死刑になることだってあるのよー！」

「そうですよ、兄上！！ ルナは心臓がバクバクでした！！」
僕は三人にしばらくの間、酷い注意を受けていた。

「すみません、以後気をつけます！」

「それならよろしいのですが……あつ！ そうです。 本日より私がライ様の執事を担当させて貰います！」

　　と僕に深くお辞儀をしたガロンだが、正直驚いていた。 ガロンは父上がこの領地での戦いで右腕的存在で今の今まで王の副官として務めていたのに、それが、混血である僕の執事なんてなるとは思ってもしなかった。

「何で、ガロンが僕の執事なんだ？ ガロンは陛下の副官として務めていたのに…」

「いえ、副官の業務は今まで通り行いますが…実は、ライ様につきはずの執事が……先日の戦闘の被害にあつたみたいでして…変わりの執事を探す時間はないので私に白羽の矢が立ったのです。

幸いのことにはヒナタ様の文でライ様の教育のレベルはかなり高いものでしたので私の手間も幾分楽なので問題はありません」

「先ほどの戦闘とは北のですか？」

「はい…あそことは、我が領地になる以前からこの辺りの領地と戦をしていたようで…、彼らとはかく数が多く我々も苦戦をしています。」

「そうですか…現状は良くありませんが…ガロンさんがライの執事なら安心です。どうか、ライをよろしく願います。」

「お誉めにいただき光栄です！」

「兄上をよろしく願います！」

ルナは母上のまねをしてガロンにお辞儀をしていた。

「僕は執事がガロンで助かったよ！ これからよろしく願います！」

「はい、ライ様！」

そう言ってガロンは僕達の部屋から出っていた。

「母上、僕達はこれからどう言つ風に過すのですか？」

「そうね、ライは教育面や政治面をガロンさんに教示してもらつて…体術はしばらくは私の元で基礎を学んで貰います。ルナは取りあえず教育はしばらくは私が引き受けるところかしら」

「なるほど、しばらくは当たり澤のない生活を過すつてことで良いでしょうか？」

「ええ、そういう方向に行きましょう！ さあ、て、お昼まで時間

がありますね…何かしたいことはある？」

「ルナ、お城の外を探検したいです！」

「おいおい、来て早々、お城の外かよ…今日はお城の中で過さないか？」

「ええ〜！ 嫌です！ せっかく馬車の移動が終わって自由なのですよ！ こんなにも良いお天気なのにもつたいないです！！」

「そうね、お城の外の近くに川があるからその近くでも遊んできたらどう？」

「わかったよ、とりあえず川辺の近くまで行こうか？」

「ハイ！ 兄上！！！」

そう言ったルナは自分の荷物の中からこの間の誕生日で僕からプレゼントの白い羽帽子を取りだしてきた。

「何だよルナ、それが被りたかったのか？」

「だって、せっかく兄上が選んでくれた物ですもの！ 被らないともつたいないじゃありませんか！！！」

「分かったよ…それじゃ行こう！」

「ハイ、母上行ってきます！」

ルナは僕の服の袖引っ張って走り出した。

「待てルナ！ そんなに急がなくても大丈夫だって！！！」

そして、僕達は川の方に向かって出発したのだった。

ホラント領土 城周辺の川

僕達がお城を出ってしばらくして川の音が聞こえて来た。

「兄上！、川です！！ 早く早く！！！」

「ハイ、ハイ！ 聞こえてるよ！」

ルナは僕を急かす様に呼びかけるが対する僕はのんびりと歩いていた。まるで、うさぎとかめのような感じであった。

「兄上！ 見て下さい！！ 大きい川です！！！」

「……確かに……これはすごいな……」

この川は『ズーメイ川』と言われていて、太古に農作物を守る竜が居たつと言う伝承があつて農作物を豊かにする恵みの水と言う意味をこめて守護龍の名前から取つたと伝書にかかれていたが、遠くから見たら真っ白の激しい川かと思つたが、流れは激しいが川は紺碧色をしていて川底が見えなかった。

「何だが、不思議の川だな……遠くでは白く見えたのに……近くでみたらこんなに真っ青だとはな……」

「兄上！ ここのお水美味しいです！」

「ちよつとルナ！ 川の水の流れが激しいんだからあんまり水辺に近づくなよ！」

「大丈夫ですよ！ そんなに心配しなくても、私もそれくらいのことには分かります！！」

「はいはい…それじゃこのあたりを適当に……………」

「おい、何でお前達が居るんだ？」

僕達の前に三人の少年が現れた。

「（アルヴアス・ハーリ・オーガン……………何でお前達が…クソ） 兄上方々こそ何故こちらに？」

この三人は僕達の異母兄弟でアルヴアス・A・ブリタニア、ハーリ・P・ブリタニア、オーガン・T・ブリタニアでとにかく僕達のことを目の敵にしている連中だ。

「ここは、俺たちの遊び場だ！ よそ者は出っけて行け！！」

『そうだ！そうだ！』

「アルヴアス兄さん、僕達は今日来たばかりなので、細かい諸事情は把握しておりませんので…」

「黙れ！！ 俺はお前のことを兄弟だと認めてないぞ！！ この汚れた血め！！」

そう言った瞬間にアルヴアスは僕に殴りかかった。

「兄上！ 大丈夫ですか？」

ルナはすぐに僕の元に駆け付けたが、この状況下じゃ悪くなる何かしないか…

「ああ、大丈夫だ！ 唇を切っただけだ。」

僕は立ち上がりその場を立ち去ろうとしたら

「おい、このまま黙って帰ることは無いだろう？ ……ちょっと、憂さ晴らしに付き合え!!」

今度はハーリが殴りにかかってきた。

「ガツ!! ……正直、こいつらの攻撃はよけれないことは無かったがルナに当たることあるうえで僕が庇うしかない…それに、ここで下手に反撃をしたらルナや母上の迫害がエスカレートしてします。母上とルナは当時もブリタニアには居ない東洋人の顔立ちのためか父方に似ている僕より酷い仕打ちを受けるのは目に見えている。

だから」僕はただ、ひたすらにあいつら三人の攻撃をルナに当たらないよう必死に盾になりながら耐えていた。

「この異国民が!」

「生意気なんだよ!! 混血の分際で!!」

「おまえは父上のおかげでここに居られるんだ! じゃあなかったらお前達なんか奴隷なんだからな!! 八八八八八八!!!!!!!!!!」

耐えろ!! あいつらが呆れるまで耐えろ!!

「もう、やめて下さい!! 兄上があなた達に何をしたつというのですか?」

ルナ? 何言ってるんだ! やめるそんなことをしたら…

「はあ? 何だよお前?」

「おいおい、こいつ子供のくせして羽帽子なんかしてるぞ!!」

「何だよ！ この混血の分際でこんな帽子なんかかぶりやがって！
」

「返して下さい！！ それは兄上が私のために買ってきてくれた帽子です！！」

「じゃあ！！ あそこまで取ってきてみるよ！！！」

アルヴアスはルナの帽子を流れの激しい川に投げ捨てた。僕は全速力で川に飛び込んでその帽子を取りにいったが……川の流れが早く激しいため、そのまま僕は川の中に潜り込んでしまった。

「兄上！！！！」

ルナの声が聞こえたがダメだ……殴られた痛みで声が……体が動かない……意識が……

続く

E P O ・ 1 0 英雄皇 タリル（後書き）

誤字脱字の方がございましたらご指摘お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5674u/>

コードギアス 蒼の奇跡

2011年12月8日02時59分発行